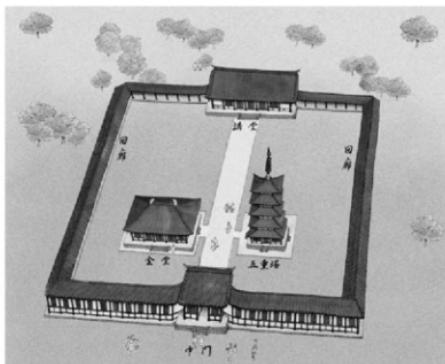


# 山王廃寺

～平成20年度調査報告～



山王廃寺想定図

2010.2

前橋市教育委員会





1 塔基壇の版築の様子(25トレンチ・南東から)



2 塔基壇と整地の様子(25トレンチ・北東から)

巻頭図版2



3 塔跡の瓦積基壇 (25トレンチ西壁・北から)



4 塔跡基壇周辺玉石敷の状況 (25トレンチ・北から)



5 塔跡の版築層と心礎据え付け痕（25トレンチ西壁・東から）



6 塔跡西側の版築層（24トレンチ・南西から）

巻頭図版4



7 3号建物跡 (B-3) 版築層 (27トレンチ・南西から)



8 2号建物跡 (B-2) 全景 (22トレンチ・北から)

## はじめに

山王庵寺がある総社・元総社地区は、宝塔山古墳に代表される総社古墳群をはじめとして国府、国分僧寺、国分尼寺などの諸施設が建ち並ぶ古墳時代から律令制の中枢地域といえます。

今回、報告書を上梓する山王庵寺は、大正年間に五重塔の塔心礎が発見され、昭和3年に国史跡に指定されました。また、昭和56年度の調査で、「放光寺」とヘラ書きされた瓦が出土しました。一片の文字瓦の発見により国指定特別史跡山上碑、上野国交替実録帳にでてくる「放光寺」と山王庵寺が見事に一致しました。

また、伽藍配置についても東に五重塔、西に金堂が並ぶ、奈良斑鳩法起寺の様式を採用したものと推定されています。出土品には、全国的にも稀有な石製鶴尾や根巻石をはじめ、綠釉陶器セット、銅椀、建物の屋根に葺かれた多量の瓦が発見されています。さらに、平成9・11年度には、塑像をはじめ壁画や天蓋、須弥山など塔本塑像を構成していた破片が3,000点以上も発見されました。分析により法隆寺の塔本塑像に匹敵することが判明し、山王庵寺の歴史的価値を再認識する資料となりました。

しかし、古代東国を代表する山王庵寺については、その詳細な実態が把握できていないのが現状です。この問題を解決し、後世にわたり保存・活用するため基礎的な資料を得るために文化庁、群馬県教育委員会の指導を受け「山王庵寺等調査委員会」を平成12年に発足させました。毎年検討会を開催し、平成18年度から5カ年計画で継続的な確認調査を行うことになりました。

今回、報告を行う第3年次の調査は、前年に引き続き回廊の発見や主要建物の範囲確定に努めました。幸いにも、今回の調査によって南辺の回廊幅を確定でき、新たな建物を検出することができました。

最後に、本事業の推進にあたり、国・県・市の関係各位のご理解とご協力に対して深く感謝する次第です。また、地元の総社町山王自治会はじめ土地所有者の皆さんからも惜しみない協力をいただくことができました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

平成22年2月

前橋市教育委員会

教育長 佐藤博之



## 例　　言

- 1 本報告書は、『総社・元總社地区の古代遺跡整備に伴う山王庵寺範囲内容確認調査計画書』に基づき、5ヵ年の調査計画（平成18～22年度）の3年次調査として、平成20年度に実施した発掘調査の報告書である。
- 2 遺跡は群馬県前橋市総社町2408番地ほかに所在する。
- 3 発掘調査は、山王庵寺等調査委員会の指導のもと前橋市教育委員会が実施した。調査の要項は以下のとおりである。
- ①発　掘　調　査　期　間　　平成20年9月1日～平成20年12月17日
- ②整　理　・報　告　書　作　成　期　間　　平成20年12月18日～平成22年1月28日
- ③調　査　組　織　（平成20・21年度）
- 山王庵寺等調査委員会
- 1 委員会
- 指　導　坂井秀弥 [20]（文化庁文化財部記念物課主任文化財調査官）・渡辺丈彦 [21]（同文化財調査官）、郡 和良（群馬県教育委員会文化財保護課長）
- 顧　問　中澤充裕 [20]・佐藤博之 [21]（前橋市教育委員会教育長）
- 委　員　長　松島榮治（前橋市文化財調査委員）
- 副委員長　阿部義平（国立歴史民俗博物館名譽教授）
- 委　員　員　須田勉（国立大学文学部教授）、阿久津宗二（前橋市文化財調査委員）、梅澤重昭（同）、井上唯雄（同）
- 幹　事　松村和男 [20]・飯塚 聰 [21]（群馬県教育委員会文化財保護課文化財活用係指導主事）、深澤敦仁（同埋蔵文化財係指導主事）、依田三次郎 [20]・戸塚良明 [21]（前橋市教育委員会管理部長）、柿沼輝彦 [20]・斎藤明久 [21]（同總務課長）、栗原和彦、右島和夫 [21]、篠田 薫
- 2 調査部会
- 幹　事　松田 猛（群馬県教育委員会文化財保護課課長補佐兼埋蔵文化財係長）、田中広明（埼玉県埋蔵文化財調査事業団主查）、出浦 崇（伊勢崎市教育部文化財保護課埋蔵文化財担当主査）
- 3 事務局（担当課 前橋市教育委員会文化財保護課）
- 課長（幹事）　篠田 薫　　文化財整備指導員 栗原和彦 [20]・右島和夫 [21]
- 課長補佐 小島純一（兼文化財保護係長）、前原 豊（兼埋蔵文化財係長）
- 係　員　　山下歳信、岩丸展久、阿久澤真一、神宮 聰、池田史人 [20]、綿貫綾子 [20]、福田貫之 [21]、清水亮介 [21]　　（20年度～20年度、21年度～21年度。職名は20年度）
- ④発　掘　・整　理　担　当　者　　池田史人 [20]　綿貫綾子 [20]　山下歳信 [21]　福田貫之 [21]
- 4 本書の編集は池田・綿貫・山下・福田が行った。原稿の執筆分担は下記のとおりである。
- I・IV・V・VII…池田 II・III・VII…山下・福田・綿貫 VI…栗原  
VIII-2 井上唯雄氏に原稿を賜った。
- 5 発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。
- 石原義夫、岩木 樹、大澤俊夫、岸フクエ、齊藤亀寿、須田博治、須藤 豊、高澤京子、角田 慶、徳江 基、渡木秋子、中澤光江、平林しのぶ、星野和子、湯浅たま江、湯浅道子
- 6 発掘調査にあたり、大塚孝明氏・都丸準之助氏・阿久津喜男氏・都丸甲子郎氏・都丸美子氏・都丸武弘氏・阿久津勤氏・日枝神社の土地を借用した。また、総社町山王自治会および同会員・関口省造氏の全面的な協力があった。
- 7 調査および報告書作成にあたっては下記の諸機関・諸氏の御教示・御指導をいただいた。
- 文化庁記念物課、群馬県教育委員会文化財保護課、群馬県立歴史博物館、財團法人埋蔵文化財調査事業団  
阿久津宗二、阿部義平、飯塚 聰、石川克博、出浦 崇、井上唯雄、梅澤重昭、大橋泰夫、岡部 央、岡本東三、朽津信明、齊木一敏、坂井秀弥、須田 勉、高井佳弘、田中広明、田辺征夫、富澤敏弘、南雲芳昭、深澤敦仁、松島榮治、松田誠一郎、松田 猛、山中敏史、横澤牧子、四柳 隆、渡辺丈彦
- 8 発掘調査で出土した遺物は、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

## 凡　　例

- 1 拝図中に使用した北は、座標北である。
- 2 拝図に国土交通省国土地理院発行の1：20万地形図（宇都宮・長野）、1：5万地形図（前橋）を使用した。
- 3 本遺跡の略称は、20A135である。略称の後に枝番を付し、トレンチ番号を示した。本文中では、トレンチの略称としてTを用いた。
- 4 遺構及び遺構施設の略称は、次のとおりである。

H…古墳～奈良・平安時代の堅穴住居跡	B…建物跡	W…溝跡	
D…土坑	P…ピット・柱穴・貯蔵穴	I…井戸跡	O…落ち込み
- 5 遺構・遺物の実測図の縮尺は、次のとおりである。

遺構	全体図・遺構配置図…1：100、1：150、1：200、1：300、1：400などを適宜用いた。
遺構断面図	1：60　住居跡…1：60（竪…1：30）
遺物	土器…1/3・1/4　鉄製品…2/3　瓦…1/2・1/4・1/5・1/6を適宜用いた。
- 6 計測値については、（　）は現存値、〔　〕は復元値を表す。
- 7 遺物観察表については、以下のとおり記述した。
  - ①層位は遺構出土の場合、「床直」・「底面」：遺構底面より10cm未満の層位からの検出、「覆土」：床面より10cm以上の層位からの検出の2段階に分けた。
  - ②口径、器高の単位はcmである。現存値を（　）、復元値を〔　〕で示した。
  - ③胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0～1.9mm）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名等を記載した。
  - ④焼成は、基本的に極良・良好・不良の三段階とした。ただし、須恵器について酸化焰焼成によるものは「酸化焰」と記載した。
  - ⑤色調は土器外面で観察し、色名は『新版標準土色帳』（小山・竹原1967）によった。
- 8 土層記号中に使用した略号は下記のとおり。

B…ブロックの略	C・FP…As-CやHr-FPなどの白色軽石
----------	------------------------
- 9 遺構平面図の――――は推定線を表し、- - - - -は堅微面の範囲を表す。
- 10 スクリーントーンの使用は、次のとおりである。特別な場合は図版ごとに片例を設けた。

遺構平面図	版築… 	粘土分布… 	炭化物分布… 	灰分布… 
遺構断面図	構築面… 	版築… 		
遺物実測図	須恵器断面… 	煤付着… 		
- 11 主な火山降下物等の略称と年代は次のとおりである。

As-B	（浅間B軽石：供給火山・浅間山、1108年）
Hr-FP	（榛名二ヶ岳伊香保テフラ：供給火山・榛名山、6世紀中葉）
Hr-FA	（榛名二ヶ岳渋川テフラ：供給火山・榛名山、6世紀初頭）
As-C	（浅間C軽石：供給火山・浅間山、4世紀前半）
- 12 表紙に使用した挿絵は、津金澤吉茂（1983）による。屏に使用した題字は、江原垂穂氏の揮毫による。

# 目 次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	4
1 遺跡の立地	4
2 歴史的環境	4
III 調査方法と経過	7
1 調査方法	7
2 調査経過	9
IV 基本層序	10
V 伽藍の調査	13
1 塔	13
2 回廊	19
3 金堂北側建物跡（B—2号）	25
4 寺城	30
VI 出土瓦	33
はじめに	33
1 軒丸瓦	33
2 軒平瓦	36
3 丸・平瓦	41
4 道具瓦	44
5 文字瓦	47
6 渦状紋・戲画など	52
7 重弧紋軒平瓦について	55
8 桶巻き作り三重弧紋（IIKB—1）軒平瓦の特徴	62
VII その他の遺構と出土遺物	68
1 壁穴住居跡と出土遺物	68
2 掘立柱建物跡	79
3 その他の出土遺物	80
VIII まとめ	87
1 成果と課題	87
2 鉄と関連する跡の検討	88
3 伽藍の検討	89
4 結語：今後の課題	90

## 挿図目次

挿図目次	
Fig. 1 山王庵寺位置図	2
Fig. 2 過年度調査と推定伽藍配置	3
Fig. 3 周辺遺跡	6
Fig. 4 2m小グリッドの呼称	7
Fig. 5 グリッド設定図と平成20年度調査区	8
Fig. 6 基本層序模式図と各トレント層柱状図	10
Fig. 7 平成20年度主要伽藍調査全体図	11・12
Fig. 8 塔周辺遺構配置図	14
Fig. 9 塔跡調査区断面図	15
Fig.10 25トレント玉石敷・基壇瓦積実測図	17
Fig.11 塔跡平・断面図	18
Fig.12 南面回廊推定地周辺遺構配置図	21・22
Fig.13 27トレ平・断面図と31・31aトレ断面図	23
Fig.14 31トレI-1・O-1実測図	24
Fig.15 B-2号建物跡周辺遺構配置図	26
Fig.16 B-2号建物跡	27
Fig.17 22・23トレント断面図	28
Fig.18 P-2204号柱穴	29
Fig.19 21・22トレント全体図と位置図	31
Fig.20 これまでに出土した軒瓦	34
Fig.21 軒丸瓦	35
Fig.22 軒平瓦1	37
Fig.23 軒平瓦2	38
Fig.24 丸・平瓦	43
Fig.25 叩板痕跡	44
Fig.26 道具瓦	45
Fig.27 開木蓋と思われる瓦片	46
Fig.28 「方光」銘刻印文字	48
Fig.29 文字瓦1	50
Fig.30 文字瓦2	52
Fig.31 波状紋・戯画など	53
Fig.32 大和姫寺跡重弧紋軒平瓦の復元工程 模式図	56
Fig.33 重弧紋軒平瓦部分名称	57
Fig.34 三重弧紋IIKB-1の瓦当断面3種	58
Fig.35 瓦当厚計測値による度数分布図	59
Fig.36 大和古式重弧紋軒平瓦と山王庵寺 重弧紋(II KB-1)軒平瓦	63
Fig.37 H-30号住居跡・出土遺物1)	68
Fig.38 H-30号住居跡出土遺物2)	69
Fig.39 H-31号住居跡	69
Fig.40 H-31号住居跡出土遺物	70
Fig.41 H-32号住居跡	70
Fig.42 H-32号住居跡出土遺物	71
Fig.43 H-33号住居跡	71
Fig.44 H-34号住居跡・出土遺物	72
Fig.45 H-35号住居跡・出土遺物	72
Fig.46 H-36号住居跡・出土遺物1)	73
Fig.47 H-36号住居跡出土遺物2)	74
Fig.48 H-37号住居跡	75
Fig.49 H-37号住居跡発掘・出土遺物	76
Fig.50 H-38号住居跡	77
Fig.51 H-39号住居跡・出土遺物	78
Fig.52 H-40号住居跡	79
Fig.53 B-4号掘立柱建物跡	79
Fig.54 21トレント出土遺物	80
Fig.55 22トレント出土遺物	81
Fig.56 25トレント出土遺物	82
Fig.57 27トレント出土遺物	83
Fig.58 30トレント出土遺物1)	83
Fig.59 30トレント出土遺物2)	84
Fig.60 31トレント出土遺物	85
Fig.61 32トレント出土遺物	86
Fig.62 軒丸瓦XV式	88
Fig.63 炉跡(D-2205)	89
Fig.64 山王庵寺伽藍復元図	91

## 表 目 次

Tab.1 これまでの調査経過.....	1	Tab.13 H-34号住居跡出土遺物観察表.....	72
Tab.2 調査区の面積と調査目的.....	7	Tab.14 H-35号住居跡出土遺物観察表.....	73
Tab.3 平成20年度検出遺構の概要.....	9	Tab.15 H-36号住居跡出土遺物観察表.....	75
Tab.4 平成20年度調査出土軒丸瓦分類集計表.....	40	Tab.16 H-37号住居跡出土遺物観察表.....	76
Tab.5 平成20年度調査出土軒平瓦分類集計表.....	40	Tab.17 H-39号住居跡出土遺物観察表.....	77
Tab.6 出土文字瓦一覧.....	51	Tab.18 21トレンチ出土遺物観察表.....	80
Tab.7 波状紋・戯画など.....	54	Tab.19 22トレンチ出土遺物観察表.....	82
Tab.8 重弧紋軒平瓦分類表.....	61	Tab.20 25トレンチ出土遺物観察表.....	82
Tab.9 重弧紋軒平瓦の瓦当面のつくり方 について.....	64	Tab.21 27トレンチ出土遺物観察表.....	83
Tab.10 H-30号住居跡出土遺物観察表.....	69	Tab.22 30トレンチ出土遺物観察表.....	84
Tab.11 H-31号住居跡出土遺物観察表.....	70	Tab.23 31トレンチ出土遺物観察表.....	85・86
Tab.12 H-32号住居跡出土遺物観察表.....	71	Tab.24 32トレンチ出土遺物観察表.....	86

## 図 版 目 次

巻頭図版	PL. 3
1 塔跡 (25トレンチ) 2 塔跡 ( 同 )	1 塔跡基壇周辺の整地の状況 (25T西壁・北から)
3 塔跡 ( 同 ) 4 塔跡 ( 同 )	2 25トレンチ調査区全景 (北から)
5 塔跡 ( 同 ) 6 塔跡 (24トレンチ)	3 住居跡 (H-40) 全景 (25T・北から)
7 3号建物跡 (27トレンチ)	4 住居跡 (H-40) 断面 (南東から)
8 2号建物跡 (22トレンチ)	PL. 4
[遺構]	
塔 跡	1 24トレンチ調査区全景 (西から)
PL. 1	2 塔跡西側の白色粘土層 (24T・南西から)
1 塔跡基壇全景 (25T・北から)	3 塔跡西側の白色粘土層断面 (24T・南西から)
2 塔跡基壇の版築と外装の瓦積み (25T西壁・北東 から)	4 塔・金堂間のIb層下遺物出土状況 (24T・北東か ら)
PL. 2	5 金堂整地層とビット (P-2409) 断面 (24T北壁・ 南から)
1 25トレンチ調査区全景 (南から)	建物跡
2 塔跡基壇外装瓦積みの状況 (25T・北から)	PL. 5
3 塔跡地堀り込み部断面 (25T西壁・東から)	1 27トレンチ調査区全景 (北から)
4 版築剥離面で確認された搾き棒痕 (25T・南から)	2 B-3号建物跡版築土断面 (27T・南西から)
5 塔心礎え付け穴断面 (25T西壁・東から)	3 B-3号建物跡の礎石据付跡 P <sub>1</sub> (27T・南から)
6 基壇周辺玉石敷の状況 (25T西壁・東から)	4 B-3号建物跡版築土面状況 (27T・北から)
7 玉石敷の接写 (25T西壁・東から)	PL. 6

- 1 B-3号建物跡版築層断面 (27T・西から)  
 2 B-3号建物跡版築層断ち割り状況 (27T・南東から)  
 3 D-2702号土坑全景 (27T・南から)  
 4 27トレンチ南側擾乱状況 (西から)  
 5 27トレンチ南側東壁断面 (西から)
- その他
- PL.7  
 1 28トレンチ調査区全景 (北から)  
 2 H-37号住居跡竪 (28T・南から)  
 3 H-37号住居跡P<sub>1</sub>柱穴遺物出土状況 (28T・南から)  
 4 H-38号住居跡全景 (28T・北西から)  
 5 H-38号住居跡竪・貯蔵穴 (28T・南西から)
- PL.8  
 1 29トレンチ調査区全景 (南から)  
 2 30トレンチ調査区全景 (南から)  
 3 O-1全景 (30T・東から)  
 4 I-1全景 (30T・東から)  
 5 B-4号掘立柱建物跡全景 (30T・東から)
- PL.9  
 1 31トレンチ調査区全景 (南から)  
 2 I-1号井戸跡断面図 (31T東壁・西から)  
 3 I-1号井戸跡遺物出土状況 (北から)  
 4 I-1号井戸跡礎石出土状況 (北から)  
 5 南回廊版築状況全景 (31aT・北から)  
 6 南回廊版築層 (31aT・東から)
- 建物跡
- PL.10  
 1 22トレンチ調査区全景 (北から)  
 2 B-2号建物跡X-2213瓦敷 (22T・南から)  
 3 B-2号建物跡X-2214瓦敷 (22T・南から)  
 4 B-2号建物跡全景 (22T・北から)
- PL.11  
 1 B-2号建物跡版築層断ち割り状況 (22T・南東から)  
 2 地業南側掘り込み部断面 (22T西壁・東から)  
 3 版築層接写 (22T西壁・東から)  
 4 版築層北側断ち割り状況 (22T東壁・南西から)  
 5 地業北側掘り込み部断面 (22T東壁・西から)
- その他
- PL.12  
 1 22トレンチ調査区全景 (南から)  
 2 H-39号住居跡断面 (22T西壁・北東から)  
 3 H-39号住居跡P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>柱穴 (22T・南東から)  
 4 P-2204号ピット全景 (22T・南東から)  
 5 P-2204号ピット断面 (22T・南西から)  
 6 O-2202全景 (22T・西から)  
 7 O-2202断面 (22T西壁・北東から)
- PL.13  
 1 22トレンチ南側遺物出土状況 (北から)  
 2 炉跡 (D-2205) 全景 (22T・南から)  
 3 炉跡 (D-2205) 遺物出土状況 (22T・西から)  
 4 炉跡 (D-2205) 断面 (22T・西から)  
 5 23トレンチ調査区全景 (東から)  
 6 23トレンチ西側北壁断面 (南東から)  
 7 JD-2301号縄文土坑全景 (23T・北から)
- PL.14  
 1 21トレンチ調査区全景 (北から)  
 2 H-30号住居跡全景 (21T・西から)  
 3 H-30号住居跡竪 (21T・西から)  
 4 H-31号住居跡全景 (21T・西から)  
 5 H-32号住居跡全景 (21T・西から)
- PL.15  
 1 H-33号住居跡全景 (21T・西から)  
 2 H-34号住居跡全景 (21T・西から)  
 3 21トレンチ調査区南側全景 (南から)  
 4 O-1遺物出土状況 (21T・南から)  
 5 32トレンチ調査区全景 (32T・北から)  
 6 H-36号住居跡遺物出土状況 (32T・南から)  
 7 日枝神社前で記念撮影
- [遺物]
- PL.16 平成20年度調査出土軒丸瓦  
 PL.17 平成20年度調査出土軒平瓦1  
 PL.18 平成20年度調査出土軒平瓦2  
 PL.19 叩板痕跡、丸・平瓦、道具瓦  
 PL.20 文字瓦1、波状紋  
 PL.21 文字瓦2  
 PL.22 トレンチ出土遺物1  
 PL.23 トレンチ出土遺物2

# I 調査に至る経緯

山王庵寺は7世紀後半の創建と考えられる古代寺院である。その存在は大正年間、塔心礎が偶然発見されたことにより明らかとなった。これを嚆矢としその後、ふたつの石製鶴尾や七弁の蓮華紋をかたどった根巻石などの精巧な石造品をはじめ塑像、綠釉陶器のセットや佐波理碗、金銅製飾り金具、堂宇に葺かれた大量の瓦などが耕作や工事の際に続々と発見された。

山王庵寺における最初の調査は、大正10年の福島武雄氏による塔心礎の調査である。塔心礎は昭和13年に「山王塔趾」として国の史跡に指定された。その後、昭和49年から56年にかけ7次にわたる本格的な発掘調査が行われた。この調査では、とくに6次調査での金堂の検出および「放光寺」梵書の平瓦の出土が注目される。この瓦の出土により、山王庵寺は「山上碑」や「上野国交替実録帳」にみられる「放光寺」であることが有力視されるようになった。また、平成9～11年にも山王庵寺周辺の下水道敷設に伴い調査が行われ、このときには土坑から大量の塑像が出土している。これらの発見や調査、研究により、山王庵寺の歴史的価値が広く認められることになった。

Tab. 1 これまでの調査経過

年度	調査名	調査目的(箇所)/面積(m <sup>2</sup> )	調査直継要	文獻
S49 (1974)	第1次調査	寺域の確認	塔の北約110mで北門と考えられる掘立柱建築物(4次調査で倒壊もしくは食堂とされる)的一部分を検出した。	
S50 (1975)	第2次調査	塔北側施設の確認	寺内交通機関は検出されなかった。寺院創建以前(6世紀代)を主体とする壁穴式住居群が調査された。	前橋市教委 1976
S51 (1976)	第3次調査 設置確認	2次調査の壁跡(塔北東側施設) の確認	塔の北東から地盤に連絡するとみられる壁脚建物(壁脚群B)のほか、中世以降とみられる壁跡群Aが発見された。	前橋市教委 1977
S52 (1977)	第4次調査 壁脚建物の調査	寺域内に新たに出現した掘立柱建物の確認	塔の南西側に新たに出現した掘立柱建物であることが判明した。倒壊もしくは食堂と推定された。壁脚群Bは円筒形輪軸を用いた大型施設の構造とみられる。	前橋市教委 1978
S53 (1978)	第5次調査 周辺の道遺構確認	4次調査の壁跡(掘立柱建物) の確認	塔の東側から南北に走る壁跡が確認された。うち東は北東側施設とみられ、寺域に先行する建物であると考案された。	前橋市教委 1979
S54 (1979)	塔周囲(北・西側)の遺構確認	塔周囲(北・西側)の遺構確認	塔の南側から南北に走る壁跡(金堂と通す)、東西11.6m×南北11.7mの範囲で北側に走る壁跡は、法起寺式の伽藍配置であることが判明した。出土遺物では、「放光寺」梵書の平瓦が出土し、山王庵寺が「山上碑」や「上野国交替実録帳」にみられる「放光寺」である可能性が示されました。	前橋市教委 1980
S56 (1981)	第7次調査 塔・金堂の規模の確認、回廊の確認	塔・金堂の規模の確認、回廊の確認	塔の基部については一坪14mの規模であることが判明した。また、塔現段に敷設された白色粘土下から疊平瓦と富貴神寶瓦と呼ばれる施設とみられるものと、9世紀代に塔基礎群が整備された可能性の強いことが指摘されています(栗原2004)。金堂の規模・回廊については判明しなかった。	前橋市教委 1982
H9 (1997) I道路	山王庵寺等 I道路	(下水管理設に伴う調査)	塔・金堂の規模以上に寺域の道路と定位される施設と、さらに多量の明礬が出土した瓦類なども確認。諸説は金堂・塔の北20mから検出され、南西20m・南北22m以上の規模が推定された。金堂については東西4m、南北22mを超える規模になることが判明した。	前橋市教委 1998
H10 (1998) II、III道路	山王庵寺等 II、III道路	(下水管理設に伴う調査)	寺内交通機関は検出されなかった。	
H11 (1999) V道路	山王庵寺等 V道路	(下水管理設に伴う調査) 開削出土土瓦の調査	平成9年に検出された開削出土瓦を調査し、多量の瓦片に直理り女性像や神像形の面部など2,000枚。(9・11年度合計)をもとに断面形状が検出された。松田誠一郎氏の分野により、8世紀後半～9世紀初頭の作例で、塔の初期に設置される塔基礎群の一部であることが判明した。	前橋市埋文 2000
H18 (2006) 範囲内容調査	範囲内容調査	講堂・回廊東側・寺域北側の確認	講堂の範囲は東面11m、南面24.5mであることを確認。また、講堂東側で北面の面を確認し、3次調査の「壁脚群B」がこれにつながる東面面積であることが判明した。同時に、講堂の範囲を確認する可能であることを確認した。遺物は、瓦類瓦尾・漏斗瓦など。	前橋市教委 2007
H19 (2007)	範囲内容確認調査	金堂・西面回廊・南面回廊・ 寺域北側と南側/405	金堂は壁脚群B。白色土瓦を調査し、白色土瓦の範囲から東面面積は東西2.4m、南北14.4m以上と推測。また、金堂の北側に版瓦層が確認され建物の存在が明らかとなつた。回廊の東西横幅は79.7mであることが判明した。「方光」印の石柱付立柱点が立柱点である。	前橋市教委 2008

前橋市教育委員会では平成12年度に、これららの調査成果を受け山王庵寺および関連遺跡を調査し、保存と整備の方策を立てることを目的に「山王庵寺等調査委員会」を設置した。以降、17年度まで計6回にわたり、文化庁・県教育委員会の指導や専門家・学識経験者等の協力を得て委員会を開催し、既出資料の集約、調査から保存・整備までの基本構想、確認調査計画の策定などを行った。平成16年度の委員会では、「山王庵寺範囲内容確認調査計画」が審議され、これに基づき平成18年度より5ヵ年計画の調査が実施されることになった。

18年度は、①講堂範囲の確定、②回廊東側の確認、③寺域北限の確認を調査目的とし、9ヵ所にトレチを設定し、674m<sup>2</sup>を調査した。19年度は①金堂範囲の確認、②西・南面回廊の確認、③寺域の確認を目的として10ヵ所にトレチを設定し、計405m<sup>2</sup>あまりを調査した。なお、調査終了後の平成19年度に、史跡の追加指定と名称変更

I 調査に至る経緯

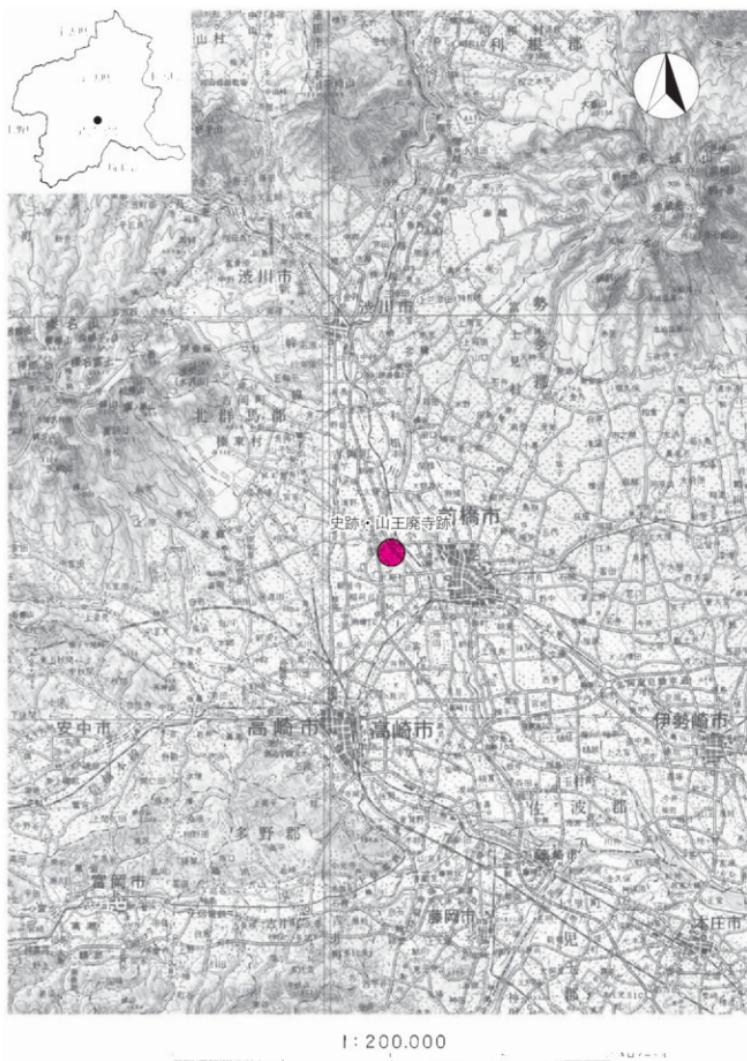


Fig. 1 山王庵寺位置図

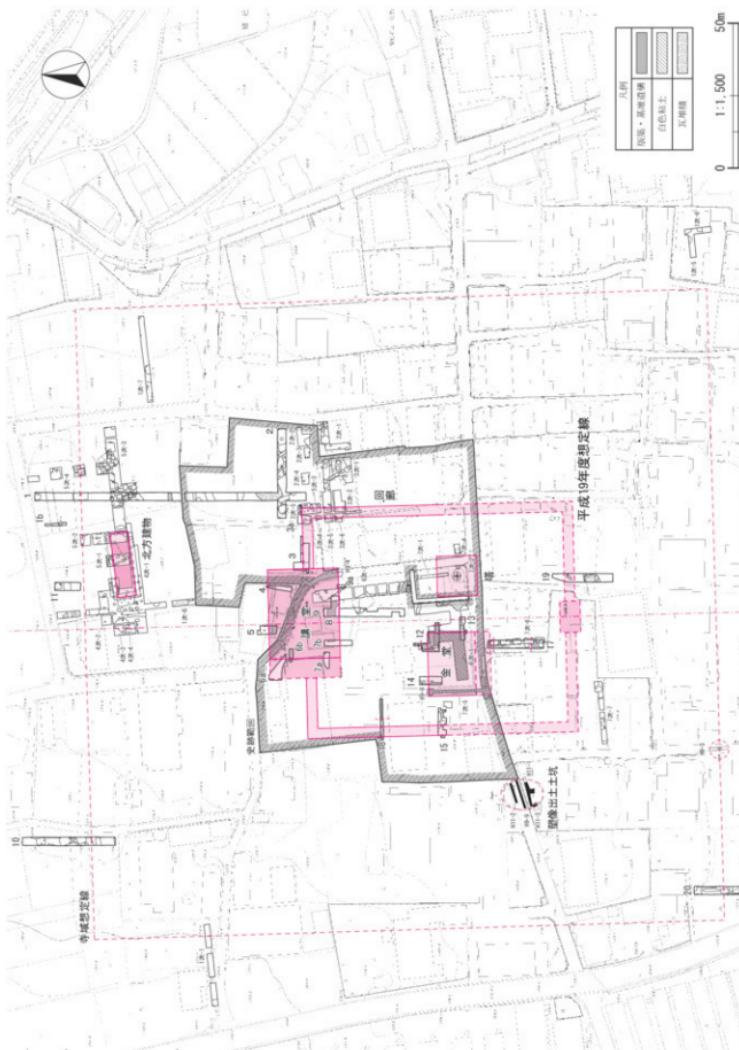


Fig. 2 過年度調査と推定伽藍配置

## II 遺跡の立地と環境

を申請し、平成20年3月28日付けで官報告示された。この結果、史跡名称は「山王庵寺跡」となり、指定面積は8,277.25m<sup>2</sup>に拡大した。

平成20年2月22日の調査委員会において、19年度の調査報告とともに20年度の調査計画が協議された。これにより20年度調査では、①塔跡の範囲確認、②南面回廊の確認、③金堂北側建物跡（B—2号建物跡）の範囲確認、④寺域北・南辺の確認を調査目的として12箇所のトレンチを設定し、計350m<sup>2</sup>あまりを調査することになった。

## II 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の立地

山王庵寺は、前橋市街地の西方、利根川を挟んで約4kmの地点、総社町総社2408番地ほかに所在する(Fig. 1)。

前橋市は、利根川が赤城・榛名の両火山の裾野を経て関東平原を望むところに位置し、地形・地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の前橋台地利根川右岸、南部から南西部にかけての前橋台地利根川左岸、東部の広瀬川低地帯という4つの地域に分けられる。前橋台地は、約24,000年前の浅間山爆発によって引き起された火山泥流堆積物とそれを被覆するローム層（水成）から成り立っている。前橋台地の東部は広瀬川低地帯と直線的な崖で区されていて、台地の中央には現利根川が貫流している。現在の利根川の流路は中世以降のもので、旧利根川は現在の広瀬川流域と推定される。台地の西部には榛名山麓の相馬ヶ原扇状地が広がり、榛名山を源とする中小河川が利根川に向かって流下し、台地面を刻んで細長い微高地を作り上げている。

遺跡地は、この相馬ヶ原扇状地から前橋台地への移行地帯に位置し、標高は127～130m付近にある。遺跡地北東縁には八幡川が、西侧約300mには牛池川が自然地形に沿って北西から南東に向かって流下している。遺跡は両河川に挟まれた東西幅約600mの微高地にあり、これらの河川との比高差は3～5mを測る。遺跡周辺の微地形は北西から南東へ向かって緩やかに傾斜する。

現在、遺跡地周辺には、西へ約0.6kmの地点に関越自動車が南北に走り、南側には国道17号が、東側にはJR上越線が走る。遺跡地東側には八幡川を隔てて吉岡バイパス（通称産業道路）が南北に走り、この道路沿いには大規模小売店やオフィスビルの進出が著しい。ただ、幹線道路から少し外れた本遺跡地は、周囲に田畠が広がり、住宅地には古くから残る養蚕農家が立ち並ぶという静かで落ち着いた環境である。

### 2 歴史的環境

山王庵寺周辺の元総社・総社地区は、古代上野国を中心として歴史的に重要な役割を果たしてきた場所であり、多数の遺跡が存在する。本遺跡の北東には総社古墳群があり、また南西1.2kmには上野国分寺、その東500mには国分尼寺、さらにその南東側には上野国府推定地がある。以下、各時代の様相について、周辺の遺跡分布から概観してみたい。なお、本文中の遺跡名の前に付した数字は、Fig. 3に対応するものである。

**縄文時代** 関越自動車道建設に伴い調査された高崎市国分町～北原町にかけての(5)上野国分僧寺・尼寺中間地域（以下、中間地域）では、前期～晩期にわたる遺物が出土し、中期（加曾利E式）を主体とする集落跡が検出されている。このほか(9)北原遺跡では中期後半頃の土坑が検出されている。区画整理に伴い近年継続的に調査が行われている(26)元総社蒼海遺跡群でも、前期（諸磯b式）および中期（加曾利E式）の住居跡が検出されている。これら、周辺で確認されている遺構・遺物は前期・中期のものが主体であるが、元総社公民館建設に伴う調査（平成18年度）では、晩期（大洞B-C～C2式）の住居跡が検出されている。

**弥生時代** 弥生時代の調査例は少ない。中間地域では後期集落のほか、方形周溝墓2基が検出されている。(10)下東西遺跡でも後期の住居跡が検出されている。また、当時の稻作の様子を示す(31)日高遺跡があり、水田跡

のほか集落・方形周溝墓等が検出されている。

**古墳時代** 山王庵寺の北から東にかけて總社古墳群がある。この地域の首長墓と考えられ、5世紀末～6世紀末にかけて前方後円墳5基（遠見山古墳・王山古墳・二子山古墳など）が展開し、7世紀には愛宕山古墳（前半）・宝塔山古墳（第3四半期）・蛇穴山古墳（第4四半期）と3基の巨大な方墳が続く。

(14) 二子山古墳は全長92mと古墳群中の最大規模を誇るが、この地方では最終段階の前方後円墳の1つである。7世紀最初に出現する(15)愛宕山古墳は巨大な横穴式石室の中に剖抜式家形石棺を安置する。(16)宝塔山古墳では長大な截石積横穴石室の玄室に同じく剖抜式家形石棺が安置される。石棺の脚部は仏教文化の影響といわれる格狭間の手法で飾られている。(17)蛇穴山古墳は最終末の横穴式石室の古墳で、玄室壁面は一枚石で造られ、宝塔山古墳の石室と同様漆喰を塗布した痕が残っている。巨大な方墳という墳形、家形石棺の安置、石室石材の加工技術、漆喰の塗布などこの地方の他の古墳群には見られない特別なもので、中央政権と被葬者との強いつながりが考えられる。また、石材の加工技術では、山王庵寺の石造物の加工技術との共通性も考えられ、古墳の築造と寺院の建立が併行して行われたとも言われている。古墳の被葬者であり、山王庵寺の建立者である上野地方の氏族としては上毛野氏の名がうかびあがってくる。（右島1994・津金沢1983）

これに関連する集落跡では中間地城や(6)鳥羽遺跡などを中心に前期～後期の集落形成が見られる。また本遺跡の東側、八幡川の対岸に位置する(30)大屋敷遺跡では後期（6世紀～7世紀）にかけての集落が確認されている。

**奈良・平安時代** 奈良・平安時代に至ると、上野国府、国分僧寺、国分尼寺の造営と相まって、本地域は古代の政治・経済・文化の中心地としての様相を呈し、周辺一帯は遺跡数・内容において最も充実する。

寺院関連では、(1)本遺跡のほか、(2)上野国分僧寺跡、(3)上野国分尼寺跡がある。国分僧寺は大正15年に国指定史跡となり、発掘調査は昭和55年12月から開始されている。調査では、主要伽藍の礎石、築垣、堀等が確認された。国分尼寺の調査では、昭和44・45年に推定中軸線上のトレンチ調査が行われ伽藍配置が推定できるようになった。さらに平成12年の前橋市埋蔵文化財発掘調査団による南辺の寺域確認調査で、東南隅と西南隅の築垣、それと平行する溝跡や道路状遺構を確認した。国分僧寺・尼寺周辺では、関越自動車道建設に伴う発掘調査が行われ、中間地城では、当時の大規模な集落跡や掘立柱建物跡群が検出されている。

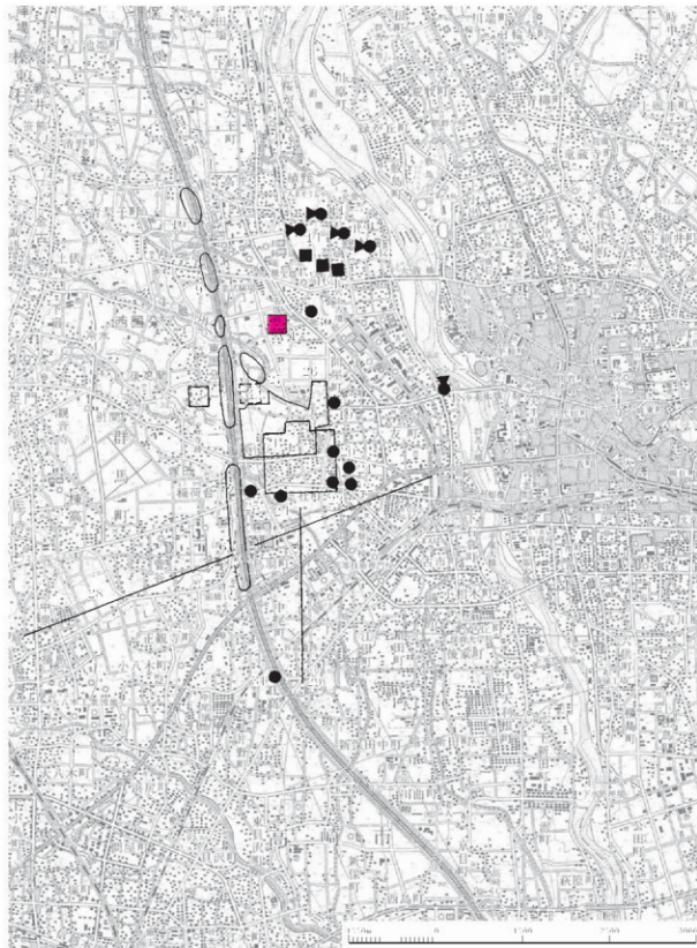
国府に関連する遺跡は、総社神社旧地を中心とする上野国府推定城周辺に広がる。県下最大級の掘立柱建物跡が検出された(23)元総社小学校校庭遺跡や、「國屏」「曹司」「國」「邑屏」等と書かれた墨書き土器や人形が出土した(20)元総社寺田遺跡、律令期の掘立柱建物跡と考えられる柱穴が検出された元総社宅地遺跡がある。また、大規模な東西方向の溝跡が検出された(19)閑泉橋遺跡や元総社蒼海遺跡群（平成17・18年度の調査）と、南北方向の溝跡が検出された(22)元総社明神V遺跡の調査成果により、国府域の東北外郭線が想定されるに至った。さらに、周辺遺跡からは官人の用いたと考えられる円面鏡、巡方（腰帯具）、綠釉陶器も出土し、国府について考えるうえで貴重な資料となっている。

また、群馬県や群馬町の調査等により、本遺跡から約1.5km南の地点にN-64°-E方向の(28)東山道（国府ルート）があることが推定されている。さらに、(29)推定日高道は、日高遺跡で検出された幅約4.5mの道路状遺構を国府方面へ延長したものである。これらは、当時の交通網を物語る重要な遺構である。

この時期、集落も急増し中間地城や鳥羽遺跡、(8)国分境遺跡、(7)中尾遺跡などで大集落の形成が見られる。近年継続的に調査が行われている元総社蒼海遺跡群でも多数の集落跡が調査されている。これらは、国府域およびその周辺一帯に広がる「国府のマチ」として捉えることができる。

**中世** 永享元年(1429)、上野国守護代の長尾氏によって古代国府跡に築かれた蒼海城は城郭としての機能を有し県内でも最古級に位置づけられる。さらに、県下最初の城下町を形成したと考えられている。この蒼海城の綱張りは、国府の縄割と関係が深いと考えられている。

## II 道路の立地と環境



1. 山王庵寺
2. 上野国分僧寺跡
3. 上野国分尼寺跡
4. 推定上野国府
5. 上野国分僧寺・尼寺中間地域
6. 鳥羽道路
7. 中尾道路
8. 国境道路
9. 北原道路
10. 下東西道路
11. 稲荷山古墳
12. 大小道山古墳
13. 達見山古墳
14. 二子山古墳
15. 愛宕山古墳
16. 宝塔山古墳
17. 蛇穴山古墳
18. 王山古墳
19. 関泉橋遺跡
20. 寺田遺跡
21. 大友屋敷II・III
22. 元経社明神V遺跡
23. 元経社小学校校庭
24. 天神遺跡
25. 弱勒遺跡II
26. 元経社蒼海道路群
27. 上野国分尼寺北辺道路
28. 推定東山道
29. 推定日高道
30. 大里敷道路
31. 日高道路

Fig. 3 周辺道路

### III 調査方法と経過

#### 1 調査方法

平成20年度の発掘調査は、①塔跡の範囲確認、②南面回廊の確認、③金堂北側建物跡の範囲、④寺域北・南辺の確認を目的に12ヶ所でトレント調査を行った。総調査面積は350.5m<sup>2</sup>である（Tab.2）。調査は、調査方針を定めた「山王庵寺範囲内確認調査計画書」および、これに沿って作成された「調査基準」に基づいて行った。以下、調査方法について要点を記す。

**グリッド設定（Fig.5）** 調査区のグリッド設定は以下のとおりである。①単位は4 m四方とする。②国家座標第IX系（旧日本測地系）を用い、X = +44,800、Y = -77,200を基点（X 0、S 0）とする。③東から西へ4 mごとにXの数値が増大し（X157、X158、X159……）、北から南へ4 mごとにSの数値が増大する（S 44、S 45、S 46……）。④各グリッドの呼称基点は北西杭とする。

なお、このグリッド設定は、本遺跡から南に1 kmほど離れた場所で、近年、区画整理に伴い継続的に調査が行われている元絃社蒼海遺跡群のグリッド設定と共通するものであり、山王グリッド（X 0・S 200）が蒼海遺跡群グリッドの基点（X 0・Y 0）である。

**トレント調査** 各トレントの設定幅は、掘立柱建物の柱穴間隔を考慮し、原則3 m幅とした。トレント名は、原則として調査順に数字で呼称することとし、18年度からの通し番号とした。

**遺構の確認** 遺構確認については、基本層I層およびII層直下で行い、その後、山王庵寺遺構面が存在するIII層（Hr-FP-As-C混土層）を細分しながら確認することとした。遺構の確認にあたって、必要な場合はサブトレントを設定することにし、サブトレントの規模は遺構保護のため必要最小限とした。

**測量** 遺構平面図については縮尺1/20を原則とし、必要に応じて1/10~1/50の縮尺を適宜使用することとした。また、土層図についても縮尺1/20とし、遺構毎の図面とは別に、グリッド杭のあるトレント壁面すべて作成することにした。

**出土物の取り上げ** 遺構毎を原則とし、遺構に属さない遺物は4 mグリッド単位で記録を作成し取り上げることとした。なお、状況に応じて4 mグリッドをFig.4のように4分割し、2 mの小グリッド一括で取り上げた遺物もある。小グリッドの呼称は、北西から反時計回りでA～Dとした。なお現位置を保つ礎石等、施設を構成する遺物については、原則として現状保存することとした。

**写真撮影** 遺構の写真撮影については、35mmフィルム（モノクロ、カラーリバーサル）およびデジタルデータを常時使用した。

また、必要に応じて6×9サイズフィルムを使用した。空中写真撮影には6×6サイズフィルムを使用した。埋め戻し 調査終了後は、今後の調査と区別できるように石灰を散布してから埋め戻しを行った。

Tab.2 調査区の面積と調査目的

トレント	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査目的
21	120.0	寺域北辺の確認・南北方向の地形確認
22	46.0	金堂北側建物（B-2）の範囲確認
23	18.5	金堂北側建物（B-2）の範囲確認
24	27.0	塔内側範囲の確認、推定参道の確認
25	10.5	塔北側範囲の確認
26	—	未調査
27	16.1	金堂南側建物（B-3）範囲の確認
28	17.6	南面回廊の確認
29	15.3	確定中門・南面回廊の確認
30	42.0	南面回廊の確認
31	13.0	南面回廊の確認
31a	2.0	南面回廊の確認（27トレB-3東側延長部の確認）
32	22.5	寺域南辺の確認
計	350.5	

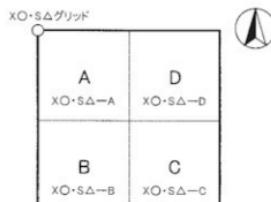


Fig.4 2 m小グリッドの呼称

### III 調査方法と経過

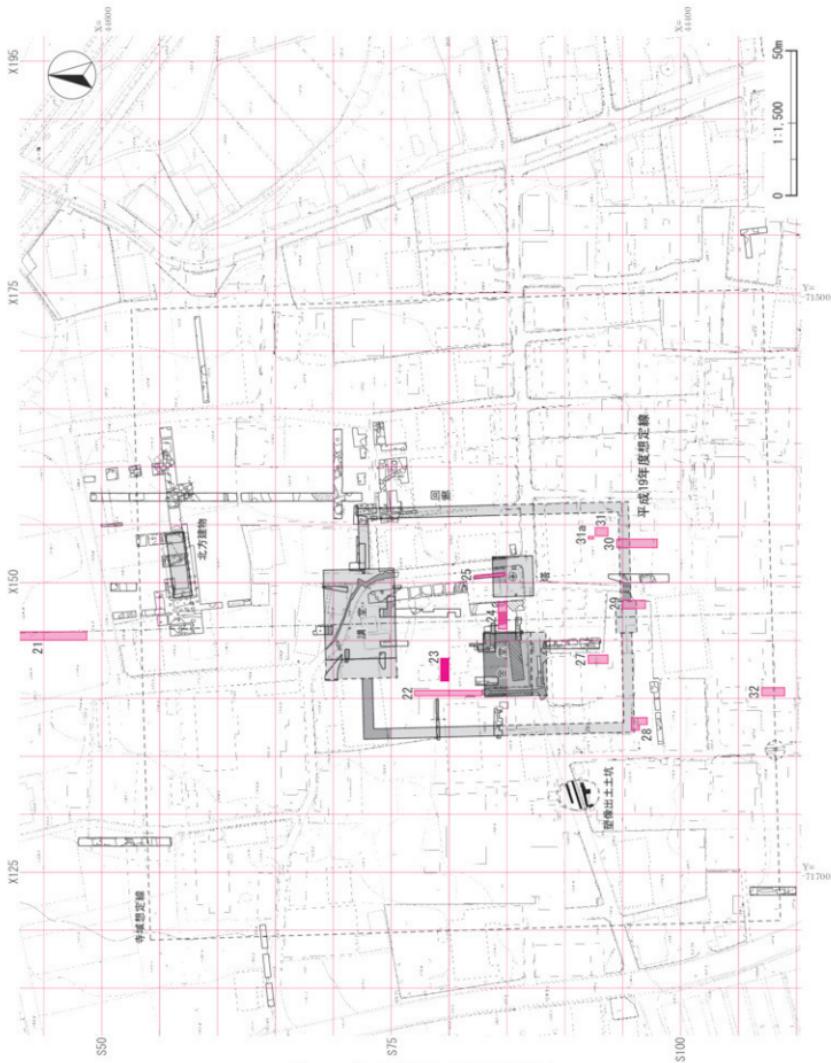


Fig. 5 グリッド設定図と平成20年度調査区

## 2 調査経過

本年度の調査は9月初旬から開始し、12月下旬に終了した。以下、調査経過を毎月にまとめた。

**9月** 1日、重機を用いて21トレンチの表土掘削を開始した。つづいて2日に24トレンチの表土掘削を開始し7次調査の調査区を検出し、各トレンチ調査の進捗状況に応じながら埋土の掘り下げを行った。3日は29トレンチの掘削を開始したが調査区の大半は搅乱を受けていることが判明した。同日、25トレンチは人力によって掘削を開始し、翌4日から9日まで25トレンチ内の7次調査による埋土の掘り下げを行った。18日～19日にかけて23・28・32トレンチの表土掘削を行った。各トレンチの掘削・プラン確認と平行して21・25・29トレンチを中心に調査を進めた。17日に21トレンチの調査が、25日に29トレンチの調査がそれぞれ終了した。

**10月** 23・24・28・32トレンチを中心に調査を行った。前月より引き続き各トレンチの調査を続行した。23トレンチはAs-B混土面から瓦が多数検出されたため、慎重に掘り下げた。24トレンチでは中央付近から瓦が多数確認され、多量の瓦片を取り上げながらの調査となり、調査に時間を要した。25トレンチはセクションを中心に作業を行い、塔基壇の版築層や塔基壇面に敷設された白色粘土層、白色粘土上の玉石面の精査を行った。また、塔跡の版築面の下に掘り込み地盤痕を確認し、調査区全景の写真撮影を行った。20～21日に30・31トレンチの掘削、22日から27トレンチの掘削、23日からは22トレンチの現道アスファルトを剥ぎ27日から掘削を開始した。9日に32トレンチ、28日に28トレンチの調査が終了した。

**11月** 22・27・30・31トレンチを中心に調査を行った。22トレンチからは昨年度調査したB-2号建物跡に伴う版築が確認され、版築土中から円形に敷かれた瓦を検出した（X2213・X2214）。また、南端からは鍛冶炉と推測される土坑（D-2205）が確認された。27トレンチでは版築面や礎石掘付跡が確認された。30・31トレンチは瓦溜りや土取りと思われる土坑などが検出されたのみで回廊に関連する遺構は確認されなかった。主要な調査箇所はほぼ作業を終えたため、16日に現地説明会を開催した。生憎の降雨の中、約100名の参加者が調査成果に耳を傾けた。

**12月** 各トレンチの精査・図面作成を中心に調査を行い、2日に30・31トレンチ、3日に24トレンチ、5日に27トレンチ、12日に27トレンチなど各トレンチの調査が終了した。この間、27トレンチで確認された版築面が南面回廊か否かを特定するため、27トレンチの東40mの付近に31aトレンチを設定し、9日より調査を開始し版築面の存在を確認した。調査が終了したトレンチは順次埋め戻しが行われ、17日に今年度の発掘調査は終了となった。遺物はコンテナバット換算で約160箱が出土し、大半が瓦であった。

今年度の調査で検出された遺構は、最終的にTab. 3のとおりとなった。

Tab. 3 平成20年度検出遺構の概要

トレンチ	寺院施設等の確認	その他の検出遺構			
		住居跡	土坑	溝	ビット
21	—	5	8	0	3
22	建物跡（版築範囲：南北6.5m、東西10m～）、鍛冶炉	1	2	0	3
23	—	0	1	0	1
24	塔周辺の整地層、庶民期の瓦堆積	0	8	0	1
25	塔瓦積基壇、周辺の整地、心礎掘付穴と思われる掘り込み	1	0	0	0
26	未調査	—	—	—	—
27 (有)	建物跡（版築範囲：南北5m～、東西8m～、礎石附付跡）、南面回廊の可能性	0	4	4	4
28	—	2	1	0	1
29	—	0	0	0	0
30	瓦溜り	0	8	0	5
31	—	0	0	0	0
31a	建物跡（版築土、27Tの延長部分のため南面回廊の可能性有）	0	0	0	0
32	—	2	0	0	0
合計		11	32	4	18

## IV 基本層序

本遺跡周辺の基本層序は下の模式図に示すとおりである。これらの層中にはいわゆる指標テフラが含まれる。As-B 軽石 (I, 108年、浅間山供給) は一部で純堆積が確認できるが (II層)、ほとんどは I 層中に動きこまれた状況で確認される。III層中には Hr-FP 軽石 (6世紀中葉、榛名山二ツ岳供給)、As-C 軽石 (4世紀初頭、浅間山供給) が認められ、As-C 軽石は IV 層中に主体的に含まれる。

各調査区の堆積状況は柱状図のとおり一様ではなく、めまぐるしく変化する。As-B 純堆積層 (II層) は、今回の調査では22トレンチの平安期の土坑覆土上層に堆積していたのみであった。降下時に地形の低かった場所や遺構のくぼみなどに限定して堆積しているものと思われる。III層は古墳後期～奈良・平安時代の遺物包含層であり、山王庵寺の遺物および遺構構築面もこの層中にある。ただ、この層の形成要因は様々であったとみられ、形成時期も古墳後期～奈良・平安時代と幅をもつことから、調査区によって遺物の包含状況や混入物に差異がみられる。主要伽藍内部の調査区では、遺物の混入状況などから創建期の整地層と廃絶期の堆積層に分層でき、さらに、平安時代前期(9世紀代)に形成されたと思われる層も一部で確認できる。IV層は As-C 軽石を多量に含む黒色土で、古墳時代前期に形成されたとみられ、山王庵寺を含む奈良・平安時代の遺構調査時の指標 (地山) となり、概ねこの層上面で遺構確認が容易になる。V層は、VI層 (総社砂層) への漸移層で、上部の黒色土から下に行くにつれ黄褐色土 (場所により褐色粘質土) へと漸移する。VI層は総社砂層と呼ばれる基盤層であるが場所により様相が異なり、24トレンチ東側および25トレンチではロームに近い色調・土質で、ほかの調査区では明褐色もしくは白色に近い明褐色を呈す粘質土である。後者は、堆積時に水の影響を強く受けたものと思われる。

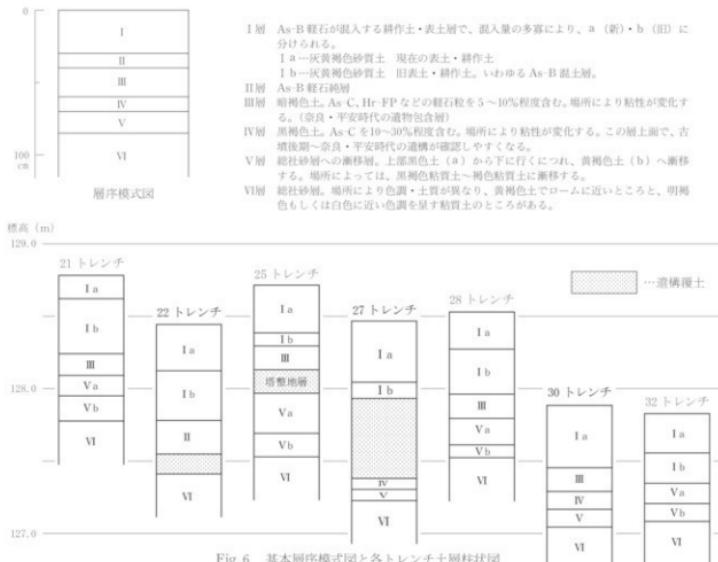


Fig. 6 基本層序模式図と各トレンチ柱状図

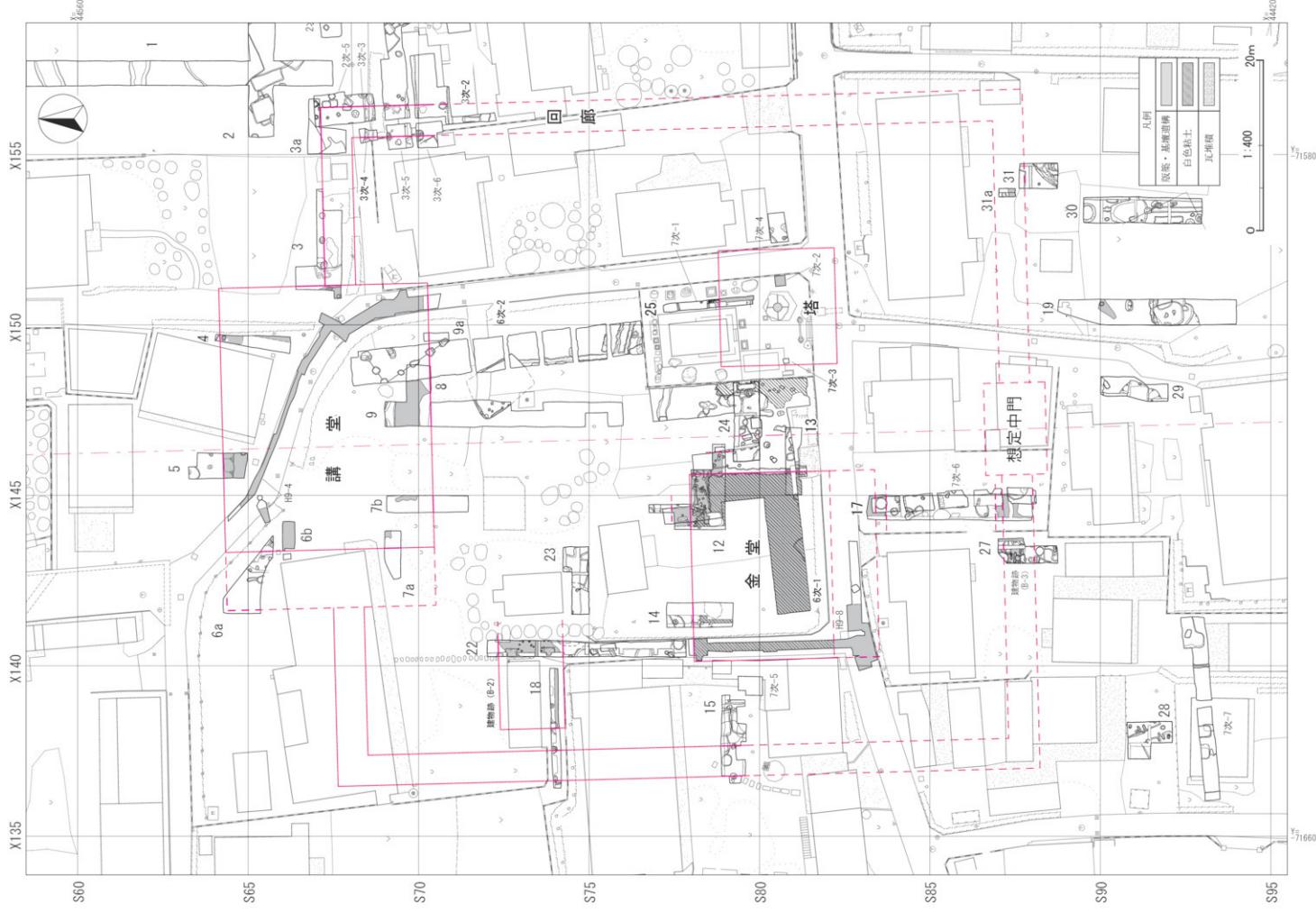


Fig. 7 平成20年度主要伽藍調査全体

## V 伽藍の調査

### 1 塔

#### (1) これまでの調査

**昭和54年度調査（第6次調査）** 昭和54年度の第6次調査（以下、6次）では塔西側で調査を行ったが、基壇を検出するには至らず、基壇の西端は塔心礎より8.6m以内におさまることが確認された。このことにより、基壇は一辺17.2m以下であることが判明した。また、塔基壇の外側には白色粘土を敷設していることが確認され、その直上から多量の瓦が塔の屋根から落下したままの状態で出土した（前橋市教委1980）。

**昭和56年度調査（第7次調査）** 昭和56年度の第7次調査（以下、7次）では日枝神社境内を中心に4ヶ所トレーンチを設定し、塔跡の調査を行った。この調査により、塔の基壇規模が一辺14mであることが判明した。また、6次で塔西側の調査区において確認された白色粘土の敷設が、北・東側にもおよんでいることが分かり、さらに塔心礎北側のトレーンチではその白色粘土上面に玉石が敷かれていることが確認された。なお、この整地層下の土坑中より隆平永寶2点（796年初鉄）、富壽神寶7点（818年初鉄）が出土しており、9世紀前半以降に塔周辺の再整備が行われたことが指摘されている。塔の基壇外装については、基壇北端で基壇にさしこまれる形で平瓦が出正在していることから、瓦積基壇であった可能性が指摘されている（前橋市教委1982）。

#### (2) 平成20年度調査の概要

**目的** 塔の基壇規模を再確認すること、また、基壇の構造や造営時期などの確認を目的とし調査を行った。

**調査区の設定** 塔跡周辺の現況は、その大部分が日枝神社の境内地となっており、神社に隣接して東・南側は道路、西側は宅地となっている。神社境内には社殿や塔心礎の覆屋のほか、塔心柱根巻石・石製鶴尾が置かれた覆屋もあり、さらに石碑などの石造物などが多く置かれている。このなかで調査可能な場所は7次で調査された神社の社殿東側縁に沿って入れたトレーンチ部分のみであり、今回もこの調査区を再調査することとした（25トレーンチ）。また、塔西側の状況を再確認することを目的に、一部6次の調査区と重複する形で調査区を設定した（24トレーンチ）。

**遺構** 25トレーンチで基壇外装の瓦積を確認した。これは塔心礎の芯より北側6.8mに位置する。これにより、塔基壇は一辺13.6mの規模であることが判明した。基壇周辺には白色粘土を幅3m以上敷設し、整地している。この白色粘土による整地層は、塔西側の24トレーンチ、北側の25トレーンチ両方で検出された。また、基壇の周囲、幅1.4mほどの範囲には白色粘土上に玉石が敷かれている。これは、塔の軒先の位置にあたるため、雨水の対処と思われる。塔基壇の版築層は最大で1.5mほど残存しており、旧地表から1m近く掘削し掘り込み地業を施す。基壇高は現存で0.6mほどである。

さらに25トレーンチでは、心礎据え付け穴とみられる掘り込みや、雁板痕もしくは木造基壇の羽目板据付痕の可能性が考えられる掘り込みが確認できた。心礎以外の礎石据え付け跡については調査区が狭小なこともあり、確認することはできなかった。

**出土遺物** コンテナバットに換算すると24トレーンチから13箱、25トレーンチから8箱の遺物が出土し、うち9割以上を瓦が占める。調査区の大部分が過年度の再調査であったため、塔基壇周辺からは6次調査で確認されたような塔の屋根から落下した状況での瓦の出土はみられなかった。24トレーンチでは金堂と塔のちょうど中間にあたる場所で、As-B 軽石混土層直下から多量の瓦が出土したが、これは小片が多く廃絶期以降の2次堆積によるものと考えられる。この瓦の堆積から「方光」の文字瓦が1点出土した（Fig.29-5）。また、25トレーンチでは、塔周辺整地層下から富壽神寶2点が出土し、7次調査時に指摘された9世紀以降に塔の再整備が行われたことを補強す

V 伽藍の調査

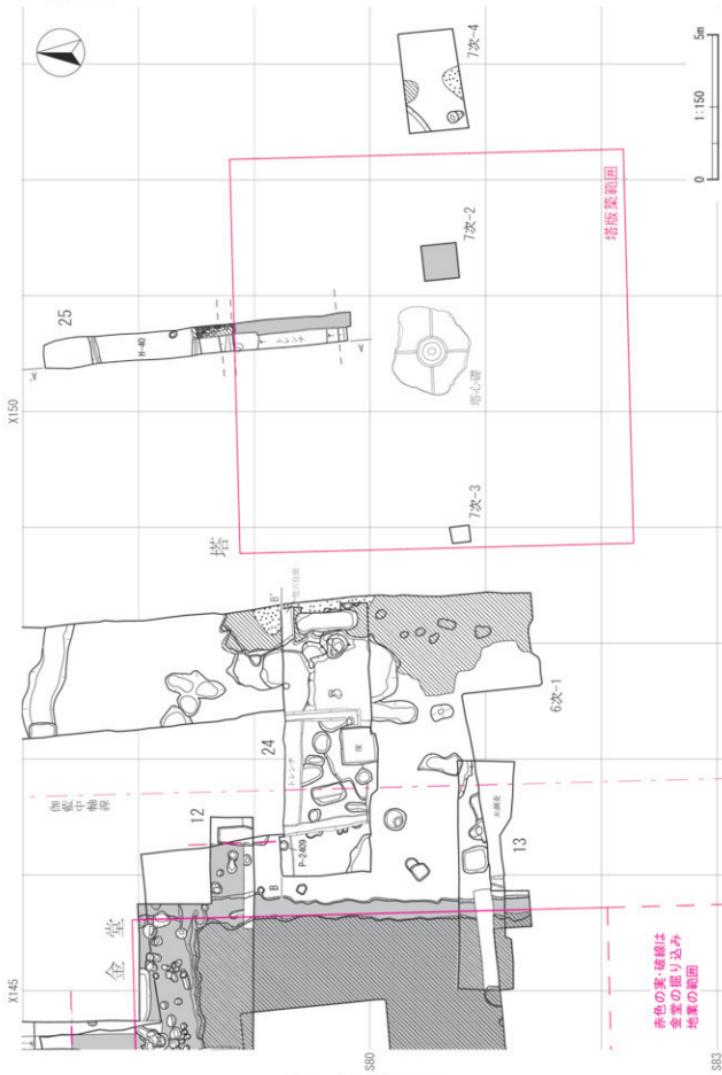


Fig. 8 塔周辺遺構配図

る結果となった。

### (3) 各トレンチの状況と検出遺構

#### ①24トレンチ (Fig. 8・9、PL. 4)

塔西側の範囲確認のため27.0m<sup>2</sup>を調査した。調査区の東・西側は6次調査区と重複しているが、中央付近は未調査部分である。6次調査時に塔西側で確認されている白色粘土整地層を再調査することを主な目的とした。

**整地層** この整地層について6次調査では、①塔基壇の外側には白色粘土が厚さ10cmほどで敷設されており、かなり後世の擾乱を受けていること、②軽石・焼土粒を含んだ黒褐色土層の上面に敷設されていること、③上面はほぼフラットであること、④この白色粘土上面で屋根から落ちた状態で多数の瓦が出土したこと、⑤下層からは竪穴住居跡が検出されたことなどが報告されている。今回の調査では、④の状況については6次調査時に遺

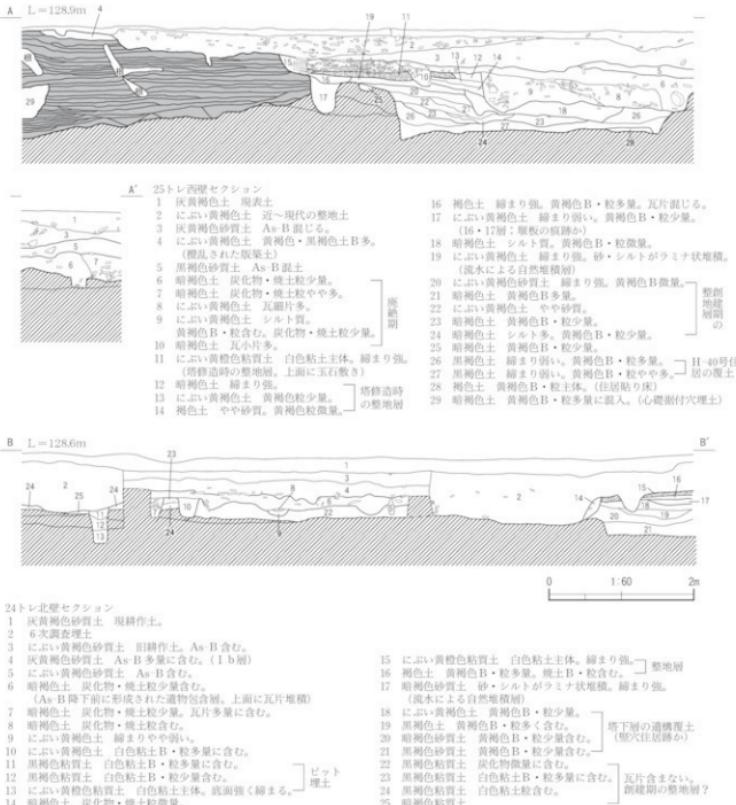


Fig. 9 塔跡調査区断面図

## V 伽藍の調査

物はすべて取り上げられているため確認できなかったものの、そのほかの状況は再確認できた。

白色粘土を用いた整地層は調査区東側から検出され、平面プランは不整形に広がる。白色粘土層の範囲は、今回の調査範囲では塔心礎の芯から西に10.1mが最大であったが、6次調査時には最大11.9mの地点まで広がっていることが確認されている。白色粘土は、付近の地山から採取が可能と思われるもので、金堂基壇の積土として用いる白色粘土と類似する。白色粘土層下は、同時期の整地層が1層薄くあり(Fig. 9—16層)、さらにその下には流水によると思われる砂・シルトがラミナ状に堆積する層(17層)がある。

24トレチでは玉石敷き自体は検出できなかったものの、調査区東壁の断面には、白色粘土層上にわずかではあるが玉石の混入する土層が確認でき、塔の北側同様、西側にも玉石が敷かれていたと推測できる。

その他の遺構 調査区中央の未調査部分からはAs-B混土層直下よりおびただしい量の瓦が出土したが(PL.4)、出土の状況や共伴して出土した土器などから、10世紀以降(房絶期)に堆積した瓦と考えられる。遺構としてはこの時期に瓦を片付けたと考えられる小ピットや土坑状の穴などが大半である。伽藍に関連する可能性を考えられる遺構は調査区西側の北壁際で検出した柱穴(P-2409)である。P-2409号柱穴は直径33cm、確認面からの深さは46cmを測る。底面は強く締まっており柱のあたりと思われる。金堂の基壇東端から2.4mほど離れているため、金堂に関連した遺構とは考えにくく、性格は不明である。

### (25) トレチ (Fig. 8~10, PL. 1~3)

塔北側の範囲および基壇の構造を確認するため、7次調査区を再調査した。主に基壇版築の断面、基壇外装と推定された瓦積および基壇周辺の整地の状況を確認することを目的とした。調査面積は10.5m<sup>2</sup>である。

**塔基壇** 基壇は深さ最大90cmの掘り込み地業を伴う。盛土部分も合わせると、版築層は最大で1.5mほどが残存していることが確認できた(Fig. 9)。版築層は表土下10cm程度から残存している。7次調査の際には版築層上部を掘削しており、今回の再調査時には、50~60cm程度の埋め戻し土を除去したのちに基壇版築層を検出することができた。また、基壇外装の瓦積は調査区の東壁・西壁の両方の断面に残存していたが、その間は7次調査時に抜き取られたものと思われる。なお今回、7次調査時には断ち割りを行わなかった基壇中心部に近い部分を断ち割り調査し、基壇の構造を確認した。

版築土は地山の黄褐色土のブロックが混入する暗褐色土をベースとし、さらに粘質土や砂質分を多く含む土など、性質の異なる土を互層にして固く焼き固めている。1層の厚さは3~10cm程度であるが、中心に近いほど薄く丁寧な版築で、基壇外側にいくにしたがい、やや層が厚くなる傾向が看取された。なお、基壇の断ち割りの際に、1層ずつ剥離しながら調査を行ったところ、剥離面より直径5cm程度の円形の掻き棒痕が確認できた(PL.2)。掘り込み地業の底面は外側から中心に向かい深くなり、最も深い場所で旧地表面より90cmである。

調査区南側の塔心礎に近い部分では、心礎据え付け穴と推測される掘り込みが確認された(Fig. 9—29層)。据え付け穴は、版築層の中間ではほぼ旧地表と同じレベルの面から、掘り込み地業の基底面近くまでを掘り込む。この据え付け穴近辺の版築層は、ほかの部分に比べより薄く丁寧に版築されていた。また、基壇端では基壇の側縁に沿って延びると思われる幅20~30cm程、深さ50cmの溝状遺構が検出された(16~17層)。遺構の掘り込み面は白色粘土層下である。白色粘土層は後述するように塔の修復時の整地層で、土層断面の状況から基壇外装の瓦積と同時期である。この溝状遺構は、瓦積基壇以前の創建期の基壇に関連すると考えられる(土留めの腰板など)。

外装の瓦積は、塔心礎の芯より北6.8mの地点で確認された。調査区東壁側に4枚、西壁側には5枚が平積みされた状況で出土した。地覆石などは伴わずに下から瓦が積まる。瓦は桶巻き作りされた平瓦で、出土した限りにおいては、完形品は用いられずに破損した瓦を利用している。瓦は側面が基壇端と平行になるように横積みされており、また、破損部分は表に出ないように積まれている。

**整地層** 25トレチの調査では、塔周辺の整地層として白色粘土層とその上面に玉石敷を確認した。白色粘土層は24トレチと同様厚さ10cm程度で、塔から離れるにつれてわずかに下り傾斜となる。断面では、基壇端から2

m外側まで白色粘土層がつづいていた。白色粘土層上面に敷かれる玉石は、小さいもので径1~2cm程度、大きいもので10cm程度である。遺存していた範囲はごくわずかであったが、敷かれ方には粗密や隙間があった。断面では、廃絶期の堆積層に混入して浮いている状況が確認できたため、多くは現位置から動いているものと考えられる。本来は隙間なく敷かれていたのである。今回の調査で玉石敷きが確認できた範囲は、基壇端から1.4m外側までである。

この白色粘土層下の状況は、まず24トレンチでも確認されたような流水による自然堆積層があり、さらにその下は創建時に埋め立てられたと考えられる竪穴式住居跡がある。また7次では白色粘土整地層下の土坑中より隆平水寶2点、富壽神寶7点が出土しているが、今回の調査でも調査区壁面を精査している際に、富壽神寶2点が出土した(Fig.56, PL.23)。

その他の遺構 7次で調査されている塔下層の竪穴式住居

跡(H-40号)を再検出した。H-40号住居跡は南北3.8m、

壁現高は60cmを割り、壁面下に周溝がめぐる。断面図(Fig.9)の26+27層は住居廃絶後の自然堆積層だが、20~24層は人為的な埋土で、創建時に埋まりきらなかった穴を埋め立てて整地したと考えられる。なお、今回の調査で時期判定可能な遺物は出土しておらず、7次調査でも報告書掲載遺物は土師器杯一点のみであるため、明確な時期決定はできないが、概ね7世紀後半までは降らない時期と考えてよいだろう。

#### (4) 基壇の構造・規模と時期

今回の調査結果と過年度調査の成果を勘案し、塔基壇の規模と構造についてまとめるとともに、基壇築造時期について整理しておく。

**基壇の構造と規模** 塔は瓦積基壇であることが確認された。基壇規模は一辺13.6m、基壇高は現存する版築層の最上面と周辺整地層との比高差から、0.6m以上であることが判明した。また基壇断ち割り調査などから、以下のような工程により築造されたと推測される。

①旧地表面から1m程度掘り込む、②底面から版築で土を積み上げ旧地表とほぼ平坦にする(掘り込み地業)、③据付穴を掘り、心礎を据える、④さらに版築で土を積み上げる(基壇積土)、⑤基壇周辺を白色粘土・玉石で整地する、⑥基壇縁を瓦積みにより外装する。

①については、Fig.11のとおり、基壇外側から中心にかけてスロープ状に深くなり、おそらく塔心礎の部分で最も深くなるものと推測される。図面中で掘り込み地業底面と塔心礎について破線で示した部分は推定であるが、その根拠となっているのは大正年間に福島武雄氏が行った調査である(福島1921)。この時に福島氏は塔心礎の発掘調査を行っており、地下90cm(3尺)程度掘り下げたところ根石を検出し、塔心礎の厚さを確認するためさらには地下150cm(5尺)まで掘り下げた。これにより概ね180cm(6尺)の厚みがあるものと推測している。

②・③については図のとおり塔心礎上面と旧地表面はほぼ同じレベルであり、地下式心礎であったことが分かる。地表面とフラットな状態にしてから据え付け穴をスロープ状に掘り下げ、心礎を搬入したものと考えられる。また④の工程について、基壇端では幅20~30cm程度とみられる溝状構造が検出されていることから、基壇の盛土をする際に模板を立てて版築した可能性が高い。なお、今回の基壇断ち割り調査の際に錫棒痕も検出しており、本格的な版築工法で基壇を作っていたことが分かる。⑤については、とくに玉石敷の位置は、塔建築の軒の出に

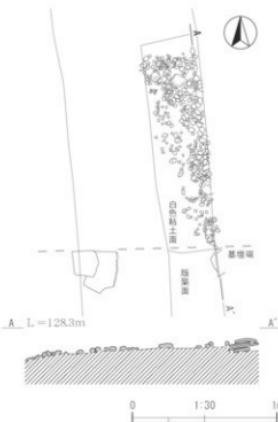


Fig.10 25トレンチ玉石敷・基壇瓦積実測図

V 伽藍の調査

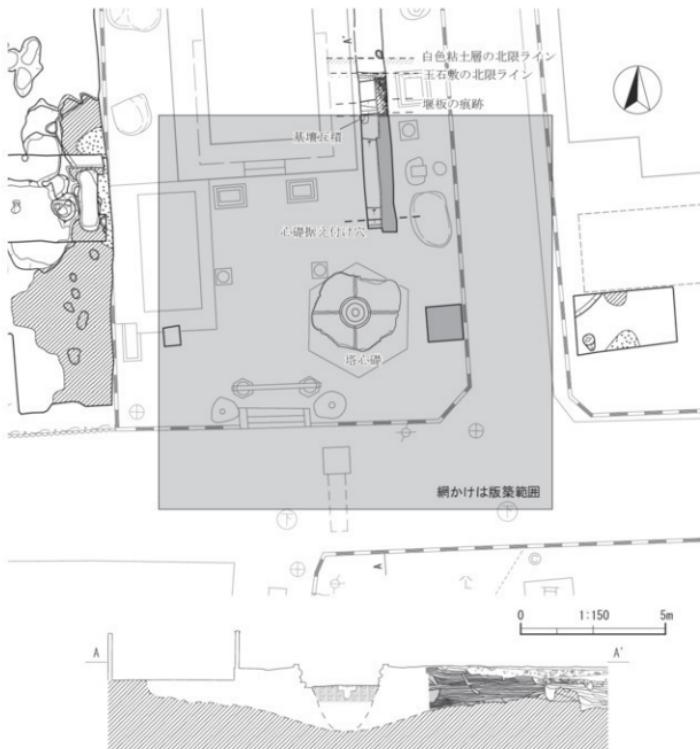


Fig.11 塔跡平・断面図

あたるため、屋根から落ちる雨水の処理と養生のために敷かれ、雨落溝に代わる役割を果たしていたものと考えられる。この整地層下にはそれ以前に雨水が流れたらみられる自然堆積層があることから、修復前も同じ位置に軒の出があつて地表面を削っていたため、粘土と玉石を用いて強固な整地をしたものと思われる。

**基壇の時期** 7次調査で基壇周辺整地層下から富壽神寶・隆平永實が出土しており、今回の調査でも富壽神寶が出土していることから、確認された基壇周辺の整地は9世紀以降のものと考えられる。また基壇外装の瓦積みは、断面の状況からこの整地と一連の工程であることが確認され、塔基壇が瓦積になったのも9世紀以降と考えることができる。一方、今回の調査で塔基壇の断ち割りを幅50cm、長さ3m程度行い、掘り込み地業底面まで掘り下げたが、瓦片は一片も出土しなかった。このため、基壇版築土は創建時のものと考えられる。また、基壇縁辺の溝状造構の掘り込み面は白色粘土層下で、これも創建時のものと考えられる。調査時に須田勉氏から、この溝状造構が木造基壇の痕跡である可能性を指摘された。確かに木造基壇である千葉県千葉市小食土庵寺の基壇断面などと比較しても、断面形状などがよく類似している(千葉県文化財センター-1986)。この場合は、木造基壇から瓦

積基壇に作り替えていることになる。一方、金堂が切石積基壇であったことや塔心礎、塔芯柱根巻石など塔に関連する石製加工品が多彩であることを考えると、塔の創建時の基壇外装が切石積であった可能性は捨てきれない。いずれにしても、塔創建時の基壇外装については決め手になる遺構が確認されていないため、現時点では不明とせざるを得ない。

## 2 回廊

### (1) これまでの調査

**平成18年度調査** 講堂東側で北面回廊の北側柱列と思われる礎石据付痕を3ヵ所検出した。また、2・3次調査の検討を行った結果、3次調査（昭和51年度）で検出されていた「礎石群B」が東面回廊となり、北面回廊につながることが分かった。規模については、講堂の掘り込み地業から推定される中軸線を中心に、北・東面回廊を西に折り返し、回廊の東西規模を72.6m（242尺）と推定した（前橋市教委2007）。

**平成19年度調査** 西面および南面回廊の検出を目的とした調査を行い、西面回廊については2ヵ所の調査区から礎石据付痕が確認され、一部で基壇版塗土も検出された。これにより回廊の東西規模は79.7mであることが判明し、平成18年度調査時に想定したよりも大きくなることが分かった。南面回廊については、確実な遺構は確認できなかったものの、2ヵ所での候補となる遺構が確認された。塔の南を調査した19トレンチで確認された版築状の土層と、その北西に位置し、金堂の南側を調査した17トレンチから検出された版塗土（B-3号建物跡）である。この調査段階では、伽藍全体（講堂前面の空間と金堂・塔前面の空間）のバランスから、19トレンチの位置に南面回廊がくる可能性が高いと推測された（前橋市教委2009）。

### (2) 平成20年度調査の概要

#### 目的 南面回廊の確定

**調査区の設定** 南面回廊想定地は住宅が建て込んでいるため広い範囲の調査はできず、小さいトレンチを複数調査して、回廊位置を特定することとした。まず、昨年度19トレンチで検出された版築状土層をもとに推測された南面回廊のライン（以下、19年度推定ライン）に調査区を3ヵ所設定した（28～30トレンチ）。また、昨年度金堂南側で検出したB-3号建物跡の範囲確認を27トレンチで行い、この建物跡が南面回廊である可能性が高くなつたため、27トレンチの東、約40mの地点に31・31aトレンチを設定し調査した。

**遺構** 19年度推定ライン上の調査を行った28・29・30トレンチからは回廊に関連する遺構は検出されず、この推定線上に回廊の存在を考えるのは難しくなつた。一方、B-3号建物跡の範囲確認を行った27トレンチからは、昨年度17トレンチで検出された版塗土のつづきが確認され、さらに西側に延びることが判明した。昨年度の調査成果と併せて、建物の地業の規模は、南北5m以上、東西8m以上となる。また、礎石据え付け跡とみられる遺構も1ヵ所確認することができた。さらに、このB-3号建物跡を東側に延長したライン上に31・31aトレンチを設定し調査したところ、31aトレンチで版塗土が検出された。これによりB-3号建物跡が南面回廊である可能性が非常に高くなつた。このライン上に南面回廊を復元した場合、回廊の南北規模は82.4mとなる。

その他の遺構としては、27トレンチでB-3号建物跡下層のピットや土坑、28トレンチでは7世紀代の竪穴住居跡2軒、30トレンチでは掘立柱建物跡と瓦を廃棄した土坑、31トレンチで土探しのため掘られた土坑などが検出された。また、31トレンチで検出された近世頃の井戸跡には多量の瓦片のほか礎石と考えられる巨石が2個落し込まれていた。

**出土遺物** 総量としては、30・31トレンチが多く、30トレンチでコンテナバット37箱、31トレンチで38箱の瓦を主体とする遺物が出土した。ついで27トレンチで8箱出土し、28トレンチでは3箱と少なかった。29トレンチは、ほぼ全面が攪乱されていたこともあり1箱の出土にとどまった。とくに、30トレンチでは瓦房棟土坑、31トレン

## V 伽藍の調査

チでは近世井戸跡および土採り土坑からの出土が多かった。これらの遺物は出土位置から回廊・中門・塔などの瓦がまとめて廃棄されたものと考えられる。

### (3) 19年度推定ライン上調査区の状況と検出遺構

19年度推定ライン上の調査を、28・29・30トレンチで行った。

#### ①28トレンチ (Fig.12, PL. 7)

19年度推定ライン上で回廊南西隅を想定して設定したトレンチである。17.6m<sup>2</sup>を調査した。結果、回廊に関する遺構は検出できなかった。

検出遺構 壁穴式住居跡 2軒のほか土坑1基、ピット1基を検出した。H-37号住居跡とH-38号住居跡は出土遺物や覆土の状況・主軸方向などからともに7世紀代の住居跡と考えられる（詳細はVII章参照）。

#### ②29トレンチ (Fig.12, PL. 8)

19年度推定ライン上で西面回廊および中門を想定して設定したトレンチである。15.3m<sup>2</sup>を調査した。結果、調査区の全面に搅乱が及んでおり、遺構面は削平されていたため、遺構の有無を確認することはできなかった。

#### ③30トレンチ (Fig.12, PL. 8)

19年度推定ライン上で、昨年度調査した19トレンチの西9mの地点に設定した南北方向のトレンチである。42.0m<sup>2</sup>を調査した。結果、回廊関連の遺構は検出できなかった。

検出遺構 挖立柱建物跡（B-4）、瓦廐土坑（O-1）のほか、近代（大正期頃）に養蚕のために使用されていたと思われる室（ムロ）が検出された（I-1）。B-4号掘立柱建物は、柱穴3基が確認されたのみであるが、現状で、規模は東西3.9m、南北6.3m以上、建物の方向は北から27西へ傾くものと推測される。また、柱間は3.4～3.5m等間と推測される。時期は遺物が出土しておらず明確ではないが、建物の方向から、創建以前と考えられる（詳細はVII章参照）。O-1号土坑は瓦を廐棄したとみられる遺構で、規模は南北4.4m、東西2.8m以上、確認面からの深さ30cmで、平面形状は長円形を呈す。掘り込みは比較的浅く地山粘質土層まで達していないため、土採りなどの目的ではなく、単純に廐棄のために掘られた土坑と考えられる。出土遺物は瓦を主体にコンテナバット換算で30箱程度が出土した。共伴する土器などから平安期の遺構と考えられる。

### (4) B-3号建物跡調査区の状況と検出遺構

B-3号建物跡の範囲確認のための調査を27・31・31aトレンチで行った。

#### ①27トレンチ (Fig.12・13, PL. 5・6)

昨年度調査を行った17トレンチの西側2mの地点に設定したトレンチで、調査面積は16.1m<sup>2</sup>である。B-3号建物跡の地業（版築土）と礎石据え付け跡と思われる遺構を検出した。調査区は近～現代の搅乱が多く、遺構の残存状況は良くなかった。

B-3号建物跡 検出された遺構は地業跡（版築土）と礎石据え付け跡（据え付け穴と根石）である。地業の西側と北側の範囲については、調査区範囲内では終わらず、調査区外へ版築層がつづく。南側はS88グリッドラインの南0.9m付近で搅乱層に切られるかたちで版築層は終わり、それより南側では確認できなかった。東側を調査した昨年の調査と併せると地業の規模は、東西8.1m以上、南北5.1m以上である。

版築土は、最大10層、厚さ65cm程度が残存している（Fig.13断面図）。暗褐色土をベースとし、間に黄褐色土を薄く敷いて接着固めている。1層の厚さは概ね2～5cm程度だが、比較的底面に近い部分は厚みが増し、10cm程度ある。地業底面はやや凹凸がみられるが、レベルは標高127.4m前後であり、昨年度調査の底面レベルと比較するとほぼ同じ標高数値であるため、平坦につづいていることが分かる。地業底面の地山は暗褐色粘質土（V層）だが、部分的にAs-C軽石を含む黒褐色土（IV層）が残存する。金堂や塔の版築と比較すると、用いられる土や接着剤の組合せなどにおいてやや簡易な印象を受ける。

礎石据え付け跡（P<sub>t</sub>）は、調査区北側で検出された。据え付け穴は直径90cm程度の円形と推測され、確認面か

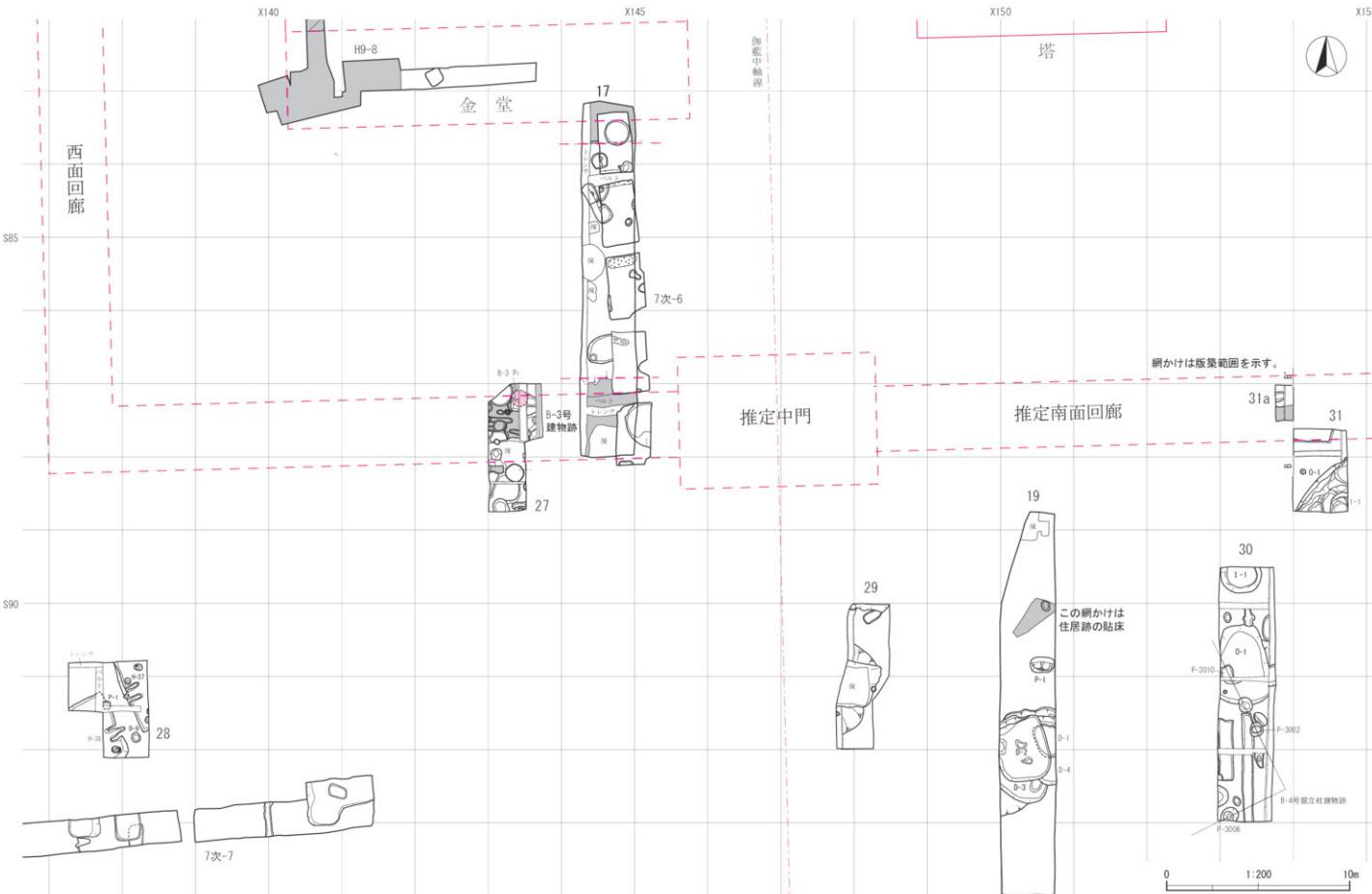


Fig.12 南面回廊推定地周辺遺構配置図

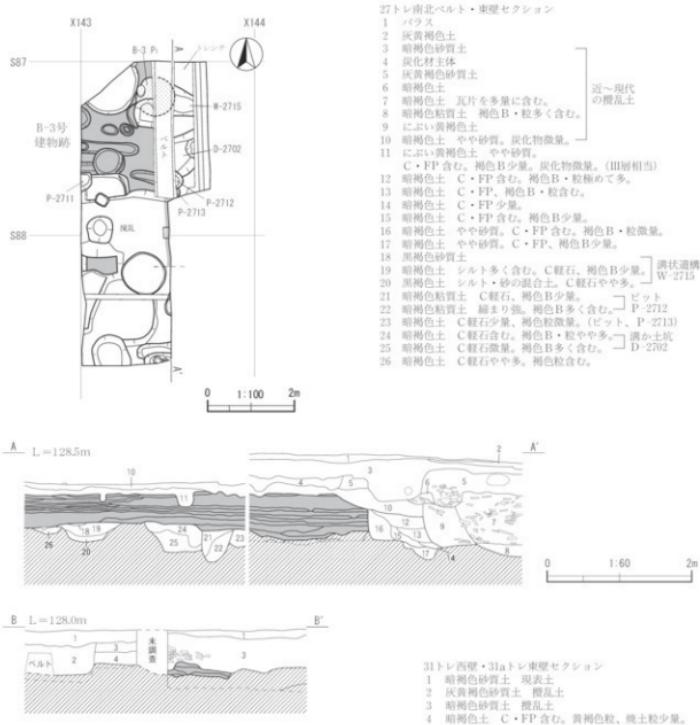


Fig.13 27トレンチ半・断面図と31・31aトレンチ断面図

らの深さは15cm程度である。根石は川原石が1個残存しているのみであった。地業範囲との関係から考えると、この位置に建物の北側柱がくるものと考えられるが、現在のところ柱位置を示す遺構がこのP<sub>1</sub>のみであるため、不確定さが残る結果となった。

また、基壇に関連する遺構は確認できず、基壇の有無については不明である。検出された版築土は、掘り込み部などは確認されていないが、周辺の地山の状況と比較すると掘り込み地業に伴うものと考えられる。

その他の遺構 調査区北側でB-3号建物跡版築土の下層から、溝や土坑、ピット状の遺構を検出した。いずれも部分的な検出であるため、全体形状や遺構の性格は不明な部分が多い。W-2715は東西方向に延びると思われる浅い溝状遺構で、幅0.7m、深さ25cmを測る。D-2702は土坑もしくは溝状の遺構で、東西0.5m以上、南北1m以上の規模で、深さは42cmを測る。P-2711～2713はピット状の遺構である。それぞれ、P-2711：直径44cm以上、深さ60cm以上、P-2212：直径40cm以上、深さ42cm以上、P-2213：直径24cm以上、深さ28cm以上を測る。調査区南側は近・現代の擾乱により遺構面が深く削られていたが、その擾乱層中から瓦片が多量に出土した。

## V 伽藍の調査

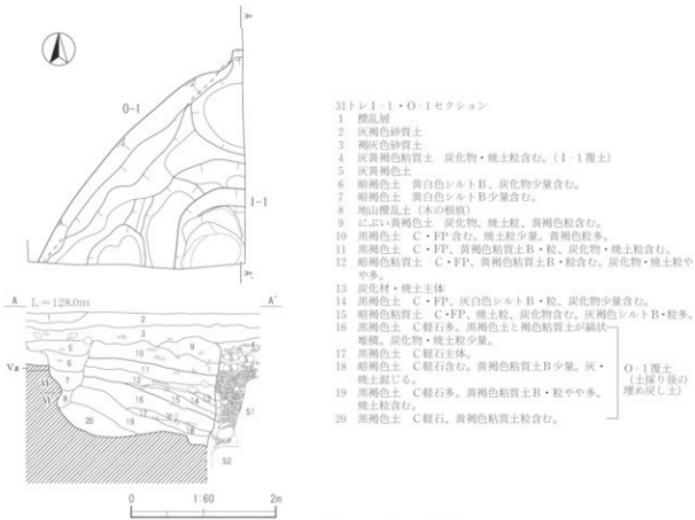
### ②31・31aトレンチ (Fig.12~14, PL. 9)

B-3号建物跡の東側延長を確認するため、31・31aトレンチを調査したところ、31aトレンチで版築土が検出され、B-3号建物跡が南面回廊であることを強く示唆する結果となった。調査面積は31トレンチ13.0m<sup>2</sup>、31aトレンチ2.0m<sup>2</sup>である。

**版築土** 31aトレンチで検出された版築層は厚さ30cm程度が残存していた。擾乱土が深くまで及んでいるため、遺構上面はかなり削平されているものと思われる。版築層の北側は調査区中央付近で擾乱土に切られて終わり、南側は調査区外へ延びるが、31aトレンチの南側を調査した31トレンチでは版築層を確認することはできなかつた。規模は検出範囲で、南北0.9m、東西1.0mである。版築層は黒褐色土（V a層）上面に構築されており、地山黄褐色土のブロックが混じる暗褐色土を用いる。底面のレベルは127.3m付近であり、17・27トレンチで調査されているB-3号建物跡の地盤底面のレベルとほぼ同じである。版築土自体は17・27トレンチのほうが粘性の強い土であるため、やや異なる印象を受けるが、これは地山の違いに起因するものであり、塔・金堂と比較すると簡易な版築である点は同じである。これらのことから31aトレンチの版築土は、B-3号建物跡と一連のものである蓋然性が高い。この場合、27トレンチから東に31aトレンチまで延長した建物の東西規模は4m以上となることから、この建物は南面回廊と考えてよいだろう。

その他の遺構 31トレンチでは、土採りのために掘削されたと思われる土坑（O-1）のほか、近世以降の井戸跡（I-1）が検出されている (Fig.14)。

O-1号土坑は、部分的な検出であり全体の形状や規模は不明だが、検出範囲で東西2.9m以上、南北3.0m以上を測る。確認面からの深さは最大で1.4mほどで、地山黒褐色粘質土層（V a層）および黄褐色粘質土層（VI層）を掘り込んでいる。底面は凹凸が著しく、壁面は下半部が膨らむ。VI層は上面から30~40cm程度掘り下げると、より粘土質でやや白っぽい黄褐色土（図中VI'層）に変化する。壁面はこの層位で膨らむため、この粘土質の土を



採取するために掘削したものと考えられる。遺構覆土は、Fig.14の断面図に示した11～15層（上層）と16～20層（下層）に大別できる。下層は、黒褐色土を主体とし、地山のブロックやAs-C軽石が混入する。このAs-C軽石を含む黒褐色土はIV層に由来するもので、覆土の状況などから土探しのために掘削したのち、不必要な土で埋め戻したものと思われる。この層中には瓦片が混入するが量は少ない。覆土上層は暗褐色土が主体となっており、比較的、炭化物や焼土粒が多く含む。瓦片の出土量は下層に比べ多く、遺存度もよい。Fig.23-7に図示した長さの分かる三重弦文軒平瓦もこの層中から出土している。

以上のことから、O—1号土坑は次のような変遷を経たと考えられる。①版築土や壁土に利用する粘質土を採取するために掘削された、②掘削後すぐに不必要な土で埋め戻されたものの完全には埋まりきらず窪地となっていた、③窪地に破損した瓦や建物の廃材を廃棄した。④の掘削時期は瓦片に混じって出土した土器（Fig.60）から、8世紀以降と推察される。

I—1号井戸跡は、覆土や出土遺物から近世以降の井戸跡と考えられる。規模は東西1.0m以上、南北1.1m以上、確認面からの深さ1.9m以上である。Fig.14の断面図のとおり、この井戸内には間障がないほどにぎっしりと瓦や円礫などが詰まっていた。さらに、安山岩製の礎石2個体（S1・S2）が落し込まれていた。礎石は視認できる面には柱座の造り出しが見られなかったが、ノミ状工具の加工痕がみられ、加工により平坦面を造り出していた（PL.9）。これらの遺物や礎石は、付近の耕作等で出土したものを一括して廃棄したと考えられる。

#### （5）回廊の規模について

B—3号建物跡の位置に南面回廊を復元すると、南北規模（北面回廊北側柱～南面回廊南側柱）は82.4mとなる。これは、27トレンチで検出したB—3号建物跡の礎石据え付け跡（P<sub>1</sub>）の位置を南面回廊の北側柱とし、建物幅（梁行の長さ）を3.6mとして南側柱を復元して計測した。ただ、南面回廊の柱位置については、今回の調査で検出した礎石据え付け跡1ヶ所のみであるため不確定要素も多分にあり、今後の延長線上での調査を行って、検証する必要があろう。回廊の建物幅については、昭和51年度の第3次調査で検出されている東面回廊（礎石群B）と19年度調査で検出した西面回廊の柱間がいずれも3.5～3.6mであったことから、南面・北面も同じ建物幅と考えてよいだろう。なお、昨年度までの調査で東西規模は79.7mであることが判明しており、今回の結果と併せるとほぼ正方形に近い回廊が復元可能である。

### 3 金堂北側建物跡（B—2号）

#### （1）これまでの調査

**平成19年度調査** 西面回廊を調査した18トレンチで西面回廊の東側（回廊内側）で建物跡が検出された。金堂の北16mの地点にあたる。遺構は掘り込み地業に伴う版築土が確認されたのみで、基壇の有無は不明である。礎石の痕跡等も確認できなかった。掘り込み地業は、西側の掘り込み部が確認できたが、東・南・北側の範囲については捉えられなかった。規模は、東西7.0m以上、南北1.0m以上である。回廊側柱からB—2の地業までは2.6mと近接する（前橋市教委2009）。

なお、この遺構の呼称については、回廊内の建物ではあるが遺構の性格が不明であるため、今回の報告でも19年度の調査時に付した遺構略称（B—2）を用いる。

#### （2）平成20年度調査の概要

目的 B—2号建物跡（以下、B—2）の北・南・東側の範囲確認。

**調査区の設定** 昨年度調査した18トレンチの東側には、民家の入口として使用されている細い里道が南北に走っており、この里道にトレンチを入れてB—2の南北の範囲を調査した（22トレンチ）。また、その里道東側の宅地内に東西方向のトレンチを設定して、B—2の東側範囲を調査した（23トレンチ）。

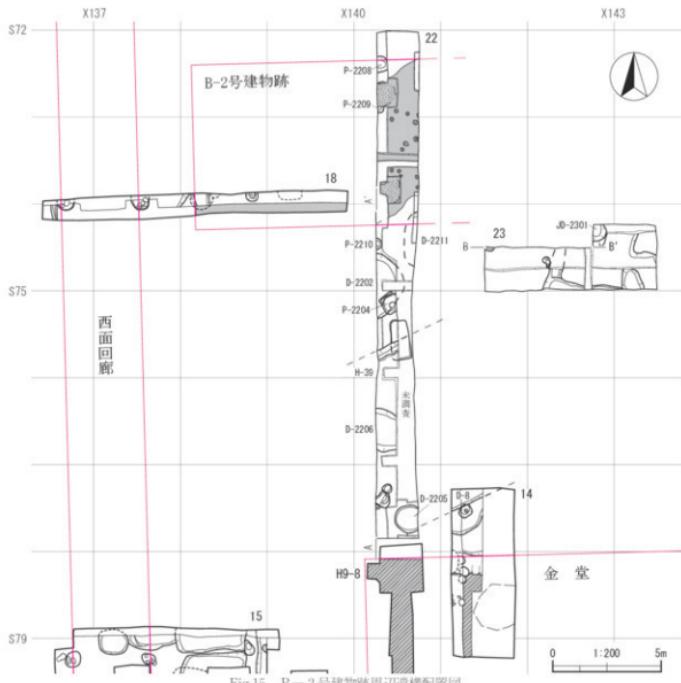


Fig.15 B—2号建物跡周辺遺構配置図

遺構 22トレンチの調査ではB-2の地業版築土が検出され、南北の地業範囲を把握することができた。23トレンチは遺構の南に外れてしまったため、東西規模は不明のままとなった。建物の地業規模は19年度調査と併せて南北7.7m、東西10.2m以上となり、東西棟の建物とみられる。また、地業の断ち割りを行ったところ、版築土中から柱受けのためと思われる円形の瓦敷きが2ヵ所で検出された。

また、B-2号建物跡の南側、金堂との間では、寺院下層の住居跡（H-39）や掘立柱建物柱穴（P-2204）、10世紀以降の所産と考えられる鉄闇連の炉跡（D-2205）や採土のため削られた土坑（D-2202、D-2211）などが検出され、中心伽藍内の土地利用の変遷を考えるうえで有用な資料が得られた。

**出土遺物** 總量としては、22トレンチでコンテナバット18箱、23トレンチで13箱程度が出土した。22トレンチでは廃絶期以降に形成されたと思われる遺物包含層中からの出土が多かった。また、調査区南側の金堂に近い場所ほど出土量が多く、北側にいくにつれ少なくなる傾向が覗えた。B-2号建物跡周辺からの瓦の出土量は少なかった。なお、22トレンチの南側からは包含層より手づくねの鬼瓦(Fig.26-1)が出土している。また23トレンチでは山王庵寺で初出となる軒丸瓦(XV式、Fig.21-4)が搅乱土中より出土している。そのほか22トレンチの鉄関連の軒跡(D-2205)からは、鉄滓などが出土している。

3 金堂北側建物跡 (B—2号)

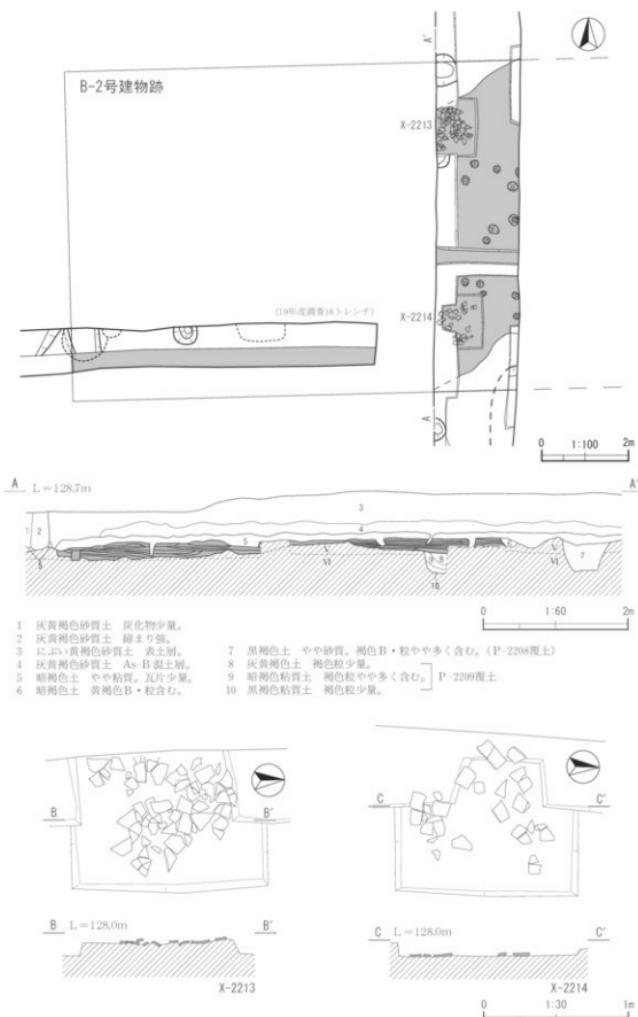


Fig.16 B—2号建物跡

## (3) 各トレンチの状況と検出遺構

## ①22トレンチ (Fig.15~18、PL.10~13)

B-2号建物跡の南側および北側の範囲を確認するため南北方向のトレンチを設定し、46.0m<sup>2</sup>を調査した。結果、B-2の地盤版築土、堅穴式住居跡、土坑、鉄闊連の炉跡などを検出した。

**地業** B-2の地業に伴う版築土が調査区の北側で検出された。範囲は北側がS73グリッドラインより北へ2.7mまで、南側はS74グリッドラインから南へ1.0mまでの範囲に収まる。これにより、規模は南北7.7mであることが判明した。地業の南端および北端では浅い掘り込みが確認できたため、19年度の調査と同様、この版築土が掘り込み地業に伴うものであることが確認された。基壇の有無は不明である。地業の平面プランは不整形で、検出範囲では北縁および南縁ラインとともに東から北に掘れる方向であった。

版築層は、最大8層・厚さ25cm程度残存している。断ち割り部分では、北・南側で版築層が厚く中央付近は薄くなることが確認された。地業の底面は起伏が見られ、南側が低く底面のレベルは標高127.7m前後にあり、中央付近は高くなり標高128.0m前後、さらに北に向かうと低くなり標高127.8~9m前後である。柱が立つ場所には厚く版築し、柱の立たない場所は薄く簡単に済ませているものと思われる。また、版築は黒色粘土質 (V層) 上面に構築されており、版築土には黒色土・暗褐色土・黄褐色土が用いられていた。黒色土・暗褐色土は粘質で、

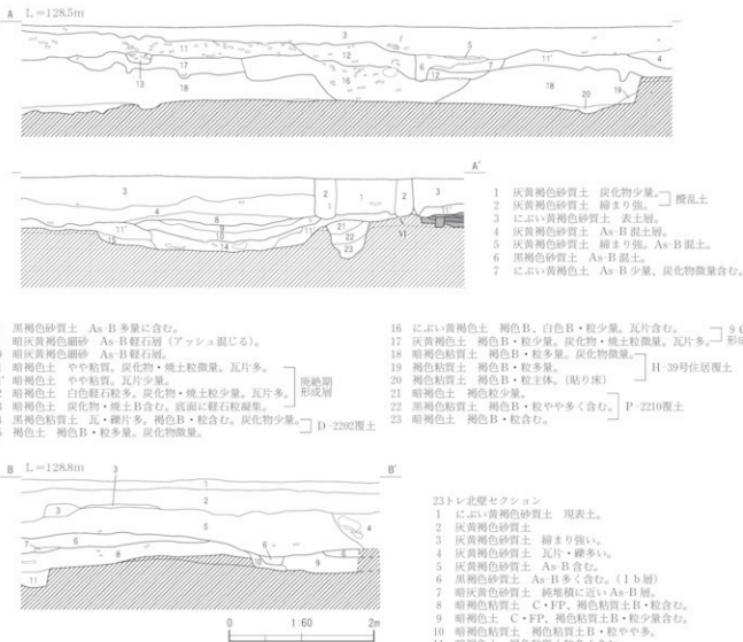


Fig.17 22・23トレンチ断面図

黄褐色土はやや砂質であり、これらが互層状に積み重ねられていた。全体的には塔・金堂の版築と比べ、薄くて簡易な版築といえる。

**版築土中の瓦敷** 版築の断ち割りを行ったサブレンチ内から2ヵ所で、瓦が円形状に薄く敷かれた状況で出土した（X-2213・2214）。瓦は破損した平瓦を用いており、版築土中に水平に敷かれていた（Fig.16）。瓦敷は版築土を10cm程度掘り下げたところで検出され、瓦敷から地盤底面までは10cm程度とみられる。瓦敷の範囲はX-2213が直径1.1m、X-2214が1.0m程度と推測される。また、2ヵ所の瓦敷の芯々を計ると距離は約4.5m離れており、方向は真北から西へ2°前後傾く。なお、この瓦敷の瓦はすべて取り上げを行い、個体の観察を行った。結果、すべてが桶巻き作りされた平瓦で、凸面は横ナデ調整されていた。これは、山王庵寺の平瓦でI類とされるもので、時期は概ね創建期から8世紀前半頃までと考えられる古い瓦である。

このような版築土中の瓦敷の類似例として、上総国分尼寺の金堂基壇の瓦敷がある（龍川 1991）。この基壇中の瓦敷は、直径1.6～2mの方形もしくは円に近い楕丸形状に瓦を薄く敷きならべたもので、瓦は完形のものもあるが、多くは破損したものを用いている。瓦敷の上は、数層版築されているが根石などは確認されていない。この瓦敷は基壇構築の途中で礎石位置にあらかじめ敷かれたものと推測されている。ただ、基壇に付設される階段との関係から、この瓦敷のうえに実際に柱が立てられることはなかったとされている。

今回検出した瓦敷も上総国分尼寺の例と同様に、版築の途中で柱位置にあらかじめ敷かれたものと推測されるが、遺構上面は削平されているとみられ、礎石やその据え付けの痕跡は確認することができず、この瓦敷の上に実際に柱が立っていたかどうかは不明である。ただ、瓦はもともと破損したものを用いているが、その場で細かく破損しているものが多く、この状況から実際に上から柱や礎石の重圧がかかっていたとも考えられる。

**その他の遺構** 寺院下層の遺構として堅穴式住居跡（H-39）と掘立柱建物柱穴（P-2204）が検出されている。H-39号住居跡は調査区南側で検出され、北壁が確認された。昨年度調査の14トレンチで検出したD-8号土坑が、向きや底面のレベル、覆土の状況が類似するためこの住居跡と同一の遺構と考えられ、これと併せて南北の規模が8.1mの大型住居跡と推定される。時期は出土遺物から7世紀代と推測される（詳細はVII章参照）。また、この住居跡は地山の褐色粘土質ブロックを多く含む單一層で埋まっており、これが人為的理土と考えられることから、寺院の造営時に、伽藍内の整地の一環として埋められたものと考えられる。P-2204号柱穴は、調査区中央付近で検出された掘立柱建物の柱穴である（Fig.18）。調査区が狭小であるためほかの柱穴は確かなものが確認できなかつたが、調査区西壁際で部分的に確認されたP-2210が同じ建物の柱穴の可能性がある。建て替えがあつたとみられ、柱穴は円形の掘り方から方形の掘り方へ変更されている。規模は、円形掘り方が直径80cm程度、深さ85cmを測り、方形掘り方は長径89cm、短径79cm、深さ68cmを測る。柱穴内からは建て替え後の柱根固めとみられる礎板石が出土している。

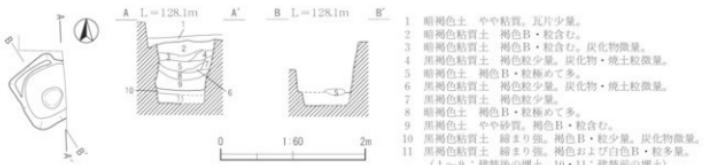


Fig.18 P-2204号柱穴

10世紀以降の遺構として、鉄関連の軌跡（D-2205）や採土のために掘削された土坑（D-2202・2211）などが検出された。調査区南で検出されたD-2205号土坑は、壁面に粘土を貼付しており、被熱により焼土化している。覆土からは鉄滓のほか瓦片や礎が出土している。形状は東西に長い楕円形と推測され、規模は現状で東西108

## V 伽藍の調査

cm以上、南北129cmを測る（詳細はVII章参照）。調査区中央付近で検出されたD-2202号土坑およびD-2211号土坑は、ともに覆土上層に純堆積に近いAs-B軽石層が堆積しており（Fig.17断面図—9・10層）、As-B降下時（1,108年）には、埋まりきらずに窪地であったとみられる。地山の褐色粘質土層（VI層）を掘り込んでおり、採土を目的として掘削されたと考えられる。規模は、D-2202が東西130cm以上、南北300cm以上、深さ25cmを測り、D-2212は東西62cm以上、南北250cm以上、深さ30cmを測る。また、9世紀代の整地層とみられる土層も確認された（Fig.17断面図—16・17層）。これは瓦片を多く含み一部で掘り込み（D-2206）もみられることから、瓦等を片付けるための整地とみられる。瓦片に混じり、土器が出土している（Fig.55—8～13）。塔跡周辺では9世紀以降の整地層が検出されており、この時期に塔の修復が行われたことが考えられている。この整地層も同時期のものであることから、9世紀代の建物の修復や周辺の整地は、塔だけではなく金堂でも行われた可能性が示唆される。

### ②23トレンチ（Fig.15・17、PL.13）

B-2号建物跡の東側範囲を確認するため東西方向のトレンチを設定し、18.5m<sup>2</sup>を調査した。結果、B-2の地業範囲かDは南に外れてしまったため、確認することはできなかった。

**検出遺構と調査区の状況** B-2に関連する遺構は検出されず、遺構としては、縄文時代の土坑（JD-2301）が検出されたのみである。この土坑から石鐵1点が出土した。調査区全体としてはAs-B軽石混土層の堆積が厚く、一部で純層に近い堆積も確認できた。主要伽藍内のほかの調査区ではAs-Bの純堆積はあまりみられない。22トレンチの状況も併せて考えるとB-2号建物跡の南側一帯の地形は、As-B降下時に落ち込んでいたものと考えられる。

### （4）B-2号建物跡の規模・構造と性格

建物の地業規模は19年度調査と併せると南北7.7m、東西10.2m以上となる。今回の調査では東西の範囲を確定することはできなかつたが、現状で東西棟の建物となることは間違いない。また、版築土中の瓦敷は柱位置を示しているものと考えられ、2ヶ所の瓦範囲の芯々を計ると約4.5m（15尺）となることから、梁行2間（柱間寸法7.5尺）の建物が想定される。なお今回の検出範囲では、地業の平面プランは不整形で、北縁および南縁のラインはともに真東から北に振れる方向であったが、瓦敷から想定される建物の振れは少ない（瓦敷の芯々で2'前後）。このため、地業の傾きは建物自体の方向を示しているのではなく、掘り込み地業が不整形に施されている結果、このようなプランで検出されたものと思われる。また、建物周辺からの瓦の出土は少なく、瓦葺ではなかった可能性も考えられる。

建物の位置は、西面回廊の内側2.6m、金堂の北側10.5mで、回廊と並存した場合はこれと軸を接するような建物であったと思われる。建物の性格としては、回廊内に存在するため限定されるが、仮に対称となる東側に同規模の建物があった場合、鐘楼もしくは経蔵の可能性が考えられる。ただ鐘楼・経蔵は通常、桁行3間×梁行2間の南北棟であるがB-2は東西棟であるため、鐘楼・経蔵としては変則的である。いずれにしても、この建物の性格の解明のためには建物の東側範囲の確定と、対称となる回廊内東側の調査が必要となろう。造営時期については塔・金堂の緻密な版築に比べ、講堂や南面回廊に類似した簡易な版築であるため、塔・金堂の造営より遅るものと思われる。

## 4 寺 域

### （1）これまでの調査

**昭和の調査** 寺域北側では、昭和49・52・53年度に調査が行われている（1・4・5次調査）。1次調査で塔の北約110mで掘立柱建物が検出され、このときは北門跡と考えられた。4次調査で、この建物が桁行9間・梁行3間

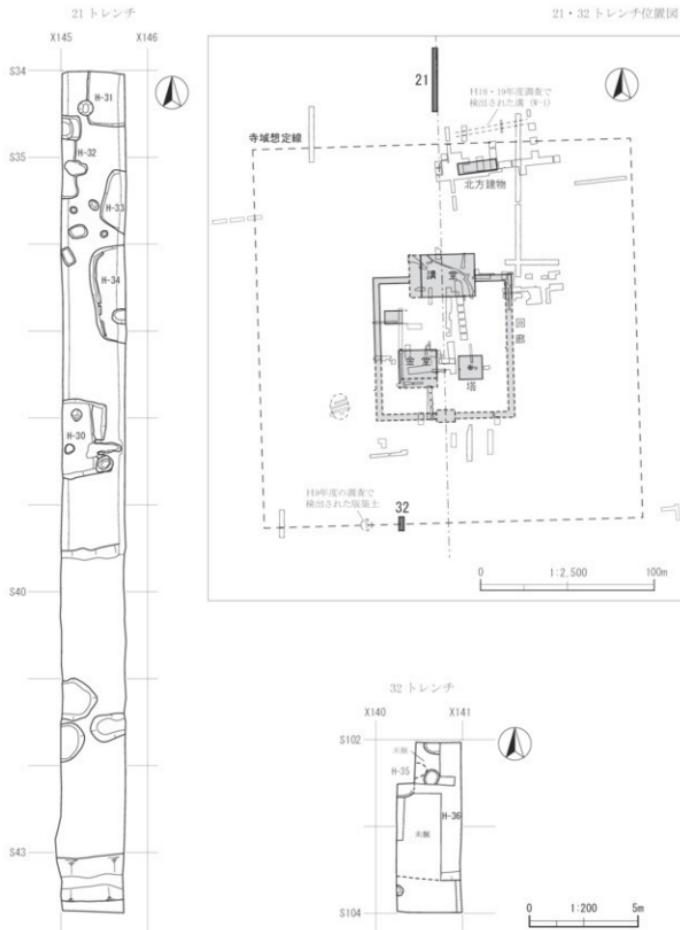


Fig.19 21・22トレンチ全体図と位置図

## V 伽藍の調査

の東西棟の建物であることが確認され、僧房もしくは食堂とされた。5次調査では、この建物の南北二面に庇がつくことが確認され、さらには周辺からは山王庵寺下層の遺構と考えられる掘立柱建物群が検出されている。

**平成9年度調査** 塔心礎の南西100mの地点から寺域南辺の築地跡と推定される版築土が検出された。このときは厚さ30cmの版築層が延長1mにわたって検出されている。

**平成18・19年度調査** 平成18年度調査で、寺域の北側を区画する可能性のある溝跡を検出した（W-1号溝跡）。平成19年度調査でこの溝の西側延長部を調査したが、溝は途中で途切れる（もしくは走行方向を変える）ことが分かり、これが寺域を区画する遺構である可能性は低くなった。この溝跡の走行方位は、南側に近接する北方建物の方位に類似していることから、この建物との関連性が示唆される。また、寺域南側では19年度調査で、平成9年度に版築土を検出した場所の西側47mの地点に南北トレンチを設定し調査したが、つづきの版築土を検出することはできなかった。

### （2）寺域北側の調査

寺域北側の区画施設などの遺構確認のため、21トレンチを調査した（Fig.19、PL14・15）。調査面積は120.0m<sup>2</sup>である。

**調査区の設定** 寺域北側では18・19年度に調査を行ったものの区画性のある遺構が検出できなかっことから、寺域は当初の想定（方二町）よりさらに北側へ広がることを視野に入れ、調査を行った。調査区は伽藍中軸線上で、講堂の北80mの地点から北に40mの南北トレンチを設定した。

**遺構** 調査区からは、10世紀以降の堅穴式住居跡が5軒検出された（H-30～34、詳細はVII章参照）のみで、寺域北側の区画に関連する遺構は検出できなかっことから、なお、調査区南半は自然地形と擾乱による落ち込みである。

**遺物** 瓦の出土は主要伽藍に比べると少なくなり、コンテナパットで6箱程度である。そのほか、住居跡に伴う土器・石製品等が出土した。

### （3）寺域南側の調査

寺域南側の区画施設、とくに平成9年度に調査された築地跡と思われる版築土のつづきを確認するため、32トレンチを調査した（Fig.19、PL15）。調査面積は22.5m<sup>2</sup>である。

**調査区の設定** 19年度調査で寺域南側については、平成9年度に版築土が検出された場所の西側延長部を調査したが、つづきの版築土を確認することはできなかっことから、そのため今年度は、平成9年度調査区の東側約18mの地点を調査し、版築土の有無を確認することとした。

**検出遺構** 版築土は検出されなかっことから、堅穴式住居跡が2軒検出された。住居跡の時期は出土遺物から、H-35号住居跡が10世紀代、H-36号住居跡は7世紀前半と推測される（詳細はVII章参照）。なお、平成9年度の版築土検出地点を西側に延長するとH-36号住居跡と重複するが、これは寺院下層の遺構であるため、H-36号住居跡に版築土が壊されていることは考えられない。

**出土遺物** 瓦の出土量は少なく、コンテナパットで1箱程度である。そのほか、住居跡に伴う土器が出土しており、とくにH-36号住居跡から土師器杯・甕や須恵器杯・高杯・短頸壺・甕などがまとまって出土した（Fig.46・47）。

**平成9年度検出の版築について** 昨年度の調査と併せて考えると、平成9年度に検出された版築土が南辺の築地である可能性は低くなっただといえる。ただ、調査箇所が限定されているため、今後さらに広い範囲の調査を行い検証する必要がある。

## VI 出土瓦

### はじめに

昨年度までに出土した軒瓦の種類はFig.20のような状態である。これらを分類する条件に瓦当紋様の相違を柱とし、造瓦手法などの要素を加味して型式を設定してきた。が、様々な矛盾を解消しきれないまま今日に至っている(註1)。しかし、それぞれに与えた型式名称は、時間の経過とともに一人歩きをはじめている部分もあり。今後、新たに出土するであろう新型式の数も、そう沢山に及ぶものとは思われない。いたずらに型式分類をいじって無用な混乱を起こすよりも現状の型式分類を基本として今後も進みたい。

今年度の出土瓦を見ると軒丸瓦114点、軒平瓦70点、文字瓦45点などの出土があった。これに加えて、隅木蓋や面戸瓦と考えたい瓦群の出土などがあった。

特異と思われるには、重弧紋軒平瓦のなかで新たな分類を考えるべきものの出土があった。これを機会に、山王庵寺出土重弧紋軒平瓦の特徴について考えて見たい。ともすれば、東国の大寺院建立の年代観は、畿内の軒丸瓦との比較から論じられてきた傾向がある。山王庵寺から出土している重弧紋軒平瓦は、質・量ともに豊かな内容があり東国大寺院の代表的な存在ではないかと考える。重弧紋軒平瓦の特徴を整理することで山王庵寺出土重弧紋軒平瓦の時間的な序列を想定し、軒丸瓦との組合せなどを考える一歩としたい。軒平瓦にも軒丸瓦とともに山王庵寺の建立時期や歴史的経過などについても語らせたい。以下、順次報告する。

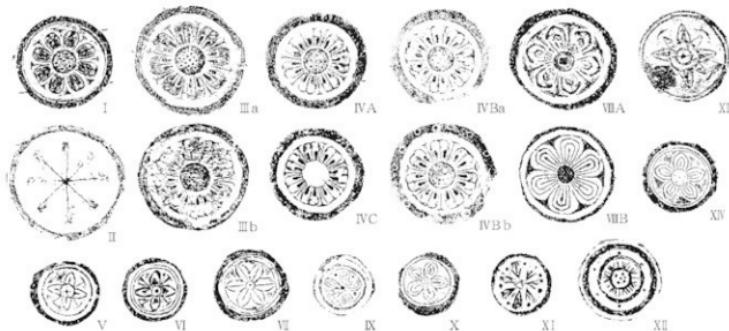
### 1 軒丸瓦 (Fig.21・PL.16・Tab. 4)

瓦類全体の出土傾向でもあるが、南回廊の検出を想定して設定した30・31トレンチからの出土量が多かった。出土状況では搅乱土から採集されたとする瓦が多い。12ヶ所に設定したトレンチからの合計で114点である。このなかでは、素紋の周縁部分だけの破片資料の出土が多くを占めた。外縁が素紋で、内区（中房も含めて）より高い外縁の軒丸瓦は、II・III・IV式とあるが、破片の多くはそれぞれの特徴から型式の判別はほとんどあやまりなく可能である。以下に出土傾向を見れば、IV式の外縁の破片は49点(43.7%)であった。このことは別としてもIVA・B式（複弁八弁蓮華紋）軒丸瓦は29点(25.6%)出土し最も多かった。次いでIII式（複弁八弁蓮華紋）軒丸瓦が19点(16.8%)であった。

一方でI・II式（素弁八弁蓮華紋）軒丸瓦が各5点(4.4%)である出土状況は、『平成19年度調査報告』のTab.8(昭和49～平成11年までの出土軒丸瓦表-66頁)に見る出土傾向に同じあり、山王庵寺の伽藍は複弁蓮華紋軒丸瓦が採用された時期以後に整えられたと見てよいだろう。

Fig.21-1は、今だに瓦当面全体が残っている資料の出土例を見ない軒丸瓦II式である。隆起線八弁蓮華紋軒丸瓦と呼んでいる(註2)。2片が結合されたことで恐らくこれまでの出土例の中では最も大きな資料であろう。瓦当面は、まず外縁部に粘土紐が押し込まれている。瓦当側面（瓦当部の瓦当面に沿った部分）が削り整形されて外縁が狭く高く作り出されている。このことから瓦筋はB型(註3)と思われ、円形であったと推定される。丸瓦部凸面の縱方向の指痕は、丸瓦を接合するときに強く粘土を押し込むことで生じた痕跡か。凹面では、結合のため糊として加えられた粘土が丸い指痕となって狭く残り、布筒痕に続く。瓦当径17.9cm・瓦当厚0.9cm。灰色で硬く焼きあがる。胎土中に茶黒色の粘土粒子や構造の白色粘土がみられることから、安中市秋間窯跡群で生産されたと考えたい。いまだに他の遺跡からの出土例を見ない軒瓦である。昭和54年の第6次調査で最も多い点数が塔跡西側で出土している。本例は27トレンチ（金堂跡南側）からの出土である。

VI 出土瓦



(IX・X・XIVは同様例を『史跡上野国分寺跡』から転載)



瓦当紋様は、I. 刃物による削り仕上げ、II・III. 押し引き、IV～IX. 型押し、VI. 手書きである。

(V・VI・VII・IXは『史跡上野国分寺跡』から同紋・同様例を転載)

Fig.20 これまでに出土した軒瓦

2・3は、複弁七弁蓮華紋を瓦当紋様とする(註4)。両者は同紋異範の瓦である。2をIVA式、3をIVB式としたが、中房怪・弁長などでIVB式が0.2cmほど大きい。IVB式では、外縁が素紋のままのもの(IVBa)と竹管を連珠紋のように並べて刺突したもの(IVBb)がある。3は外縁が素紋であるのでIV Ba式である。

両者は、別作りされた丸瓦を接着式(註5)で接合するが、丸瓦の接合部が未加工のもの(IVA)と丸瓦の接合部木口面に範傷を入れ接着の助とするもの(IVB)がある。(Fig.21-2・3、PL.16-2・3)ともに安中市下秋間の八重巻窯で生産されたことが、安中市学習の森資料館展示資料、秋間資料館所蔵の田島伊作氏寄贈資料により分かっている。両者の瓦筋もB型で円形であったと思われる。2は、高温で焼き上げられ、須恵質で硬い。胎土

中に白色の砂粒が混じる。31トレンチ(南回廊想定地)からの出土である。3は、2に比較して焼成温度が低かったようでやや灰白色味が強い。概してIVB式はIVA式より灰色がかかったものが多い。これも31トレンチからの出土である。

4は、1本作りされた軒丸瓦で、初めての出土例である。XV式軒丸瓦と呼ぶことにした。瓦当紋様の類似例として『黒熊中西遺跡』(註6)の軒丸瓦E類が比較的近い。紋様は、花紋とか蓮華紋をあしらったものとは思えない。二重の円圈紋(外側の圈線はその幅が残っている部分が多く、単に瓦筋の端である可能性もある)の中に、十字に交差する横に長い円紋を置く。円紋が交差して出来た中央の四角い部分が中房のように見え、これから四弁の花弁が配置されたかのようである。四つの弁間に珠紋が1つずつ配置される。瓦筋の彫りは浅く、瓦当直径よりも小さい(C型)。瓦当裏面には綾りのない布目痕が残ることから、軒丸瓦全体の形が出来上がってからC型瓦筋が打ち込まれたものと推定出来る。軒丸瓦の側面(図の下部)が僅かに残るが、これから推定すると一本作り軒丸瓦に特徴的な裏面の突帯状のたかまりはなかった可能性が高く、その製作台も横置型のものが推定される。胎土中には一定量の砂粒を混ぜている。灰色で硬く焼かれている。23トレンチ(金堂北側)で出土。

## 2 軒平瓦 (Fig.22, PL.17・18, Tab. 4)

調査区全体の出土傾向は30・31トレンチ(南回廊想定地)での出土が多く軒丸瓦と同様の結果となった。出土点数は、70点と少ない。ただし、三重弧・四重弧紋(II・III式)軒平瓦で、平瓦部凸面に繩目打捺痕が残り段頸がつくなどの新しい種類の軒平瓦が発見されている。この中には一枚作り型押しの重弧紋があり、すでに軒平瓦

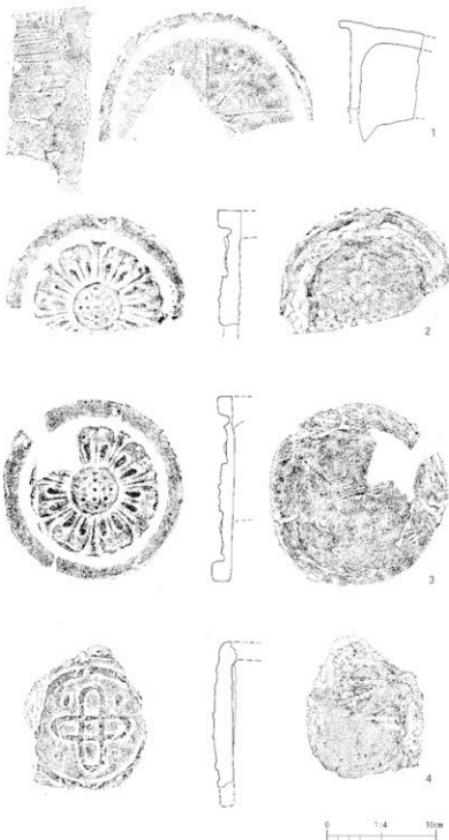


Fig.21 軒丸瓦

## VI 出土瓦

IV式とした一枚作り重廓紋押し軒平瓦との整理が今後問題となろう。

また、軒丸瓦IV式とセットとなると考えている三重弧紋（II KB）軒平瓦は、山王庵寺式重弧紋とも言えそうな独特の作り方がされている。今年の発掘調査でも、II KB（II KCを含む）式は51点（74.5%）と最多的の出土数があり、軒丸瓦IV式との組合せは確定と見てよい。

また、II KB式として分類してきた軒瓦の多くは回転台上で施紋されたと考えられるが、桶巻き作りされた粘土円筒を軒平瓦用に作り分割した後、一枚毎に押し引き施紋したと考えられるものが含まれていた。この機会に、重弧紋全体について再考したい（註1）。

Fig.22-1は、素紋段顎（Ig式）軒平瓦である。桶巻き作りされた粘土円筒の凸面広端に粘土紐を二段に重ねて段顎を作っている。平瓦部凸面は横方向にナデ痕跡が残るから回転台上で整形され4分割して軒平瓦となったものだろう。瓦当面は刃物で削り仕上げされ、側面は大きく面取りされている。胎土中に茶黒色・白色の粘土粒子が見え砂粒を含むが精製された粘土が用いられている。黒灰色で焼成温度は高くはないものと思うが、瓦としては充分な焼き上がりである。30トレンチ出土。

なお、顎のない素紋軒平瓦（I）も、今回は3点出土した。I・Ig式の出土傾向を見ると軒丸瓦I・II式の出土が目立った塔跡・金堂跡の調査（第6次調査）では出土していない。あえて掲げれば、第4次調査（北方建物跡）でI式が5点、Ig式が4点出土し、この時には軒丸瓦I式が3点ほど出土している。また、平成18年度調査では、講堂跡北東のH-12住居跡から軒丸瓦・軒平瓦のI式各5点が出土したのが多い例であった。このように軒丸瓦I・II式と素紋軒平瓦の関係は、その出土傾向からは説明しにくい状況がある。しかし、軒丸瓦・軒平瓦のもつ相対的な年代観からは、この組合せ以外考えにくい。

2は、三重弧紋綱目瓦（II N）に段顎（g）がついている軒平瓦である。初めての出土例となった。瓦は一枚作りされ顎用の粘土を貼り付け、瓦当紋様を形押ししたものと思う（II NFg）。顎は幅4.5cm、深さ1.3cmほどで、横方向に細かい綱目痕が残る。1点だけの出土であり、確信は出来ないが軒平瓦IV式（型押施紋綱目一枚作り）重廓紋軒平瓦との関連性が整理される必要がある。暗灰色で砂粒の少ない土が用いられ硬く焼き上がる。31トレンチからの出土。

3は三重弧紋綱目瓦で桶巻き作りされている。粘土円筒に瓦当用粘土を加えて、粘土円筒を分割後、左から右へ瓦当紋様を押し引き施紋している（II NB）。この軒平瓦は左側面が僅かに残るが、左側面では重弧紋は幅広く谷は浅いのに対し、右に移るにつれて重弧紋幅がそろい、谷が深くなっている。II NB式では、回転台で押し引き施紋された例が昨年度調査報告にある（註2）。今回の例は分割後の押し引き施紋と考えられるので区別するため出土例をII NB-2式とし、昨年度例をII NB-1式とする。砂粒を含むものの灰色で硬く焼きあがっている。32トレンチ（南回廊想定地）からの出土。

4・5は、四重弧紋綱目（III N）軒平瓦である。これまで軒平瓦III式としてきたものは、桶巻き作り軒平瓦で斜格子目叩き様・顎部瓦当面近くに一条の隆起線紋があるものに限られていた（III KD・III KDg）。

4の平瓦は一枚作りされたものと思われる。顎部に粘土を付加して平瓦凸面を曲線顎に作っている。瓦当紋様は、山も谷も台形状となっていて、谷の部分の粘土が山の上に食み出しているので押し引き施紋された結果と考えた。このことを確定するためには、類例の増加をまつ必要がある（III NF）。平瓦部凸面は、縦方向に綱叩きが残るが瓦当面側約10.0cmほどは横ナデ整形されている。凹面は瓦当面直上まで布目痕が残る。灰色で硬く焼き上がる。胎土には細かい砂粒が多い。31トレンチ出土。

5は、右側面が残る。平瓦は一枚作り（側面に布目痕が残る）である。瓦当紋様は破片左端で瓦当厚4.1cm、右端で3.1cmであり、押し引きとは考えられず、型押し施紋された四重弧紋（III NF）である。割れた面で見るかぎり瓦全体をひとつ粘土で作り上げている。平瓦凸面は粗い綱叩きが縦方向に施された後、瓦当面から11.5cmほどまで横方向に綱叩きが施される。平瓦部凹面は瓦当直上まで布目痕が残る。IV式重廓紋軒平瓦に極く類似した

2 軒平瓦



Fig.22 軒平瓦 1

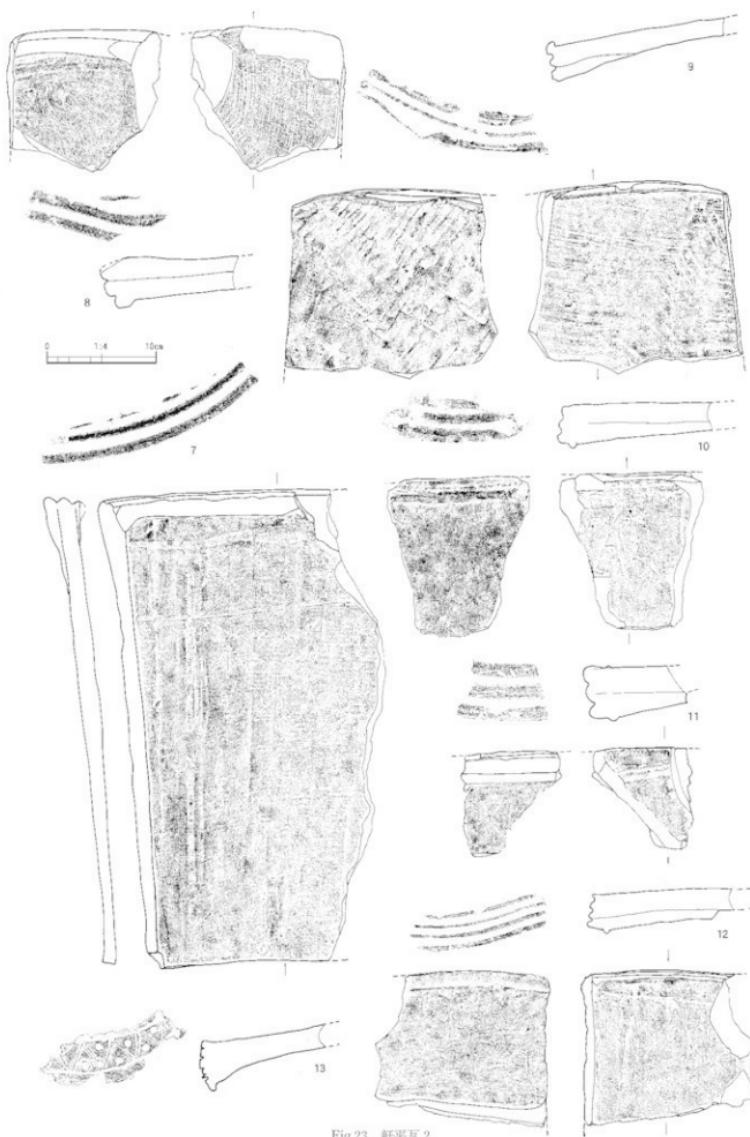


Fig.23 軒平瓦 2

感じである。重廓紋軒平瓦とした2点は段頸となっていることや、綱叩きの痕跡が本例より整っていて、割れ目には白色粘土の縞が見える。良質の粘土が用いられている。焼成温度は、高くないものと思う。表面は灰色に、割れ目は橙灰色である。22トレンチ（金堂北側）の表土出土。

6・7は斜格子目叩き桶巻き作りで瓦当施紋部に粘土が加えられている軒平瓦（IIKB）である。

6は、今回出土のIIKB式では最も瓦当面が広く残る例であり、7は長さのわかる例である。6・7とともに瓦当面は、桶巻き作りされた粘土円筒の直径の広いほうの木口面を包み込むように瓦当用粘土を貼り加え、回転押し引きとして重弧紋を造り出す。平瓦部凸面は回転台による横方向のナデ仕上げであるが、6には僅かに斜格子紋の痕が残る。瓦当面の比較的近くにあり瓦当用粘土を加えた後、叩いた可能性も考えられる。茶黒色・白色の粘土粒子が胎土中に見られ、秋間資料館所蔵瓦調査結果とも合せ八重巣窯産として良い。灰白色であるが硬い。

7の長さは、43.7cmある。総社資料館所蔵の同型式例とほぼ同じ値が計測された（註9）。平成18年調査H-12号住居跡出土の平瓦との関係が考えられる。平瓦凸面は6と同様、回転を利用した横ナデ仕上げ。1部に斜格子紋が残る。凹面では、右側面から4.0～5.5cmほど内側に浅い溝状の溝みが残る。分割突帯であろうか。さらに、狭端に近い部分で長さ5.5cmほどで枠板の幅だけ、布目が突出している。この部分、枠板が破損したものらしく、他の平瓦片でも造瓦具の同じ場所を写しとったと思われるものが出土している。6に比較して灰色味が強く硬く焼き上がる。6・7とともに31トレンチ出土。

8・9も、これまでIIKB式としてきた。6・7と異なるのは、瓦当用の施紋が桶巻き作り粘土円筒を分割後押し引いていることである。IIKB式の中では極く少い出土数である。8は一見重弧紋の最下段のものが突帯であるかのように見えるが、これを含めて三重弧紋となっている。左側面を残す破片で弧線は太いが、平瓦凸面に対して斜めに押し引かれ、正面から見てやや波をうつた感じとなる。平瓦凸面は横ナデ、凹面では、糸切り痕・布筒痕が見られる。また、左側面に沿った位置に分割突帯痕と思われる浅い溝もある。割れた部分は橙灰色で、茶黒色・白色の粘土粒子や砂粒が見られるが良質の粘土が選ばれている。27トレンチから出土。

9は左側面が残る。重弧紋の高さや幅が一様でなく分割後の押し引きである。瓦当用の粘土は、平瓦部凸面側だけに貼りたされている。また、この軒平瓦では、瓦当面が平瓦の狭端側にあること、平瓦凸面には平行線紋の叩打痕が打ちっぱなしのままとなっている。凹面には、糸切り痕・布筒痕・布筒の縫い合せ目痕が残る。重弧紋の上段の一本が突出していて、布筒の端が立ち上がっているのは、瓦当紋様が押し引かれるときに、カマボコ形の凸型台に設置された状況であったことを思わせる。暗灰色で硬く焼き上がる。砂粒を含む良質の粘土である。27トレンチ出土。

10は三重弧紋桶巻き作りで頸部に隆起線（IIKD）のある軒平瓦である。瓦当紋様は回転台上で押し引かれたと思われる。破片は、縱方向に14.1cmが残っているので段頸の軒瓦ではない。平瓦部凸面は隆起線の引き出しとともに横ナデされる。凹面は、糸切り痕と枠板痕が残り、布筒痕は瓦当面の直上まで残る。暗黒灰色で高温で焼き上げられている。割れ目では、瓦当両面に平瓦凸面木口沿に貼りつけられた粘土が白色で平瓦本体と明確に異なる境界線となっている。茶黒色・白色の粘土粒子が見られ、秋間窯跡群産と考えたい。高温で焼かれ仕上がりは硬い。21トレンチ（守城北辺）出土。

11の三重弧紋は、頸部に隆起線のある段頸（IIKDg1）の軒平瓦である。この例では、段頸の一部が辛うじて残っている。瓦当厚が5.0cmを越えて山王庵寺軒平瓦の中では幅・厚さともに最も大きい。同種のほかの例で見て桶巻き作りされ、粘土円筒を分割後に瓦当紋様は押し引きされている。重弧紋は、ぼってりと厚い。頸部粘土は平瓦凸面広端に貼り着けられている。11では、中段の重弧紋のほぼ真中に粘土の貼り合せ目がある。灰褐色で砂粒の多い粘土である。21トレンチからの出土。

12は、四重弧紋格子目スリ消し隆起線紋付き段頸（IIKDg）の軒平瓦である。昨年度調査では南回廊の検出のため設定した19トレンチの瓦溜りから3点見つかっている（註10）。幅11.0cmと長い貼りつけ段頸である。重弧紋は、

## VI 出土瓦

Tab. 4 平成20年度調査出土軒丸瓦分類集計表

	21トレ 寺北沢 金堂北	22トレ 金堂北	23トレ 金堂北	24トレ 塔西	25トレ 塔跡	27トレ 金堂南	28トレ 南回廊	29トレ 想定中門	30トレ 南回廊	31トレ 南回廊	31aトレ 南回廊	32トレ 寺南辺	合計	備考
I式	1	1	1						1	1			5	(4.4%)
II			1	3	1								5	(4.4%)
III a		2	2	1				4					9	
III b	2		1	1			1			1			6	19(16.7%)
III c				2					2			4		
IV A	2				1		1		11	9		24		(21.1%)
IV Ba						1			2	1		4		(25.5%)
IV Bb											1		1	5(4.4%)
IV C														
IV	6	2	1	6	2				29	4		50		(43.7%)
V														
VI														
VII														
VIII A														
VIII B														
IX														
X I														
X II														
X III														
X IV														
X V			1									1		(0.9%)
不明														
接式系				1		1			2			4		(3.5%)
一本作り系									1			1		(0.9%)
合計	2	9	4	7	15	6	2		50	19		114		(100%)

Tab. 5 平成20年度調査出土軒平瓦分類集計表

	21トレ 寺北沢 金堂北	22トレ 金堂北	23トレ 金堂北	24トレ 塔西	25トレ 塔跡	27トレ 金堂南	28トレ 南回廊	29トレ 想定中門	30トレ 南回廊	31トレ 南回廊	31aトレ 南回廊	32トレ 寺南辺	合計	備考
I		2							1				3	
I #									2				2	5(7.1%)
HNA														
HNB										1			1	(1.5%)
HNF										1			1	(1.5%)
HKA														
HKB	3	1	2	4	2	9		1	14	10	1	47		
HKC				1	1				1	1		4		51(72.7%)
HKD	1												1	(1.5%)
HKDg	1												1	(1.5%)
HKDdg														
HKF														
H K														
H I		2				1							3	(4.2%)
H INF	1									1			2	(2.8%)
H KD									3				3	(4.2%)
H HKDg	1												1	(1.5%)
HSD or HKDg														
IV														
V														
VI														
V or VI										1			1	(1.5%)
VII														
VIII														
IX														
X														
不明														
桶作り系														
一枚作り系														
合計	6	6	3	5	3	9		1	21	15	1	70		(100%)

粘土円筒分割後に左から右に押し引かれてる。隆起線紋は、この軒瓦では顎面とともに横ナデ整形されたときに引き出されているが、重弧紋の施紋具によって左側面に近い部分が崩されている。黒灰色で重く硬く焼き上がる。胎土には茶黒色・白色の粘土粒子が混じる。秋間窯跡群で生産されたと思われる。21トレンチからの出土である。

13の瓦当紋様は、手描き幾何学紋様の軒平瓦（VII）である。昭和の第3次調査<sup>(iii)</sup>で瓦当の左端部分が出土している2点目となる。平瓦凹面の瓦当面直上近くまで布目痕が残ることや、顎に当たる部分まで平瓦と同じ粘土であることから、カマボコ型の製作台に粘土を盛りつけ、一気に瓦当面まで整えたものと思う。前出の5の例や下野国分寺の一枚作り軒平瓦との製作法<sup>(iii)</sup>の比較が必要となろう。整えた瓦当面にます棒となる沈線が引かれ（同じ大きさと思われる同型の瓦当紋様の出土例が他遺跡にあるので、棒の沈線だけが型押しされた可能性もある）。窓で三角紋が棒内に間じきりする。三角紋には、径の小さい竹管紋（0.6cm）が刺突される。なお、瓦当面には布目痕が見られる部分があるが、平瓦凹面から連続するものではない。平耳凸面側は縦方向のナデ仕上げ、灰白色で砂粒を多く含む。焼き上がりは硬い。31トレンチからの出土。

### 3 丸・平瓦 (Fig.24、PL.19の24-6・24-9)

—昨年・昨年に比べて出土量は多くはない。従って、丸・平瓦ともに破片の大きさも小さく一枚の瓦全体が残るような例は見当たらない。Fig.24には丸瓦で4点、平瓦で5点を図とした。1~4の丸瓦は行基式（無段式）丸瓦である。丸瓦の行基式と玉縁式（有段式）の出土率の関係は、8ないし9割は行基式と見てよいだろう。

1は狭端部を残し、最長部で12.5cmほどの破片である。狭端弦幅12.2cm、同深4.5cmほどを測る。凸面は回転台上で横ナデ仕上げされたものと見られ、叩打痕跡はほとんど消されている。一部に齧目かという程度の痕が残すが断定は出来ない。凹面は布筒痕と糸切り痕が残る。右側面近くに粘土板合せ痕がある（広端を下にしてZ形）<sup>(iii)</sup>。特徴的なのは側面の仕上げで、粘土円筒を分割した後、凹面側のみ面取りのように窓でナデそろえる（粘土の張り出た分が凹面側へ折り返されている）。この結果、布筒面より1段高いナデられた面が出来上がっている。よく精製された粘土が用いられている。内外面とも櫛し仕上げ。30トレンチ擾乱土出土。III類平瓦に対応する丸瓦。

2も狭端部を残す。右側面で20.2cmの長さが残る。1に比較して、やや細い型木が用いられている。狭端弦幅10.7cm、同深4.1cmである。凸面は横ナデ仕上げされるが、ほぼ全面に縦方向の齧目痕が消し残されている。凹面の布筒痕の狭端縁近くでは0.1cmほどの太い糸痕が布目を離して二段に残っている。後世の丸瓦に見られる「とり繩」のようなものか。側面は右側面だけ面を取る。狭端面には1部に削り痕が見られるが型木からはずしたままの状態と思われる面が残る。全体に灰色。砂の少ない良質の粘土が用いられ、硬い焼き上がりである。22トレンチからの出土。

3は、広端面を残す破片であるが、ややおしつぶされた感じがある。現状で広端弦幅18.5cm、同深8.3cmある。凸面には縦方向に2.5~3.5cm幅の削り面と思われる弱い稜線が残るが、最終的には横ナデ仕上げされている。広端縁の右側面により格子目の打捺痕が消し残り、凹面には布筒痕が残る。右側面では粘土板の合せ目痕が残る（S形）。側面・木口部とともに凹面側を小さく削りとて面取りしている。砂粒を一定量含むが瓦用に精製された粘土が用いられている。暗灰色で硬く焼きあがる。31トレンチ出土。桶巻き作り平瓦や同軒瓦と対応する。これまでの出土例では平成18年度報告のFig.23-1・2あたりが同類か。

4は今回出土の丸瓦片では最大のものである。広端面を残し、長さ37.2cmまで測れるので狭端縁まで残り僅かであったと思われる。広端弦幅15.1cm、同深7.6cmが測れる。凸面のやや狭端によった部分に径3.0cm程の偏平な石があり、この部分で焼き上げのときに破裂をおこしている。石は凹面にも顔を出している。凸面は3と同様、

## VI 出土瓦

縦方向のヘラ削り面が面をとったように残るが、最終的には横ナデ仕上げされる。なお、1部にベンガラ痕と思われる朱痕が残る。凹面は布筒痕と糸切り痕とが残る。両側面は溝状の浅い窪みのなかで切断されている。分割突帯の痕であろう。側面や広端面は面取りをしない。胎土に大粒の石粒を含む。暗灰色で硬く焼きあがる。27トレンチからの出土。恐らく、3よりも新しく1・2よりも古いものと思う。

5は、塔瓦積基壇に使われていた平瓦片である。非常に硬く重い。今年の調査ではSX2213・2214の瓦敷の瓦片と同質のものである。また、H18年度調査H-12号住居跡出土の瓦の中に同質のものがある。この例を比較すれば1枚の2分の1程のものを用いている。凹面は最終的には横ナデ仕上げされるが叩具の打捺痕が消し残されている部分がある。斜格子紋一種だけの打捺痕である。凹面には、棹板痕、糸切り痕、布筒痕が残る。砂粒を含むが良質の粘土が用いられている。暗灰色で硬い。なお、平成18年度報告Fig.26-3の平瓦は、両端面寄りの左・右側面にやや丸味を持たせているが、この瓦にもそれがある。基壇化粧に用いられた瓦片は、他にもう1片をとりあげていても5と同質のものである。

6(PL.19-4)は、狭端縁の残る破片である。弦幅30.1cm、同深3.2cmほどである。平瓦凸面は横ナデ仕上げされる。焼成される窓内で灰をかぶり、灰釉状となって付着している。凸面の1部に5の打捺痕と違った斜格子目が残る。凹面には、糸切り痕と布筒痕がある。側面は凹面側だけ幅1.0cmほどの面取りをする。かなりの砂粒を含むが硬く焼きあがる。暗灰色。30トレンチ出土。

7は今回の調査出土の平瓦のなかでは最大の破片である。残っている木口を広端と考えて図示したが、狭端としてもおかしくない。現存長38.0cmほどである。平成18年度調査のH-12号出土(Fig.26-3)の例に比較すると4.0cmほど短い。また、6では、左・右側面の上下がやや丸みを持つように削られているが、この整形手法は5にも共通している。平瓦凸面は横ナデ仕上げする。1部に斜格子目紋の打捺痕らしい後もあるが形状まではわからない。平瓦凹面は、糸切り痕と布筒痕が残る。側面は左・右とも上・下両隅近くで丸みがつくように削られて平瓦凹面側だけ幅1.0cmほどの面取りがされている。広端面も削られるが、図の左半には凹面側だけに面取り状の痕がある。暗灰色で砂粒をかなり含むが硬い焼き上がりである。31トレンチ出土。

8は「第6次調査報告書」(1980(昭和55))がIII類に分類した平瓦である。一枚作りされ凸面を繩巻叩具で縦方向に打捺したのち、狭端寄り木口付近を横方向に打捺している。長さ38.5cmあり、平成19年度調査報告のFig.31-1の計測値に等しい。また、同書のFig.31-2では、8と同種の平瓦が2枚割りされた例がある。熨斗瓦として使われていた可能性も若干ながら出てきたのではないだろうか。幅は10.0~13.2cmほどが残っている。平瓦凸面は繩巻叩具で打捺した痕跡が残っている。この状況は他の同じ種類の平瓦にも見られるから、凸型をした一枚作り平瓦製作台を使って出来た瓦を凹型整形台に載せ最終的な仕上げをした痕跡と考えられようか。砂を多く含むが精製された粘土が用いられる。青灰色で焼成温度は高くないものと思う。瓦としては普通のものであったろう。22トレンチからの出土。

9は薩目瓦と呼んできた。瓦の凹面に布目ではなく疊表のような圧痕(横系に太い蘭草状の織維の圧痕がつき、縦系には細い糸状織維の圧痕が見える織物)のある瓦片である。山王庵寺では「第6次発掘調査報告」(1980(昭55))が出土を記録している。以後、平成18年度には20片を超える破片数が見つかり、19年度にも10片ほどが見つかっている。9は、今年度出土例の最大の例である。一枚作りされた瓦と思うが確かな証拠はつかんでいない。厚さは側縁部分で1.8cmを測るのに対し薄い部分では0.8cmほどしかない。橙灰色で細かい砂を多く含み焼成温度も高くなかったためか、もろい。平瓦凸面はナデ仕上げされたものと思われ平滑である。凹面では蘭草状の太い織維が縦系に、細い糸状織維が横系となっている。川原嘉久治氏によれば、高崎市寺尾町の小塙窯が生産窯であるという(注10)。22トレンチ出土。寺域内の一定の場所に限って出土しているような傾向は見られない。

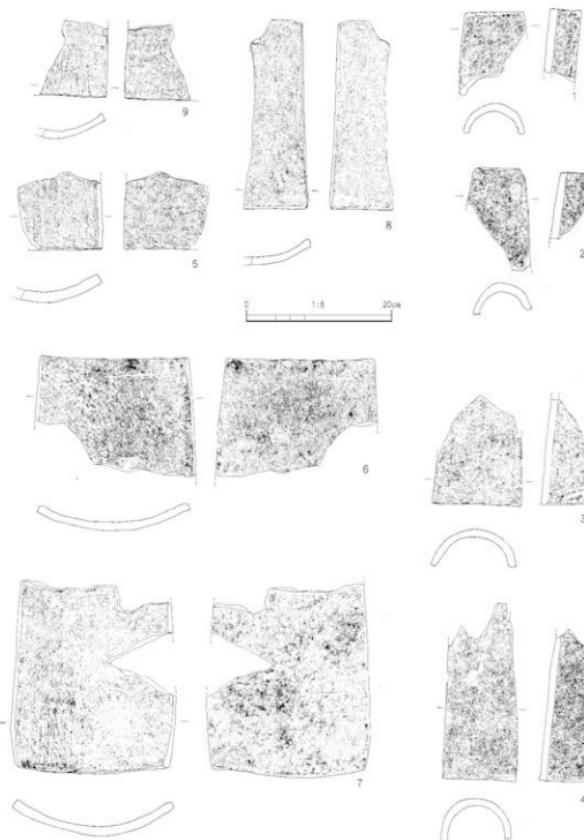


Fig.24 丸・平瓦

## 平瓦凸面の刻線木製叩打について (Fig.25、PL.19の25—1～3)

3片の平瓦を図示した。1は、狭端面と左側面の隅部の破片である。凹面に棹板痕が残るから桶巻き作りされている。凸面には、平行線紋と斜格子紋の二種類の打捺痕がある。平行線紋は、平行線の間隔や太さにいくつか種類があるものと見られ、繩巻叩具と合せて用いている例もある。この平瓦の斜格子紋と平行線紋では、両者を同一の叩具とは認めることは出来ないが、平行線の刻線に他の平行線の刻線を追刻したのではないかと思われる平瓦が他にも2～3例ある。このことは、後日検討するとして2種類の打捺痕が一枚の平瓦に残っている例として記録しておきたい。31トレンチ出土。

## VI 出土瓦



Fig.25 叩板痕跡

良質の粘土が用いられている。凸面はナデ仕上げして平滑な面とした後、叩板で打捺する。凹面は糸切り痕と布目が残る。焼し仕上げされている。23トレンチからの出土。「平成18年度調査報告」のFig.32-8の打捺痕跡が最も近い。

## 4 道具瓦 (Fig.26, PL.19の26-1・2)

古く出土している石製鶴尾2雙は別として、道具瓦類の出土点数もかなりの数になるものと思う。平成18年度調査では、素紋の鬼瓦、瓦製鶴尾の出土を報告し、平成19年度調査では、手づくね鬼瓦片2点、面戸瓦と思われる瓦片、1部に抉りのある平瓦片2点、その他を報告した。

1の手づくねの鬼瓦は、左眉・左眼の半分が残る。およそ3.0cmの厚さに粘土板を鬼の板の形(外形)をつくる。破片では眉・眼の脇廊・外縫線などに、0.8~1.5cmほどの太さの粘土紐が貼りつけられて鬼面の部分を構成している。恐らく、鼻柱その他の部分も粘土紐が貼り加えられていたものだろう。この破片では、左目の裏にあたる部分に鬼瓦を棟に止めるための棟穴<sup>スカムル</sup>が抉られている。型抜鬼瓦の多くが釘止めであったのに対し、手づくね鬼瓦は棟穴に針金を通して止めていたらしい。砂粒の少ない精良な粘土が用いられ灰白色に焼き上がっている。丸・平瓦の田頃に似た胎土や焼きである。23トレンチ（金堂跡北）で出土。

2は、図の下から7.2cmのところで折れ曲がる破片である。外側（左図）は繩目叩き、内側には布目痕と糸切り痕が残る。側面には釘穴が焼成前に穿孔されている。実は、これと同じものと思われる破片が、平成19年度の調査で1点、10年に1点、11年に4点出土している。このうち側面に釘穴の残る破片が2点ある（穴は側面部に限られるよう焼成前の穿孔）。側面の高さは5.0cm前後、長さは17.0cmを測れるものがあった。さらに頂部の幅が13.0cm程の破片が出土している。このことから、頂部が20.0cm程度の幅を持ち左右側面が5.0~7.0cm程の高さで、長さ17.0cm以上で、断面が「コ」の字形をした蓋状の瓦製品であると判断された。実は、これと同じと思われる瓦製品を「上野国分僧寺・尼寺中間地域(6)」の報告書に見い出すことが出来た(Fig.27)。<sup>(註3)</sup> 同報告には2点あって、鬼瓦とされているが恐らく隅棟の下にあって樋受けする隅木の蓋ではないかと想像する。釘穴が側面に穿た

2は図の右側に側面が残る。凹面に枠板痕が残るから桶巻き作りされた平瓦片である。一見して六角形の亀甲紋を想定したが、単なる斜格子紋である可能性が高い。厚さ1.2cmと薄い。30トレンチ出土。

3は、図の右側に側面が残る。この破片には同一の叩板による打捺痕が6ヶ所残る。打捺後にはPL.19で見られるように木目が斜格子紋の各所に浮き出で見える。刻線は、木目に対して45°などの角度を持って刻まれている。叩打板の打面は、長さ9.0cm以上で幅8.5cmが測れる。恐らく木目方向に握りがついていたと思われる。6ヶ所の打捺痕それぞれの木目方向を直線で表したもののが下の縮小図である。平瓦一枚分の粘土板に凸型台上で曲率を与えるとともに叩板で打捺痕をつけている。打捺痕のあり方は、桶巻き作り平瓦に見られる「叩き占めの円弧」は描かず、図で見るかぎり規則性はない。一枚作り平瓦に残る叩板打捺痕の特徴であろう。笠懸窯産の平瓦であろう。細かい砂粒を含むが

4 道具瓦

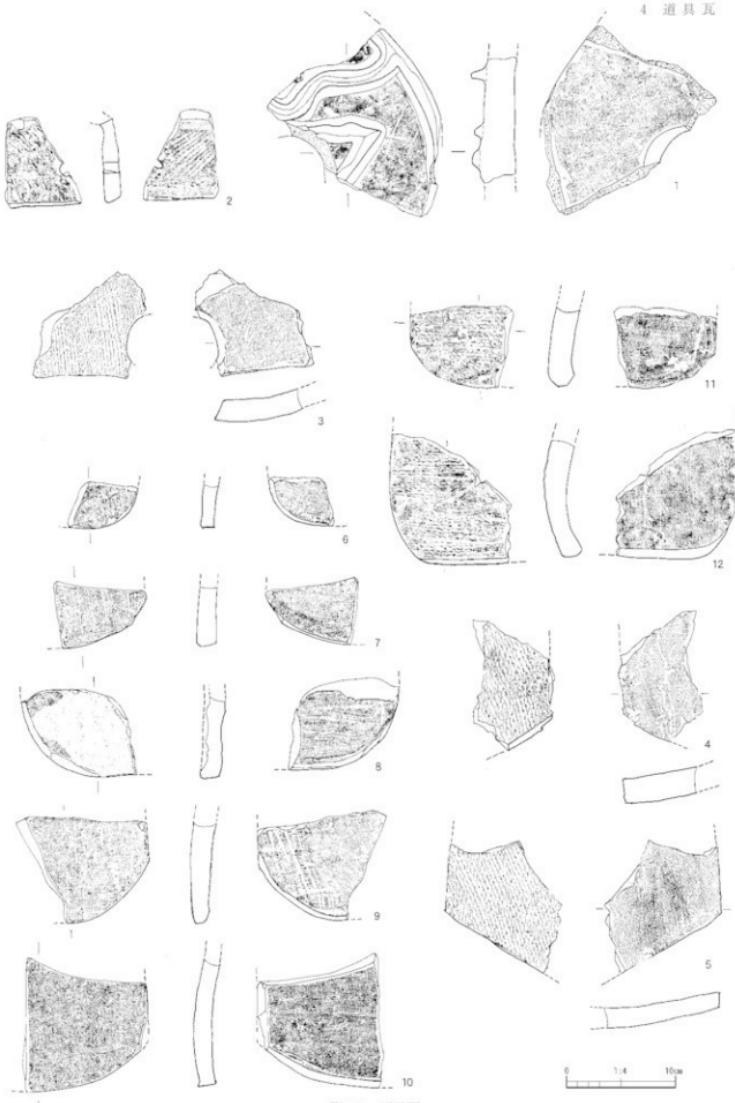


Fig.26 道具瓦



Fig.27 脊木蓋と思われる瓦片  
〔上野国分寺・尼寺中間地域〕より転載)

れているのも雨水への対策と思われる。この破片も縄巻具の打捺痕を残し、精製された良質の粘土が用いられていることから、III類丸・平瓦と同質のものと考えて良い。31トレンチ出土。(なお、「第7次調査報告書」挿図13-1・2がこれにあたるらしい)

3は丸い抉りのある縄目平瓦である。木口・側面ともに残っている面はない。昨年度報告の抉りのある平瓦とは縄巻印具が打捺されている点で異なる。凹面に枠板痕がないことから一枚作りされた平瓦と考えられているが、全体の形状もわからず、まして用途は知るよしもない。細かい砂粒を含むが良質の粘土。暗灰色に硬く焼きあがる。III類の瓦の可能性が高い。23トレンチ出土。

4・5は、隅切りされた縄目平瓦2点である。4は、厚さ2.2cmとやや厚手の桶巻き作り平瓦で凹面には枠板痕とともに粘土板の合せ目痕らしきものも残る。多量の砂粒を含む。暗灰色、焼きは硬い。5は厚さ1.2cmほどである。凹面に枠板痕、布筒痕などを残し4とほぼ同時期の瓦であろう。22トレンチ出土。

山王庵寺出土の隅切り平瓦の報告は今回が初めてのようである。入母屋・寄棟の降り棟にそわせる形で隅切り瓦は用いられるが、割って使われたケースもあったと思う。1例ではあるが、昨年度調査報告では、軒平瓦I式の平瓦部凹面に分割計画線ではないかと思われるものがいた(註16)。隅切り瓦の出土例はそう多くはないが今のところ桶巻き作りされ縄巻具の打捺痕を残す瓦に限られるようだ。

6~12は、平瓦を原体とした面戸瓦の可能性を考え拾い出した瓦片である。昨年度報告で、Fig.31-3を、笠懸窓座系と考え、平瓦原体の丸味のついた破片に蟹面戸の可能性を考えた。これまで、前項で報告したように八重巻窓座の桶巻き作り平瓦のなかには、側面の仕上げを木口部に近い部分では丸味を持たせている例(「平成18年度報告」Fig.26-3)が多くあり、面戸瓦の可能性を否定して来た。挿図した6は小破片であるから、例外としても7~10は、秋間産平瓦と考えられる。いずれも桶巻き作りされ、凸面は横ナデ仕上げ、凹面には布筒痕が残る瓦である。7では通常の平瓦としては、必要以上の丸みを持たせ、凹面側を側面に沿うように削り仕上げしている。これと同じことが他の3点にも見られる。9・10では、平瓦木口面がそのまま残っているから秋間産平瓦の一つの仕上げの形ととれないこともないが、いずれにしても、側面につけられた丸みは秋間産平瓦の側面の丸味よりもつよい。5点とも、灰色から暗灰色で細かい砂粒を含む。焼成温度は高かったものと見え硬く焼き上がる。7が25トレンチ、6と8が31トレンチ、9と10が30トレンチからの出土である。

11・12は、いわゆるIII類の平瓦である。ともに図の左側は広端面である。通常III類の平瓦は、側面と木口との頭部に丸味をつけない。11では大きく丸味をつけた側面に沿って凹凸両面に削り仕上げをする。12では凹面の木口へ側面にかけてナデが見られる。12では凹面の布目が側面中央まで回って残っている。ともに24トレンチからの出土である。

6~12の瓦片を面戸瓦とすれば、いわゆる蟹面戸とか蟹面戸とかいう形状とは異なったものになる。しかし、意図的に側面に丸味を付け、凹面側を、それにそって削り整えている事実からは、これらが、面戸瓦として生産されたものと考えたい。さらには11・12のIII類平瓦にこの形があることは6~10までの先行する瓦に面戸瓦があり11・12は、これにならって生産されたと考える。平瓦を原体とする面戸瓦の存在を推定したが、このような例が他の遺跡ではないものだろうか。今後の課題と考える。

## 5 文字瓦 (Fig.28・29・30, PL.20・21, Tab. 6)

文字瓦として点数にあげているのは、2画以上が残る資料である。今年度は、総点数45点、うち2画あって文字瓦として数えながらも判別できないものの12点を含んでいる。12点を除く33点をTab. 6とした。このうち刻印では「山田」(左字)が3点、梵書では「七」が10点出土したのが目立った。さらに刻印の押捺された瓦では、1、「蘭田」、6、「直万?」、7、「謐」などは、山王庵寺では初めての出土と思われる。なお、昨年度調査報告書Fig. 4-32で紹介した指腹で大きく書かれた文字瓦では報告書終了後の整理作業で、さらに破片1枚が接合された。さらに欠損部に文字が存在することは確かである。Fig.30およびPL.21として掲載した。

1は、「蘭田」である。山田郡蘭田郷を意味すると解されている。上野国分寺の発掘報告では、金堂基壇の築土中から軒丸瓦B201a (山王庵寺軒丸瓦XV式) やこれとセット関係にある軒平瓦P001などと、ともに出土しているという<sup>(註10)</sup>。『史跡上野国分寺発掘調査報告書』(以下、「僧寺」と略す)は、金堂基壇築造以前の瓦を必要とする造寺活動に用いられたと判断され、国分寺創建時の瓦と考えられている。「蘭田」の文字は幅6.7cmで長さ8.0cm以上の叩打面をもつ叩板に陽刻(瓦の表面で陽刻となるため、叩板では陰刻〔線刻〕である)されている。第1字と第2字をつなぐかたちで傷が生じている。叩板が木製であったため、この様な傷となった(この傷は、国分寺出土瓦にもあり、傷のない例を見ないので、かなり早い時期についたものだろう)。木目は傷の方向、この場合叩板の縦方向に走っていたと見てよい。刻線格子目は、木目に対してほぼ45°で1.5~1.8cm間隔で平行線が刻まれる。さらに、1.5~2.5cmの間隔で平行線を直角につなぎ格子目紋をつくる。隣り合う格子目は互目に刻まれている。図では表現できていないが叩打痕の上部が平瓦の側面となっている。羽子板のように打面の下に柄が付くと考えれば、この叩打痕は、瓦に対して横方向からのものであり、平瓦は一枚造り用の凸型製作台が想定される。なお叩打面に格子目や文字鉢を刻む例は、藤島次郎氏が戦前、朝鮮半島例<sup>(註11)</sup>を紹介している。

わが国では大宰府の9・10世紀の丸・平瓦の打捺痕がこれにあたる<sup>(註12)</sup>。大宰府瓦の場合、幅7.0cm前後で、長さ25cmを越える長いもので横に柄が付いている。この瓦の胎土は砂粒を少量含むが良質の粘土が用いられ、焼成温度は高くないものと思う。茶褐色でよく焼き上げている。21トレンチ出土。笠懸窓座。

2は「山田」(左字)である。山田郡には山田郷もあり、郡名とどるか郷名を表すものとどるかの問題があるという<sup>(註13)</sup>。「山田」は山王庵寺では、第4次調査(77(昭52)北方建物付近)で1点出土している。今回は同一のトレンチの中での出土があった。笠懸窓座「蘭田」銘文字瓦とは異なった感じがある。文字鉢は「山」の第1画と「田」の字の第4画、どちらも縦方向の中心となる部分が最も深く刻まれ鮮明に出ていて、その左右では文字の彫込が浅くなっている感じがある。3点のいずれにも刻印の端がわかるような部分はないが、縦5.0cm、横3.5cmほどの範囲が浅い彫みになっている。印面をローリングするように押し付けたものか、3点のいずれも2.8cm前後と厚い平瓦である。さらに灰橙色で酸化炎焼成されている。砂粒を多く含み重たい感じである。焼成は良い。23トレンチで3点とともに出土。

5は「方光」の文字鉢が陰刻となっている(印面そのものは陽刻である)。第6次調査(79(昭54))で5点が出土し、昨年丸瓦に1点、今年の例は7点目である<sup>(註14)</sup>。山王庵寺以外では明神遺跡で1点が出土しているが、山王庵寺独自の文字瓦と考えて良い。『第6次調査報告書』(80(昭55))では、文字について「線の太さ、長さ、形から2種類に分けられる(報告書のNo 2・5とNo 3・4)』とした<sup>(註15)</sup>。このことは事実であるが、木印が2種類あるかのようにもとれる。このため、若干の検討を行って見る。Fig.28-1は、今年度出土の丸瓦の凹面に押されたもので、2は昨年度出土の丸瓦凸面に押捺されていたものである。第6次調査の出土文字例の2・5に当たるのがFig.28-2であり、3・4が1である。両者の印影をトレースして重ね合わせたものが3である。この結果は両者は1つの木印であって、1が最初に用いられ、これが傷ついたために傷の部分を削りとつて、やや小さめの木印としたのが2の木印と考えて良いだろう。文字の主要部分は、そのまま生かされている。いわゆるIII類の

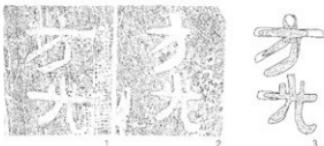


Fig.28 「放光」銘刻印文字  
1. 平成20年出土平瓦 2. 平成19年出土丸瓦  
3. 1と2の重ね合せ

は「判別不能の文字（直万？）」<sup>11</sup>とし、「僧寺」では確認出来ていないという。「中間地点（2）」では、この印の押捺と同時に別種の印板痕（勢多郡系か）も打捺されている。

6にかえって見ると小破片である上に文字面は剥離した部分があり上記資料以上に判別は困難である。ただ、表面が剥離せず残っている図の右下の部分に刻印の端を写しとったと考えられるアタリがあり、文字の中央からアタリまで1.5cmほどが計測される。印の幅は3.0cmほどであったろう。凹凸両面ともに表面が剥離した部分が多く、橙茶褐色をしている。二次的な火をうけているか。21トレンチ。良好な資料の出土を待ちたい。

7は1.7cmの方形の枠内に「里」の字がある。山王庵寺では初出資料と思われる。恐らく木印と思われるが確定は出来ない。砂粒を多量に含む粗い粘土が用いられている。21トレンチ出土。

8は、簡書である。2字ととれば「田一」である。1字と見れば「里」か。丸瓦凸面の左側面に近い位置に狭面を上にして記録している。砂粒を多量に含む粘土が用いられて、暗灰色で硬く焼ける。21トレンチから出土。

9は、第2画面の上辺が欠損する。「里」と読んだ場合、第6画面の横棒がない。両側面、木口面とともにない小破片である。文字は丸瓦凸面で、長軸方向に簡書されている。暗灰色で硬く焼きあがる。砂粒を多量に含む吉井・藤岡方向で生産されたものだろう。21トレンチ出土。

10は、図の上辺が木口面である。文字は平瓦凸面に刻まれている。少なくとも破片からは、2文字あったことがわかる。また、文字は上端が木口面ぎりぎりに始まっていることから、木口面の整形は文字記録の後であったろう。1文字目は「宮」と読みたい。2文字目は読めないが文字の位置から考えて「偏」はない文字と思われる。「僧寺」では「宮麻呂」<sup>12</sup>の文字銘がある。橙灰色、砂粒を含まない良質の粘土が用いられる。笠懸窯産か。21トレンチからの出土。

11は、平瓦凸面、側面（図の右方向）に沿って簡書されている。破片からは、2文字が認められる。上の字は読めない。下の字は「成」であろう。「僧寺」では、「成」の用字例は3文字以上で「少□成□」、2文字以上で「三成」、「□成」があり、1文字の例にもある。このうち、「三成」・「□成」は人名と考えられている。11の場合も、人名と考えるのが最も受け入れやすい。砂粒を含むが良質の粘土が用いられ、高温で焼かれ黒灰色にあがる。21トレンチからの出土。

12は、「光」と読まれている。III類の縄目平瓦の凹面に簡書されている。この破片は、側面・木口面が残っていない。『第6次発掘調査報告書』では、5点（丸瓦4点、平瓦1点）が出土し、平成19年度調査でも5点（丸瓦2点、平瓦3点）出土している。記録部位については、丸瓦は凸面中央部、平瓦凹面中央に記録することを原則としているらしい。本例も、この例と同様に記録されたものであろう。凸面の縄目には二次的な潰れが見られる。22トレンチ出土。

「光」銘文字瓦は13が平瓦凹面に、14が丸瓦凹面に記載されている。14のように丸瓦の凹面に記される例は初めてのようである。3点とも良質の粘土が選ばれ12・13は暗灰色に硬く焼き上げられ、14は橙灰色で、やや軟らかい。12・13が22トレンチ。14が31トレンチからの出土。

丸瓦である。左側面と広端面との隅角に押捺されていて、これまでの「方光」銘の印の押捺は丸瓦の場合、凸面に限ると考えていたのに例外ができた。塔西24トレンチ出土で第6次調査で出土したものと一連のものと考えられる。

6は、山王庵寺では初出の刻印文字である「上野国分僧寺・尼寺中間地域（2）」<sup>13</sup>では、「直万カ」とされている。同書によれば、G区の井戸からの出土で桶巻き作

「七」銘文字瓦は、今年度調査では10点と最も出土点数が多い。このうち5点が24トレンチからの出土である。第6次調査でも、昨年度の調査でも、金堂と塔との周辺から多く出土する傾向が見られ、文字銘の意味は不明ながらIII類の丸・平瓦が塔や金堂の修復用の主要な瓦の1つであったことを思わせる。「光」銘文字瓦と同様に記銘部位が平瓦凹面、丸瓦凸面というのも、III類の丸・平瓦の記銘部位の特徴かも知れない。指の腹で描いたもの、範によるものがあるが、前者は平瓦が多く、後者は丸瓦が多いようだ。図には、24トレンチから出土した19を示した。狭端面の残る例では平瓦凹面の文字は広端面上にして中央部に記銘されている。平瓦凸面には、III類平瓦に独特の縦方向の縦目を全面に打捺したち狭端側だけ横方向に重ねて打捺している。

25-26は「大」銘の文字瓦である。『第6次発掘調査報告書』がII類とした平瓦が26であり、III類とした平瓦が25である。25では「大」の字が凹面中央に狭端木口を上にして蓖書きされる。26では凸面の木口より側面に寄った部分に蓖書きされている。両者は字の書き癖や大きさにも相違点があり、文字瓦の出土点数が多いだけに今後の分類を行ったうえで『僧寺』出土の「大」文字銘瓦との比較を行ってみたい。

27は、平瓦凸面に「羊」ではないかと思われる文字がある。平瓦は桶巻き作りされ凹面には布筒痕や棒板痕が粘土円筒分割後の整形痕で消しされている。凸面は平行線紋の打捺痕が残っている。木口面・側面が残っていない破片である。文字銘は平行線紋が打捺された後に記されている。第3・4画、第6画の中央部分の筆跡がとぎれているのが気になるが、左右、縦方向一連の動きによって書かれた文字と見たい。「羊」とすれば『僧寺』瓦にも見られる文字銘であるが、本例の方をそれより古く考えねばならない。粒の大きい砂粒を含むものの良質の粘土が用いられている。表面は灰色、破面は橙灰色、秋間窓跡群で生産された瓦と見る。23トレンチ出土。

28は、丸瓦の小片である。木口面・側面を残していない。文字銘は「旁」の部分だけの可能性が強い。図中央頂部から左下へのびる割れ目には、頂部から「口」の中程の部分まで範の痕（文字の1部）が残る。「旁」だけ一字と見れば「右」ととれないこともない。達筆である。小破片で破片自体分類し難い。灰褐色で良質に整えた粘土が用いられている。24トレンチ出土。

29は「瓦」と読みたい。文字銘は平瓦凸面に記される。木口面・側面とも残らない破片であるが、平瓦の横方向を意識して記された文字である。砂を多量に含む粘土で粗い感じが強い。黒褐色、高温で焼かれている。25トレンチ出土。

30は左字「井」である。丸瓦凹面側面寄りに記銘されている。「井」は平成18・19年度に各1点ずつ報告例がある。18年度のものは丸瓦凹面に刀物で記銘していることや、左字であり胎土が似る（多量に砂粒を含んでいる）ことから、同じ工房で作られた瓦と見る。25トレンチ、塔跡からの出土。

31は「刃」か。丸瓦凹面中央でやや右側面に寄った位置に広端を上にして記されている。山王庵寺の調査では初出である。また、『僧寺』でもそれらしい出土文字銘は見あたらない。丸瓦はいわゆるII類のそれで多量に砂粒を含む粘土が用いられる。高温で焼き上げられて黒色で硬く重い。31トレンチ出土。

32は、文字としての可能性が強いが記号であるかもしれない。丸瓦凸面で狭端を上に記銘したと仮定すれば中央より、やや右側に寄った位置に着されている。砂粒を多量に含む粘土で、焼き上がりもやや歓らかい。23トレンチ。吉井・藤岡方面産の瓦と見る。23トレンチからの出土。

33は、平瓦の狭端側木口面に竹管紋が刺突される。僧寺の竹管刺突紋の例は丸・平瓦の凹凸両面に見られる。山王庵寺の19年度調査出土例も平瓦の凹面である。木口部に刺突した例も、そう珍しいことは思えないが、この瓦の胎土が粗く黒灰色に高温で焼かれるなど吉井・藤岡方面で生産されたのではないかと考えたとき、笠懸窯産の瓦とは、時期や意味の相違がある記号のように思われる。24トレンチ出土。

34は平成19年度調査報告書に14トレンチ（金堂跡西北部に設定された調査区）で出土したIII類平瓦である。平成19年度調査報告書の印刷されている時点で、平瓦中央部の破片1片が接合された。破片が接合できたことで読み解が出来たわけではないが、現状では山王庵寺出土文字瓦では、最大のものであること、昨年度報告では文字数

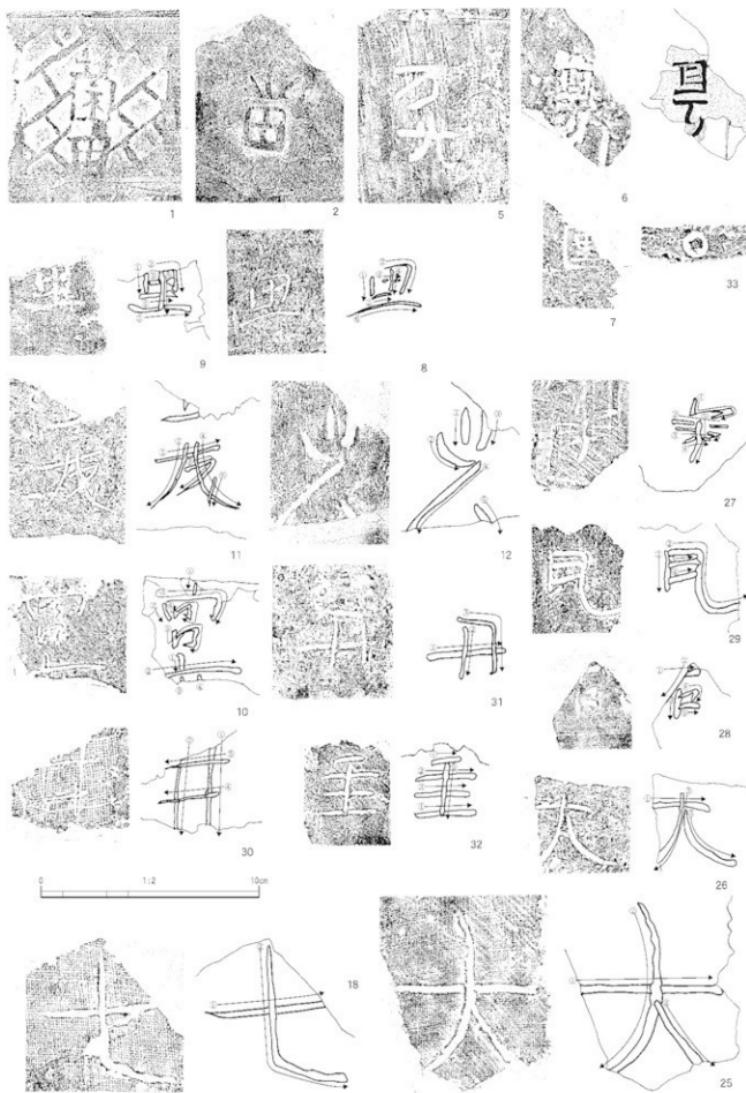


Fig.29 文字瓦 1

Tab. 6 出土文字瓦一覧

	説	出土場所	記述	PLx	Figs.	山王院寺 飾出土例 (A)	開通道路 出土例 (B)	特記事項	3分類 (C)	整理 番号
1	蘭田	20A135-21T	木製縫合板 寺城北	平瓦・凸面	Fig.29-1 PL.20/029-1	相出	櫛々・尼寺	櫛々は金堂基壇積土 半より出土 (註17)	笠無	21-9
2	山田 (左字)	20A135-23T	和瓦 (左字) 金堂北	平瓦・凸面	Fig.29-2 PL.20/031-1	4次1点	櫛々・尼寺	(註20)	笠無	23-15
3	山田 (左字)	20A135-23T	和瓦 (左字) 金堂北	平瓦・凸面		4次1点	櫛々・尼寺		笠無	23-14
4	山田 (左字)	20A135-23T	和瓦 (左字) 金堂北	平瓦・凸面		4次1点	櫛々・尼寺		笠無	23-16
5	方光	20A135-24T	和瓦・平瓦・笠無 寺城西	平瓦・凹面	Fig.29-5 PL.21/028-1	6次5点、H19.1点	明障壁	(方)の第1画が第2画 に接続 (註21)	III	24-17
6	直方? (未認)	20A135-21T	印 寺城北	平瓦・凸面	Fig.29-6 PL.20/029-6	相出	中間地城 (2)	(註23・24)	笠無?	23-10
7	圓	20A135-21T	印 寺城北	平瓦・凸面	Fig.29-7 PL.20/029-7	相出			II	21-11
8	星か	20A135-21T	印・丸瓦・凸面 寺城北	平瓦・凸面	Fig.29-8 PL.20/029-8	相出		広場を上にして記録	II	21-12
9	星か	20A135-21T	印・丸瓦・凸面 寺城北	平瓦・凸面	Fig.29-9 PL.20/029-9	相出			II	21-13
10	宮□ (未認)	20A135-21T	印 寺城北	平瓦・凸面 笠無?	Fig.29-10 PL.20/029-10	相出	櫛々に「宮麻姑」	2字目の上部はナベバ タである (註25)	笠無	23-13
11	□成 (未認)	20A135-21T	印・平瓦・凸面 寺城北	左側面寄	Fig.29-11 PL.20/029-11			人名か	II	21-14
12	光	20A135-22T	印・平瓦・凹面	平瓦	Fig.29-12 PL.21/029-12	6次5点、H19.5点			III	22-20
13	光	20A135-22T	印・平瓦・凹面	金堂北		6次3点、H19.1点			III	22-19
14	光	20A135-31T	印・丸瓦・凹面 南回廊想定地	中央		6次3点、H19.5点	丸瓦凹面は初めて		III	31-71
15	七?	20A135-22T	指腹・平瓦・凹面	金堂北		3次×4次 各1点、6次22点 9H3点、11H7点、19H11点			III	22-22
16	七?	20A135-23T	指腹・平瓦・凹面	金堂北		3次×4次 各1点、6次22点 9H3点、11H7点、19H11点			III	23-13
17	七?	20A135-24T	指腹・平瓦・凹面 寺城西	寺城西		3次×4次 各1点、6次22点 9H3点、11H7点、19H11点	広場を上にして記録		III	24-13
18	七?	20A135-24T	指腹・平瓦・凹面 寺城西	中央	Fig.29-18 PL.21/029-18	3次×4次 各1点、6次22点 9H3点、11H7点、19H11点	広場を上にして記録		III	24-14
19	七?	20A135-24T	指腹・平瓦・凹面 寺城西			3次×4次 各1点、6次22点 9H3点、11H7点、19H11点			III	24-15
20	七?	20A135-24T	指腹・平瓦・凹面 寺城西	小頸片		3次×4次 各1点、6次22点 9H3点、11H7点、19H11点			III	24-16
21	七?	20A135-24T	指腹・丸瓦・凹面 寺城西			3次×4次 各1点、6次22点 9H3点、11H7点、19H11点			III	24-20
22	七?	20A135-30T	指腹・平瓦・凹面 南回廊想定地			3次×4次 各1点、6次22点 9H3点、11H7点、19H11点			III	30-86
23	七?	20A135-31T	指腹・平瓦・凹面 南回廊想定地			3次×4次 各1点、6次22点 9H3点、11H7点、19H11点			III	31-41
24	七?	20A135-31T	指腹・平瓦・凹面 南回廊想定地			3次×4次 各1点、6次22点 9H3点、11H7点、19H11点			III	31-42
25	丸?	20A135-24T	指腹・平瓦・凹面	金堂北	Fig.29-25 PL.21/029-25	脇々・3次各1点、4次1点6次18点 7次6点、9H1点、11H3点、19H2点	櫛々・尼寺 櫛無別が必要		III	22-21
26	丸?	20A135-31T	指腹・平瓦・凹面 南回廊想定地		Fig.29-26 PL.20/029-26	脇々・3次各1点、4次1点6次18点 7次6点、9H1点、11H3点、19H2点	櫛々・尼寺 櫛無別が必要	II	31-39	
27	半?	20A135-24T	指腹・平瓦・凹面	金堂北	Fig.29-27 PL.20/029-27		凹面平行線印	I	23-12	
28	右?	20A135-24T	指腹・丸瓦・凹面	寺城西	Fig.29-28		小頸片 文字は「右」部分か			24-19
29	瓦?	20A135-25T	指腹・平瓦・凹面	寺城西	Fig.29-29 PL.20/029-29				II	25-20
30	井 (左字)?	20A135-25T	刀物・丸瓦・凹面 寺城西		Fig.29-30 PL.20/029-30	6次5点、9H9点、11H5点	櫛々・尼寺		II	25-21
31	瓦?	20A135-31T	指腹・丸瓦・凹面 南回廊想定地		Fig.29-31 PL.20/029-31				II	31-35
32	(記号)?	20A135-23T	指腹・平瓦・凹面	金堂北	Fig.29-32 PL.20/029-32				II	23-9
33	○ (記号)?	20A135-24T	指腹 寺城西	木口部に刻美	Fig.29-33 PL.20/029-33	IIIH・19H 各1点			II	24-24
34	3文字以上 (未認)	19A135-14T	指腹・平瓦・凹面	金堂跡	Fig.30-34 PL.21/030-34		報告書萬葉後碑片が闇 合されたため西向した		III	19-213

※特記事項の欄は註(A)出土瓦の箇所と同一である。



Fig.30 文字瓦2

部幅1.0cmほどをヘラ削り整形する。凹面では糸切り痕・布筒痕・枠板痕が残る。1部側面寄りに分割突帯痕と思われるものもある。平行線は一番最後につけられている。引かれた平行線に乱れがないから、すべての線が同時

が3文字としたが4文字分（接合された破片の上部に横方向の指痕が見られる）の可能性が生じている。

## 6 波状紋・戯画など (Fig.31, PL.20, Tab. 7)

1は、波状紋である。右側と左側では、波状紋は切れているが一連の動作のなかで施紋されたと思われる。波の谷にあたる部分では工具痕が深く残り、山の部分では浅い。このことから、回転台上に設置された状態の粘土円筒であったとすれば、図の上辺が狭端縁となるだろう。凹面の布筒痕・枠板痕は指で縦方向にナデられて潰されている。茶黒色、白色の粘土粒子が見られ砂粒も混じる。灰褐色で重く硬い感じがする。秋間窯跡群産であろう。24トレンチ出土。

2は、針書風の細い線で小さく動物が描かれている。動物は平瓦凸面を横ナデ整形した後に描かれている。破片は小さく、描画全体を知ることが出来るのは残念である。瓦の木口面・側面とともに残っていないが動物の絵は側面を上下にして描かれている（図では平瓦を横方向に置いたことになる）凹面には糸切り痕跡・布筒痕・枠板痕が残る。色調・胎土・焼成とともに1に近い。31トレンチ出土。

3は、側面の1部が残る平瓦小破片である。描線は凹面にある。凹面は粘土円筒の分割面がそのまま側面となつたと思われるが側縁

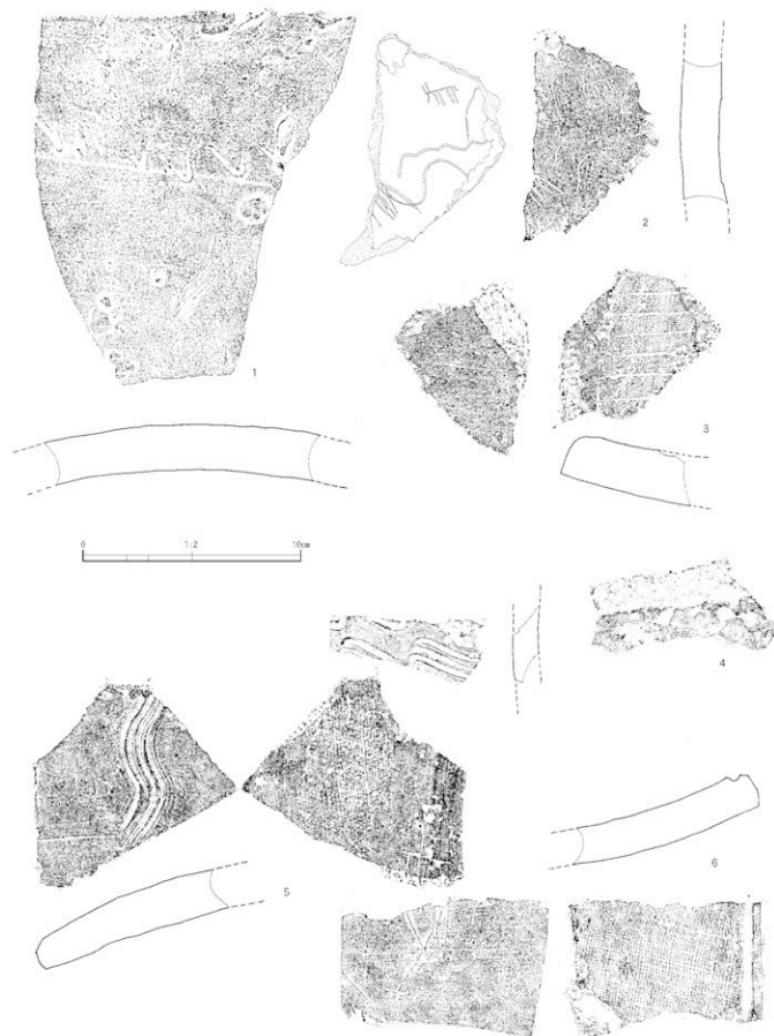


Fig.31 波状紋・戯画など

## VI 出土瓦

に引かれた可能性が高い。その施紋具や方法はわからない。凸面は回転台の回転を利用して横ナデ仕上げである。胎土には茶黒色の粘土粒子が見えるので秋間窯跡瓦と考える。灰白色で硬く焼きあがる。25トレンチ出土。

4は、小破片である。凸面の波状紋は右手に持つ櫛状の施紋具が右回転（時計回り）する回転台にあてられて出来たものだろう。この平瓦は粘土紐を巻上げて粘土円筒が作られたものと考える。山崎信二氏によれば、瓦の粘土紐作りであれば土器の粘土紐作りの場合と逆に外側から粘土紐が輪積される結果<sup>[22]</sup>となるという。この破片がそれにあたるものと考える。凸面側は外側が、凹面側では内側が剥離した結果で粘土紐の一単位が残ったものと考えた。細かい茶褐色の粘土粒子が混じる。表面は灰色、破面は橙色である。焼き上がりは硬い。21トレンチ出土。

5の波状紋は、平瓦凸面に施紋される。図では上辺に木口部が残り、左側に側面が残っている。波状紋は木口寄り（図の上方）から図の下方にかけて施紋されている。須恵器に見られる波状紋が回転台の回転によって横向きに施されるのは大きく異なる。粘土円筒分割後の施紋であろう。平瓦の凸面は横ナデ仕上げ、凹面には布筒痕が残る。側面は幅の狭い面取りを行った後、凸面側を削り整形する。この瓦でも茶黒色の粘土粒子が胎土中に見られるが良質の粘土が用いられる。灰白色、秋間窯跡群で生産されたものであろう。30トレンチ出土。

6は、側面がわずかに残る破片である。回転台で出来あがった粘土円筒の外側を横ナデ仕上げした状況で刃物によって直線が引かれている。左側の刃物痕がさらに左側まで続いている。刃物は右上から左下への直線がまず引かれ他の3本の交差する直線は先の線を切っている。破片に見るかぎり、なにか意味のあるものが描かれていたとは思えないが平成18年・19年にも戯画風のものが見られるので、可能性がまったくないわけではない。凹面では側縁に沿って分割突堤の痕が残り、布筒痕が見られる。灰白色でしっかりと焼き上がっている。秋間窯跡群と考える。25トレンチ出土。

この項に報告した瓦片の總てが安中市秋間窯跡群で生産されたものと考えた。山王庵寺出土瓦の中では、創建の時期から8世紀前半までの間のものと考えられる。波状紋の多くは須恵器の器面に見られる波状紋と共通する部分が多いことや、今回見られたFig.31-4のように粘土紐作りされている瓦から、この時期、須恵器の工人が瓦作りに動員された状況が想像される。描かれたものがなんであつたか、小さな破片からは知ることは出来ない部分が多いが、8世紀中端以後の瓦とは違った造瓦体制や工人の精神生活の一端が見られるような気がする。

Tab.7 波状紋・戯画など

	内容	Fig.№	出土場所	用具及び描かれた場所	備考	3分類	整理番号
1	波状紋	Fig.31-1 FL.26031-1	20A135-24 南東北窓	鋸、平瓦凸面 粘土円筒分割（図の上辺）を残す	波状紋は回転台が静止の状態で施されたらしい	1	24-26
2	動物その他	Fig.31-2	20A135-31 南西窓定位地	細い棒、平瓦凸面 動物は、平瓦側面を上下にして描く	耳または角を2本の線で、脚は1本、胴から尾まで1本線。足24本。動物の下にも波のような描痕がある	1	31-70
3	平行線	Fig.31-3	20A135-25 筋溝	細い棒、平瓦凸面 側面の凹面側を施取りするが、描痕は施取りの後に残す	平行線に見えるが間隔10.8~1.6cmで均等でない 筋溝は右から左に描かれる	1	25-25
4	波状紋	Fig.31-4 FL.26031-4	20A135-21 今城北窓	粘土紐器具、平瓦凸面	粘土の網膜の状況から粘土紐書き上げによる平瓦で須恵器工人が作った瓦と思われる	1	21-18
5	波状紋	Fig.31-5	20A135-30 南西窓定位地	筆状で粗粒がある器具、平瓦凸面 破片は木口（図の上辺）と側面が残る	波状紋は木口から窓方向に波線を描く	1	30-72
6	平滑	Fig.31-6 FL.26031-6	20A135-25 筋溝	刃物、平瓦凸面	凸面では墨線が網膜にかかっているので、粘土円筒の状態で墨線が描かれている 凹面の側面に沿って分割突堤の痕が残る	1	25-24

## 7 重弧紋軒平瓦について

軒平瓦の分類は瓦当紋様の分類を柱とし他の諸条件を考慮して平成18年度の調査報告書で示した。この段階で記述の誤りや考え方の変更などもあり平成19年度調査報告書に一部改めた。

この分類のうち、重弧紋軒平瓦は、三重弧紋（II式）と四重弧紋（III式）である。二重弧紋軒平瓦の存在については、「山王庵寺第7次発掘調査報告書」（82〔昭57〕）の中でその存在を指摘されているが、その後の発掘調査で出土例を見ないので山王庵寺本来の軒平瓦とは考えられず検討の対象とはしない。

分類基準は平成19年度の発掘調査報告にした通りである。

### 分類基準

#### ① 平瓦部凸面の状況

N 繩目打捺痕のもの

K 木製叩打具による打捺痕（格子目など）のもの

K・Nともに平瓦部凸面の打捺痕を消したものを含む

#### ② 瓦当紋の施紋方法等について

A 平瓦部の一端に直接施紋をおしあてて重弧紋を作ったもの

B 平瓦部の一端に瓦当紋施紋のための粘土を付加した後、重弧紋を施紋したもの

C Bの一部と考えられる。瓦当部に付加される粘土の接着を良くするために平瓦に刻み目をつけ、瓦当紋施紋のための粘土を付加した後、重弧紋を施紋したもの

D 頸の位置に隆起線紋がつくもの

E カキベラ等（押し引き具以外の工具）による重弧紋と考えられるもの

F 一枚作り軒平瓦

#### ③ 重弧紋軒平瓦のなかで無額および曲線額のものにアルファベット小文字（i）を段額のものには、gを付す

なお、このうち②-E項は、古代東北地方の重弧紋軒平瓦の施紋方法のなかに見られるため山王庵寺軒平瓦にも、存在した可能性から設定したがその後、明らかに、この方法によって作られたと判断される軒平瓦はなく分類条件から除くこととする。

重弧紋軒平瓦の製作工程について 山崎信二「桶巻き作り軒平瓦の製作工程」『考古学論集』1993〔平5〕、岡本東三「4造瓦技法の諸問題（2）軒瓦の作り方」『東国の中世寺院と瓦』1996〔平8〕、花谷浩「軒平瓦」「山田寺発掘調査報告書」2002などを参考にして、一般論としての重弧紋軒平瓦の製作方法を推測して見るとおよそ以下のようになる。（参考例、Fig.32）

① 桶巻き作り平瓦の製作方法と同様に桶（造瓦具）を回転台上に設置し、タタラ（捏ねあげて瓦製作用に整えた粘土塊）から板状に粘土を切り取り造瓦具（桶）に巻き先端を貼り合せる。出来上がった粘土の筒を粘土円筒と呼ぶ。粘土円筒から空気を抜くために刻線叩板や繩巻叩板で表面を叩く。

② 回転台上的粘土円筒の最下部に重弧紋を押し引きするための粘土帶を貼りつける（通常はこれが段額を形成する）。

③ 粘土円筒から造瓦具や布筒を外し、回転台上に粘土円筒の直径の大きい方を上にして設置する。

④ 回転台の回転を利用して柳歯状施紋具を用いて重弧紋を施紋する。

山王庵寺重弧紋軒平瓦の場合についてはどうか。

## VI 出土瓦

Fig.32-③のように貼り付け段階をとめるため粘土のクサビを打ち込んでいるような例はない。山王庵寺でも同様の製作工程によって製作された重弧紋軒平瓦はあるが、最も出土量の多い三重弧紋(II KB-1)軒平瓦の場合を考えるとおよそ以下の様になるだろう。

Fig.32-①で出来上がった粘土円筒から造瓦具(桶)や布筒をはずし、粘土円筒を上下反転し、回転台上に設置する(この場合、粘土円筒はある程度乾燥しているとも考えられる)。②直径の大きい方の木口面(回転台上では上になっている)に瓦当用の粘土を木口面を包み込むように貼り付ける。

④瓦当部が出来上がった段階で⑥の工程に入り施紋具を用い瓦当面を押し引く。なお、山王庵寺重弧紋軒平瓦の製作工程の事例では、他に

① 粘土円筒の直径の大きい方に多くの重弧紋は押し引きされているが、直径の小さいほうに押し引きされているものもある。

② 重弧紋には  
A. 直接木口面に櫛歯状器具を用いて押し引きされたものもある  
B. 姫寺例重弧紋軒平瓦のように平瓦部凸面木口部(粘土円筒の直径の大きい方)のみに粘土帶を加えた例もある。

③一イ 櫛歯状の施紋具を用いて回転台の回転を利用して重弧紋を押し引く。

③二ロ 粘土円筒を軒平瓦一枚づつに切り離した後に重弧紋を施紋する。

などの、事例がある。

以下、山王庵寺出土重弧紋軒平瓦の種類と特徴について概略を記す。なお、重弧紋軒平瓦の部分名称について、Fig.33によって記す。

II式 三重弧紋軒平瓦平瓦部凸面に網目痕のあるもの(II N類)と、木製刻線叩打具による斜格子目痕のあるもの(II K類)がある。それぞれの平瓦部凸面の打捺痕は、II N類の1部およびII K類の多くでスリ消されている。

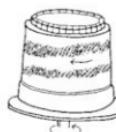
II N類 桶巻作り平瓦(II NA・II NB)と、一枚作り軒平瓦(II NF)がある。

- ① 桶に粘土板をまきつけ、菱形の格子引きをおこなう。  
叩きしめの円弧を描く。

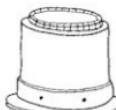


- ② 頸部に、細長く切った粘土板を巻きつける。

- ③ 頸部を、菱形の格子叩きでたたきしめ、頸部凸面の方から頸部と平瓦部に粘土円錐体を差し込む(クサビ)  
粘土円錐全体に、ケズり及びナデ調整を、回転台を利用して行う。



- ④ 粘土円錐を逆円錐(逆台形)位置に上下反転する。



- ⑤ 桶をはずす。  
布袋をはずす。



- ⑥ 瓦当部予定位置に、凹凸のある型を垂直にあて、回転台による比較的安定した回転を与えて引き出す。  
(4重弧文の押し引き)



- ⑦ 頸部のついた粘土円錐を4分割する。側面調整をおこなう。

Fig.32 大和姫寺跡重弧紋軒平瓦の復元工程模式図  
(山崎信二「桶巻作り軒平瓦の製作工程」1993年より転載)

II NA 粘土円筒の一端を厚く作る。粘土円筒を分割したのち、一枚ごとに施紋具で三重弧紋を押し引きする。これによって作られた三重弧紋軒平瓦では、

- (1) 弧線の頂部（以後、山と記す）が尖り気味のものが見られ、山と山との間（以後、谷と記す）がV字形となる例が多い。
- (2) 三本の隆起線は瓦当中央では太さが違うが、端では上・下の弧線が細くなる例がある。
- (3) 弧線に歪みが見られ、瓦当面全体として見た場合に水平となっていないものがある。
- (4) 瓦当面の側面に粘土が押し引きされたことで喰み出しが生じているものがある。

なお、1部ではあるが、繩巻き具で平瓦凸面を打捺したのち、平行線紋の木製叩具で打捺しているものもある。軒瓦の破片からは重弧紋の施紋を平瓦の広面に施したもの、狭端に施したものではないかと思われるものとがある。砂粒が多く含まれる胎土で淡橙灰色に焼きあがっているものが多い。瓦当厚は、3.35～3.75cmほど。

II NB 三重弧紋を施紋するために粘土円筒木口に粘土をつけたす。瓦当面につけたされる粘土は、粘土円筒凸面側に限ってつけたされたもの（II NB-2）と粘土円筒の一方の端を包み込むようにつけたされたもの（II NB-1）とがある。

II NB-1 瓦当用の粘土は粘土円筒直徑の広い方につけたされる。粘土は粘土円筒凸面側に厚く、木口を包み込んだ後、凹面側にナデつけられている。この状況から、軒平瓦製作工程を推定すれば、桶（造瓦具）や布筒を取り去つて出来上がった粘土円筒を回転台に天地を逆にして置き瓦当用粘土をつけたしたと考えられる。この例では回転台の回転を利用して一気に三重弧紋は押し引きされた。重弧紋の特徴は

- (1) 山の形が丸く、谷の形がU字形となる。
- (2) 三本の隆起線の太さが瓦当面の端部・中央部で同一である。
- (3) 弧線に歪みがなく同心円状である。
- (4) 瓦当面がほぼ水平である。

などをあげることが出来る。

平瓦部凹面は、回転台によって横方向になでつけられている。瓦当用粘土の及ばない凹面部分には、布筒痕、枠板跡がそのまま残っている。

後述するK類の重弧紋軒瓦とII NB-1を比較した場合、II NB-1では山と谷の高さの差が小さいのを特徴とする。胎土に砂粒を多く含む。灰色から暗灰色に焼き上がる点で前述のII NAとは異なり、II KBに近い。瓦当厚は3.3cmほどが多い。

II NB-2 瓦当用の粘土が粘土円筒の一端、凸面側につけたされたのち粘土円筒は分割される。分割後、一枚ずつ三重弧紋を押し引く。瓦当面の特徴はII NAの瓦当文様の特徴と同じである。平瓦部凸面には瓦当用粘土が付加されたことで曲線顎に近い。繩目痕は平瓦長軸方向（以後、縦方向と記す）に籠状工具でナデ消されている例と、そのままのものとがある。凹面側は、布筒痕・枠板痕が瓦当面の直上まで残る。

II NF 一枚作りされた三重弧紋軒平瓦である。三重弧紋（四重弧紋の可能性もある）を型押ししたもの（II NF-1）と、押し引きしたものの（II NF-2）とがある。

II NF-1 小破片2点がある。瓦当面に押し引きされたような砂粒の動きがない。このことから型押しされた軒平瓦と判断した。この例では凹面の布目が側面にまわっているものがある。瓦当厚2.6～3.0cm。砂粒の少ない

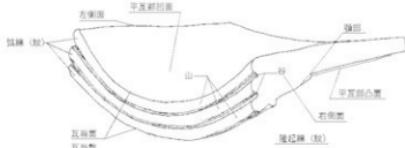


Fig.33 重弧紋軒平瓦部分名称

## VI 出土瓦

良質な胎土で灰色に硬く焼き上がる。

II NF—2 瓦当面の砂粒の動きから押し引き重弧紋と判断した。凸面の繩目を竪方向に打捺した後、瓦当面近くを横方向に打捺する例がある。また、凹面の布目が側面にまで続いて残る例がある。なお、平行線紋（木製叩打具）の打捺痕も繩目痕とともに残す例がある。

II K類 KA・KB (KC)・KD とがある。すべて桶作りされている。粘土円筒の状態で剣線叩打具によって叩き占められる。その痕跡は少数例を除いて消しされている。

II KA 粘土や焼成の点で、II NA・II NB—2 に似る。平瓦部凸面はナデけしがれている。粘土円筒は厚さを一様に作られたらしい。三重弧紋は、粘土円筒分割後の平瓦広端面に一枚ずつ押し引き施紋される。重弧紋の特徴は II NA の特徴と同様である。重弧紋のなかには瓦当面の左から右側へ押し引かれた結果、右の側面部に押し引かれた粘土の端が喰み出している例がある。瓦当厚はバラツキがあるが2.4~3.0cmほど。比較的砂粒の多い粘土が用いられている。焼成は橙灰色のものが多い。

II KB 桶巻き作りされた粘土円筒の一端（多くの場合直径の広いほうの木口）に瓦当紋様を施すための粘土が、木口部分を包み込んで貼りつけられる。三重弧紋は木口に貼りつけられた粘土に押し引きされる。重弧紋には、回転台の回転によって押し引かれたもの（II KB—1）と粘土円筒分割後に軒平瓦一枚ずつに押し引きされたもの（II KB—2）がある。

この軒平瓦は出土量の点で最も多いグループである（平成11年までの出土軒平瓦総点数288点の中の135点[47%]）。この軒平瓦と組合うと考えられる軒丸瓦IV式とともに安中市下秋間の八重巻窯で作られたことがわかっている。ここでは回転台の回転を利用して押し引き施紋された一群（II KB—1）についての分析を試みた。

回転台を使って施紋した三重弧紋軒平瓦の破片80点ほどを資料とする。破片個々に瓦当断面の形態分類と瓦当厚の計測を行った。瓦当断面の形態分類では、工人ないしは工房の造瓦手法や癖などの微妙な違いが反映されている可能性を考えた。実測図によって3つの形態に分けた（Fig.34）。1は瓦当面用に貼りつけられた粘土が平瓦部凹面側にも厚くつき断面形がスプーンのようにしゃくれた形となるもの（S形）。2は、瓦当用に貼りつけられた粘土が重弧紋最上部の弧線を形成するため、瓦当面直上部で紐（堤）状となっているもの（H形）。3は、瓦当用に貼りつけられた粘土は、粘土円筒の外側（凸面）に厚く内側には極く薄く貼りつけられているため平瓦部凹面が平坦に近くなっているもの（T形）の3種類である。

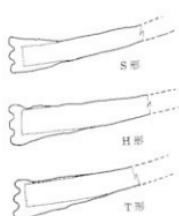


Fig.34 三重弧紋II KB—1 の瓦当断面3種

瓦当断面の形態分類の結果では、S形が78点中の60点(77%)を占め、T形11点(14%)、H形5点(6%)その他2点(3%)という結果となった。S形が山王庵寺三重弧紋の代表的な断面形ということになる。また、瓦当厚を計測した結果の度数分布図を作成した（Fig.35）。この表では3.2cm・3.35cm・3.45cm・3.8cmなどに点数のピークが見られる。これが、押し引き具の大さきを反映したものと考えれば山王庵寺を代表するこの種の三重弧紋軒平瓦の押し引き具は3~4種類ほどであったと考えられないか。II KB—1を大量に生産するために施紋具の数は複数あったらしい。このことでは、工房の違いまでは言及できない。参考までに、出土点数のピークと軒平瓦断面形態の関係と断面形態の状況でみると瓦当厚3.65以上では、S形10点、T形6点、H形2点。瓦当厚3.3~3.6cmでは、S形40点、H形1点。瓦当厚3.25cm以下では、S形10点、T形5点、H形2点となつた。ほ

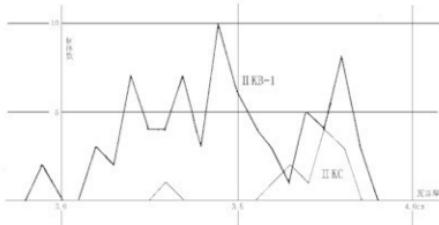


Fig.35 瓦当厚計測値による度数分布図

とんどがS形であった。さらに断面形態の軒平瓦にはまとまった様子はないからすると造瓦工房そのものは、いくつにも分かれて存在したとは考えにくい。単に同一工房で生産されたと考えられる軒丸瓦IV式との関係を考えるためだけかもしれない。

このグループの瓦当部の破片では瓦当面の粘土が欠落し平瓦の木口部分が残っているものもある。

IIKB-2では、平瓦面凹面が横ナデされたものと平行線紋打捺痕をそのまま残すものがある。前者は瓦当厚3.8~4.2cmほど、後者は今年の出土例で3.5cmほどである。凹面は糸切り痕・棒板痕・布筒痕がみられ、瓦当面近くでは瓦当紋用に貼りつけられた粘土がわずかに横ナデされている。割れた面（以後、破面と記す）で見ると瓦の厚さとほぼ同じ厚さの粘土が貼り合わされている。

この平行線叩きの軒瓦は、三重弧紋が左から右に押し引きされている。右の側面では、重弧紋の谷部の粘土が外側に噴み出ている例がある。凹面は、糸切り痕と布筒痕が残る。平瓦の狭端面に瓦当紋様がつけられている。IIKC 回転台の回転によって押し引かれた三重弧紋である。外見上はIIKB-1に含まれる。粘土円筒の木口面やその円筒外面に竪などで刻み目をつけ、瓦当用粘土を貼り付ける一助としているものをIIKCとした。この為、IIKB のなかに本来IIKC とすべき物を含んでいると考えられる。

IIKCと判定出来るのは割れ面に刻み目が認められたものである。回転台の回転によって押し引きされたIIKB-1と同じ条件で、瓦当断面の3分類と瓦当厚の計測を行った。

瓦当断面の分類では、分類が可能な資料14点のうち、S形3点・T形8点・H形3点であった。また、瓦当厚が計測できた12点は3.3~3.8cmの範囲にある。瓦当厚の計測値の度数分布図をIIKB-1のそれと比較してみると3群のどれにもIIKCの瓦当厚計測値はみられる。また、瓦当断面の分類では、T形が最も多い。重弧紋軒平瓦本来の形に近いものとも言えようか。重弧紋が欠落した小破片では平瓦の木口部に刻み目が残っているものや割がれた紋様裏に刻目が残るものがある。

IIKCでは、瓦当面にひび割がある例や刻み目部分で割れている例がある。これは竪による刻み目に残っていた空気が焼成時に膨張し製品としての形は保っていたものの割れやすくなっていた結果であるように思える。その目でIIKB-1の軒瓦を見るとひびの入ったものが目につく。（刻み目という分類条件を設定したのは軒丸瓦IVBの存在に対応すると想定したからである。軒丸瓦IVBは接合式の軒瓦であるが、丸瓦の接合にあたって丸瓦端面や瓦当裏面の丸瓦接合部分に刻み目が見られた。）

IIKD 頸部に隆起線紋1本がある三重弧紋軒平瓦である。直線頸（IICKD）と段頸（IICKDg）がある。段頸の軒平瓦では、2種類があり小さいほうをIICKDgと記し、大きい方をIICKDgIとする。

IICKD 直線（曲線） 頸の軒瓦として分類している。この軒瓦では、瓦当用粘土が木口および粘土円筒凸面側に貼りつけられている。瓦当用粘土だけが残り平瓦が完全に剥離し失われている例がある。この瓦では瓦当面から

## VI 出土瓦

平瓦凸面にかけて粘土が貼り合わされている様子が見て取れる。重弧紋は、山と谷の形状から粘土円筒分割後の押し引きと推定する。頸部の隆起線紋でも、左端が潰れている状況があり、重弧紋が一枚ずつ押し引きされたのかと思われる。瓦当厚は3.35～3.6cmほど。

IIKDg 1点だけ存在する。回転台の回転で押し引かれた重弧紋である。瓦当弦幅30.0cm・同深4.0cmの三重弧紋軒平瓦である。この軒平瓦では、粘土円筒の狭いほうの木口に三重弧紋が押し引きされている。瓦当用粘土は、段頸から瓦当面を包み込んで凹面に薄くまわっている。この為、瓦当面最上段の孤線を押し引くのに充分に粘土がなく、紋様が潰れた状況となっている。回転台上では、粘土円筒狭端木口が上にある状態で段頸をつけることは困難と思われる。が狭端木口を下にして段頸だけを作て粘土円筒の上下を反転して重弧紋を押し引いたものと考えられる(非合理的ではあるが)。狭端木口面に瓦当紋様を施す例は多くないが、山王庵寺の軒平瓦では2～3例が見られる。頸の隆起線紋は瓦当紋と平行して押し引きされている。この場合は、瓦当紋と同時に押し引かれたと考えたい。頸部は横ナデ仕上げ、平瓦部凹面側は瓦当面近くは横ナデされるが棒板痕・布筒痕が残る。茶黒色の粘土粒子が胎土中に見られる。よく精整された粘土が用いられている。灰褐色で硬く焼き上がる。瓦当厚3.4cm、段頸長1.1cm、同深0.7cmを計る。

IIKDgl 山王庵寺では最大の軒平瓦である。採集資料では、瓦当弦幅35.0cm・同深6.4cm・瓦当厚5.1cmが計られる。頸だけに粘土は貼りつけられている。頸の粘土は、刻み目のうえに盛りあがれています。重弧紋は、粘土円筒分割後に押し引きされる。頸の隆起線紋は、瓦当面との間に細く小さい棱線が生じているので、瓦当面の押し引きとは別に施されたものと思う。石英粒など砂粒や黒茶色の粘土粒子が胎土中に見られる粗い粘土が用いられている。灰色、焼きは硬い。頸長9.5cm・同深0.7cmほど。頸面は横方向のナデ。段頸の後の部分には窓による頸の計画線あるいは、段頸の整形と思われる痕がある。凹面では、瓦当面近くまで棒板痕・布筒痕とが残る。

III式 四重弧紋軒平瓦である。今年度調査で網目一枚作りられた軒平瓦が新たに見つかった(IIINF)。これと桶巻き作りされ、平瓦凸面の瓦当面近くに一条の隆起線紋のある軒瓦(IIIKD)とある。

IIINF 平瓦部凸面に網目を残す瓦である。1つは瓦当紋様は押し引き施紋と思われ、ひとつは型押施紋である。瓦範が異なる軒平瓦IV式(重廊紋軒平瓦)との関係が今後検討される必要がある。

IIIKD 桶巻き作りされた粘土円筒を原体とし、頸部には隆起線紋一条が付く。(平瓦凸面は刻線叩打具の打捺痕を消し去ったものと推定する) 頸のないもの(IIIKD)と段頸のもの(IIIKDg)とがある。

IIIKDでは四重弧紋が回転台上で引かれたもの(IIIKD-1)と粘土円筒分割後に押し引きかれたもの(IIIKD-2)がある。

IIKD-1 III式軒平瓦の中では、最も整った瓦当紋様で、彫りも深い。回転台上で押し引きされたと考えられる。瓦当用粘土は平瓦凸面だけに刃物傷を入れて貼り加えられている。このため平瓦部凹面では、瓦当面の直上で棒板痕と布筒痕が残る。瓦当厚2.9cmほど。

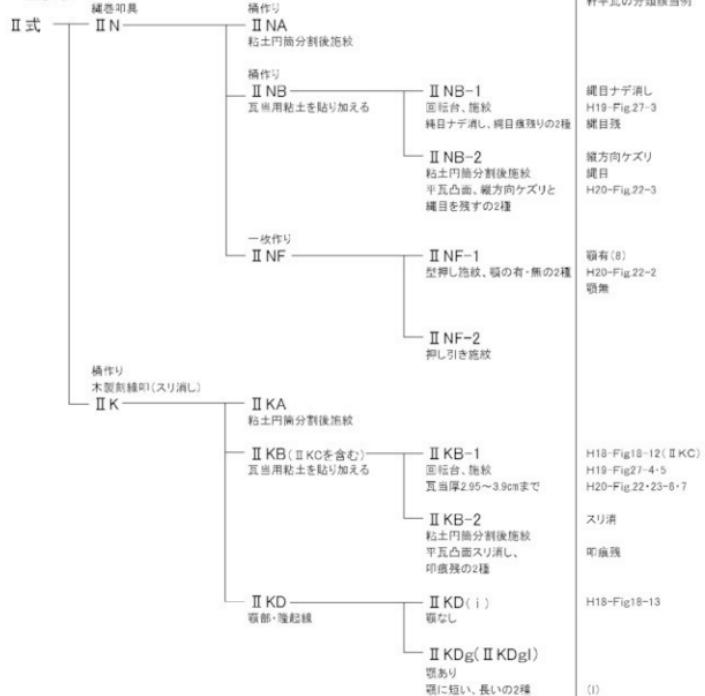
IIKD-2 直線頸の軒平瓦に分類したが小破片で瓦当紋様は浅い。総点数は少なく、確定出来ない部分がある。頸部に粘土が貼りたされているが粘土を接着するための刻み目はないものと思う。瓦当厚2.7cmほど。隆起線は細い。灰青色、良質の粘土が用いられる。

IIIKDg 長さ10.0cm・深0.7cmと長い段頸である。平瓦部の接着面に刻み目を入れて頸部のみを貼りつけている。刻み目は軒平瓦IIKCに見られた窓によるものに似る。重弧紋は粘土円筒分割後に押し引きされたため、孤線の流れが同心円状とならない。孤線は、IIKD-1に比較してやや太いが、谷の幅は狭い。1例だけであるが平瓦部凸面全体を横ナデ整形した後、頸面に三段、須恵器に飾る波状紋が施されている瓦がある。瓦当厚は3.3cmほど、砂粒を含む粘土が用いられ暗青灰色で焼成は硬い。

Tab.8 重弧紋軒平瓦分類表

## 重弧紋軒平瓦

## 三重弧紋



平成18~20年度調査報告書に報告した重弧紋軒平瓦の分類例

織目ナデ消し  
H19-Fig.27-3  
織目残織方向ケズリ  
織目  
H20-Fig.22-3額有(8)  
H20-Fig.22-2  
額無H18-Fig.18-12 (II KC)  
H19-Fig.27-4-5  
H20-Fig.22-23-6-7スリガシ  
印痕残

H18-Fig.18-13

(i)  
H19-Fig.28-6-7平瓦と瓦当が同じ粘土  
H20-Fig.22-5  
瓦当用粘土を貼り加える  
H20-Fig.22-4H19-Fig.28-8-9  
H20-Fig.23-11  
H18-Fig.19-14

H20-Fig.23-12

## 8 桶巻き作り三重弧紋（IIKB—1）軒平瓦の特徴

山王庵寺出土の重弧紋軒平瓦のなかでIIKB—1は、その出土量が(1974~99年までの出土点数の集計)全体の半分(『平成19年度調査報告書』66頁の出土軒平瓦集計表でIIKB+IIKCは出土総点数228点中の157点(54.6%)を占め、軒丸瓦IV式(同資料65頁でIVA+IVB+IVC+IVは出土総点数340点中の134点(39.4%))と組合せ関係にある。

また、この軒瓦の組合せは安中市下秋間の八重巻窯において生産されている(227)。

軒丸瓦IV式(複弁八弁蓮華紋)は、松田猛氏が言うように7世紀後半期(228)に初現を考えるとしても山王庵寺では、この軒瓦に統一して出現するは、軒丸瓦IV式(上野国分寺軒丸瓦B201a)や文字瓦で「薬田」「山田」などの笠懸窯で上野国分寺の創建のために生産された一群である。従って、軒丸瓦IV式と軒平瓦IIKB—1の軒瓦は、出土量からは山王庵寺の伽藍形成期の瓦と考えなければならないし、その用いられた時期については8世紀の前半までと考えるべきものと思う。桶巻き作り三重弧紋(IIKB—1)軒平瓦は質量とともに山王庵寺を代表する軒平瓦であるが、わが国で創案された重弧紋軒平瓦から、かなり変化した重弧紋軒平瓦とは言え、大きさや形のうえではどっしりとした存在感ある軒瓦である。

重弧紋軒平瓦は、大和地方において創案され重圓紋縁重弁八弁蓮華紋軒丸瓦(山田寺式・系)・面造鉢歛紋縁複弁八弁蓮華紋軒丸瓦(川原寺式・系)・雷紋縁複弁八弁蓮華紋軒丸瓦(紀寺式・系)などとともに7世紀後半の時期、日本各地の寺院や官衙などの建造に採用されて行った。

その初現は、舒明天皇11年(639)に建立された吉備池庵寺(百濟大寺跡)である。吉備池庵寺の重弧紋(Fig.36—1)は、軒平瓦用に作られた平瓦(厚3.0~4.5cm)の木口に三重弧紋を押し引いた後、創建法隆寺の軒平瓦に用いられた型押し忍冬紋が押捺されている。

この2年後(舒明天皇13年(641))、蘇我倉山田石川麻呂が発願し建立されたのが山田寺である。Fig.36—2は、その創建瓦である。粘土板を桶(造瓦具)に巻きつけて出来上がった粘土円筒を木製の刻線叩板で叩きしめ、瓦当紋様を押し引くために粘土円筒の直径の広い方に粘土の帯を貼りつけている(これによって段頸が生まれる)。回転台の回転によって重弧紋が押し引かれている。その製作過程はおよそ前項、Fig.32に示した姫寺例重弧紋の例に近いものと思われる。報告書がA形式とした創建期の重弧紋軒平瓦がFig.36—2である。

Fig.36—3は川原寺跡出土の重弧紋軒平瓦である。寺は斎明天皇明日香川原宮の跡に建立され、天武天皇2年(673)にこの寺で一切經の書写が行われたという記録から、この時以前に完成していたであろうとされている。重弧紋軒平瓦としては最も完成期の瓦である。押し引きされた重弧紋は非常に彫りの深い精緻なものとなっている。この重弧紋軒平瓦の製作工程は、およそ前述の姫寺例や山田寺例と同じものと思う。

山王庵寺出土の三重弧紋(IIKB—1)については、前項で若干の分析を行ったが以下のような製作工程を持つ軒瓦といえよう。

1. 桶(造瓦具)を用いて粘土円筒を製作する。
2. 造瓦具・布筒などをはずし、回転台上に粘土円筒の直径大きい方を上にして粘土円筒を設定する(この時、粘土円筒の強度を考慮すれば若干の期間、乾燥工程が必要であるように思われる)。
3. 粘土円筒の木口部を包み込むように重弧紋を押し引くための粘土を張り加える。瓦当用の粘土は通常、粘土円筒の凸面側に厚く、凹面側に薄くなる。この貼り加えた粘土を粘土円筒に密着させ形を整えるため凹凸両面とも回転台によってナデつける。この結果、段頸ではなく直線頸ないしは曲線頸の軒平瓦が出来る。
4. 木口部に出来た瓦当面に押し引き具を用い、回転台によって三重弧紋を押し引く。
5. 乾燥・四分割して焼成し、製品となる。

山王庵寺の三重弧紋(IIKB—1)軒平瓦は、大和地方の初期の重弧紋から、どのような過程を経て変化したの

### 8 桶巻き作り三重弧紋（II KB-1）軒平瓦の特徴

だろうか。吉備池庵寺の例は、厚い木口面に直接重弧紋が押し引かれ、山田寺・川原寺例は粘土円筒の直径の広い方の木口の凸面端に瓦当押し引き用の粘土帯が貼り加えられている（貼り付け段顎）。これを重弧紋軒平瓦初期の姿と考える。

Tab. 9は、古代瓦研究会シンポジウム記録『古代瓦研究II』一山田寺式軒瓦の成立と展開一から大和以東の重弧紋の軒平瓦の瓦当施紋部の特徴を一覧としたものである。大和以東の国々に建立された山田寺系軒丸瓦を出土する古代寺院（跡）から出土した重弧紋軒平瓦である。重弧紋軒平瓦を出土する遺跡には7世紀後半に建立された川原寺式系や紀寺式系軒丸瓦、さらには藤原宮式などの軒丸瓦とともに見られる場合が多い。

Tab. 9は、大和で創案された重弧紋軒平瓦が時間の経過と大和から東国への物理的距離によって変化していくことが考えられるだろうという前提に立って作成したものである（人や物が移動することで直接、大和地方の造瓦技術などが遠隔地に導入されることはしばしばあるとしても）。Tab. 9—4の田中庵寺（7世紀中頃）では、重團紋縁重弁八弁蓮華紋軒丸瓦（IA）が創建瓦とされる。五重弧紋軒平瓦については言及はされていないが軒丸瓦（IA）が山田寺式軒丸瓦に紋様ばかりでなく製作法も近いこと、時期的に平瓦一枚作りの方法はまだとられていない時期と考えられる。重弧紋軒平瓦の断面図をみると桶巻き作りされ貼り付け段顎の軒平瓦と判断される。

5. 尾張元興寺庵寺では、山田寺系軒丸瓦に伴って重弧紋軒平瓦が出土軒平瓦の90%を越えるという。四重弧紋と廉状四重弧紋軒平瓦が創建期のものとされるが以後廉状五重弧紋に変る。桶巻き作りとされ貼り付け段顎の軒平瓦である。

6. 大宝院庵寺 山田寺系・川原寺系の軒丸瓦がある。軒平瓦には三重・四重弧紋の二種類がある。実測図からは貼り付け段顎であることは読とれる。多分桶巻き作り軒平瓦であろう。

7. 日吉庵寺 山田寺系軒丸瓦にともなって四重弧紋軒平瓦がある。A～Dの四種があり、A・Bは桶巻き作され、貼り付け段顎の瓦。Bは桶巻き作りされ瓦籠押捺、Dは曲線頭で半截竹管状工具による一本引きと解説される。

8. 市ヶ原庵寺 白鳳時代の寺院とされ山田寺系軒丸瓦が創建瓦である。三重・四重弧紋軒平瓦がありA～Dの4種に分けられる。Aは桶巻き作り、貼り付け段顎の軒平瓦である。

9. 伊豆国分寺 山田寺系軒丸瓦に伴って一枚作り。瓦籠の押捺による曲線頭四重弧紋軒平瓦がある。

10. 龍角寺 東国では最も山田寺式軒丸瓦に近い瓦当紋様の軒丸瓦が出土している。桶巻き作りと思われ貼り付け段顎の三重弧紋軒平瓦が創建の時期と思われる。

11. 木下別所庵寺 山田寺系軒丸瓦が出土する。桶巻き作り。貼り付け段顎の三重弧紋軒平瓦が伴う。

12. 岩熊庵寺 山田寺系軒丸瓦に伴って、三重・四重弧紋軒平瓦がある。三重弧紋は貼り付け段顎、押し引き四重弧紋はヘラ描きとある。

13. 龍正院庵寺 山田寺系軒丸瓦に三重弧紋軒平瓦が伴う。軒平瓦は桶巻き作り、貼り付け段顎の瓦である。

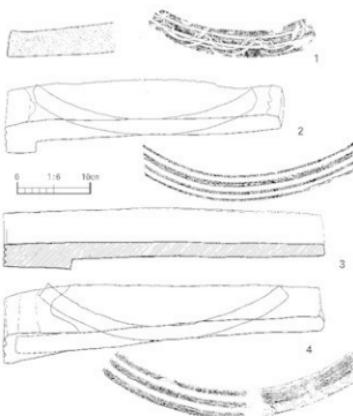


Fig.36 大和古式重弧紋軒平瓦と山王庵寺重弧紋軒平瓦  
1. 吉備池庵寺 2. 山田寺 3. 川原寺 4. 山王庵寺  
(註文献報告書より転載)

## VI 出土瓦

Tab.9 重弧紋軒瓦の瓦当面のつくり方について

	遺跡名	重弧紋軒瓦	製作法など	対応する軒丸瓦	文献および発表者	分類
1	古備瀬庵寺(大和)	三重弧紋 三重弧紋鉢紋後に忍冬 紋を塑押し	桶巻き作り 陶軒丸瓦より厚く3.0~4.5cmの 厚さがある	重圓文綵重弁華弁八弁蓮草紋	重弧紋の初現 文獻 1	A
2	山田寺(大和)	四重弧紋	粘土板桶巻作り (A~D形式)	山田寺式 (重圓文綵重弁華弁八弁蓮草紋)	花谷清氏 文獻 2	B 1
3	川原寺(大和)	四重弧紋(三重弧紋)	段額 桶巻き作り	面達磨文綵複弁八弁蓮草紋	文獻 3	B 1
4	田中施寺(大和)	五重弧紋	段額	山田寺系	近江俊英氏 文獻 4	B 1
5	尾張元興寺(尾張)	四重弧紋 廉状五重弧紋 五重弧紋	貼り付け段額、平行線印き 桶巻き作り	素紋縁素弁蓮草紋 山田寺系 川原寺系	服部哲也氏 文獻 1	B 1
6	大宝院庵寺(遠江)	三重弧紋 四重弧紋	桶巻き作り 貼り付け段額	山田寺系 川原寺系	松井一明氏 文獻 4	B 1
7	日吉庵寺(駿河)	四重弧紋	桶巻き作り 貼り付け段額 CはE型、Dは一枚作り	山田寺系	鈴木俊中氏 文獻 1	B 1
8	市ヶ原庵寺(伊豆)	三重弧紋 四重弧紋	押引き 貼り付け段額	山田寺系	鈴木俊中氏 文獻 4	B 1
9	伊豆国分寺(伊豆)	四重弧紋	曲輪型 丸抱き捺	山田寺系	文獻 4	B 1
10	龍角寺(下総)	三重弧紋	貼り付け段額 桶巻き作り	山田寺系	山路直充氏 文獻 4	B 1
11	木下別所庵寺(下総)	三重弧紋	貼り付け段額 桶巻き作り	山田寺系	文獻 4	B 1
12	岩熊庵寺(上総)	三重弧紋 四重弧紋	貼り付け段額	山田寺系	文獻 4	B 1
13	龍正院庵寺(下総)	三重弧紋	段額 桶巻き作り	山田寺系	文獻 4	B 1
14	光善寺(上総)	二重・三重・四重弧紋	貼り付け段額	山田寺系とされる 重圓文綵重弁四弁	文獻 4	B 1
15	九十九坊庵寺(上総)	四重弧紋	貼り付け段額	光善寺軒丸瓦の系統	文獻 4	B 1
16	二日市場庵寺(上総)	三重弧紋	貼り付け段額 桶巻き作り	山田寺系 紀寺系	文獻 4	B 1
17	上植木庵寺(上野)	廉状重弧紋 三重弧紋	貼り付け段額 桶巻き作り	山田寺系(上植木庵寺式)	高井佳弘氏 出浦崇氏 文獻 4	B 1
18	難波宮跡(難波)	三重弧紋	貼り付け段額 桶巻き作り	難波の山田寺系 (素紋縁重弁蓮草紋)	高松俊雄氏 文獻 4	B 1
19	名生船岡南伏見庵寺(難波)	四重弧紋	貼り付け段額 桶巻き作り	難波の山田寺系 (素紋縁重弁蓮草紋)	高橋誠明氏 文獻 4	B 1
20	難波道跡(寺院跡) 大蓮寺跡(難波)	重弧紋	貼り付け段額 桶巻き作り	難波の山田寺系 (素紋縁重弁蓮草紋)	長島学一氏 文獻 4	B 1
21	郡山道跡郡山庵寺(難波)	三重弧紋	貼り付け段額 桶巻き作り	難波の山田寺系 (素紋縁重弁蓮草紋)	佐川正徳氏 文獻 4	B 1
22	山王庵寺(上野)	三重弧紋(HKB-1)	曲輪型(包込式) 桶巻き作り	素紋縁複弁八弁蓮草紋 (IV式軒丸瓦)		B 2

文献1 奈良文化財研究所「大和古備瀬庵寺」一百済大寺跡—吉川弘文館 2003

文献2 奈良文化財研究所「山田寺発掘調査報告」2002

文献3 奈良国立文化財研究所「弘福寺」川原寺発掘調査報告 1960

文献4 奈良文化財研究所「古代瓦研究会シンポジウム記録『古代瓦研究II』山田寺式軒瓦の成立と展開—大和以東—(備考欄の人名はシンポジウムでの発表者)

分類欄 A 平瓦木口部に直接施紋

B 瓦当用黏土を加える

B1 平瓦小口部凸面に黏土を加えた場合(瓦当面に貼り加える場合を含む)

B2 平瓦部木口面を包み込む様に加えた場合

#### 8 桶巻き作り三重弧紋（IIKB-1）軒平瓦の特徴

14. 光善寺 重圈紋縁重弁四弁軒丸瓦が山田寺系とされる。二重・三重・四重弧紋軒平瓦がある。いずれも、貼り付け段額の軒平瓦である。たぶん、桶巻き作りであろう。
15. 九十九坊庵寺 重弁四弁の山田寺系の軒丸瓦が見られる。他に紀寺系軒丸瓦がある。三重・四重弧紋軒平瓦があり、いずれも貼り付け段額である。
16. 二日市庵寺 山田寺系・紀寺系軒丸瓦がある。三重弧紋軒平瓦がある。貼り付け段額で桶巻き作りされている。
17. 上植木庵寺 外縁の重弧紋が低い山田寺系軒丸瓦に簾状三重弧紋軒平瓦が伴うと考えられている。桶巻き作りされ貼り付け段額の瓦である。他に三重弧紋軒平瓦もある。
18. 龍山窯跡 陸奥では素紋縁重弁八弁軒丸瓦を山田寺系軒丸瓦としてとらえている。いずれも問弁が連続し、その外に細い円闇紋、その外に幅の広い素紋縁が伴う。軒平瓦は粘土板桶巻き作り。貼り付け段額である。
19. 名生館官衙伏見庵寺 軒丸瓦は18と同じ系統の軒丸瓦。四重弧紋軒平瓦がともなう。
20. 燕沢遺跡・大蓮寺窯跡 軒丸瓦は18・19の系統の山田寺系軒丸瓦、重弧紋軒平瓦が伴うと見られる。桶巻き作り貼り付け段額の軒平瓦である。写真では、山王庵寺IIKB-1に近い包み込み風の印象を受けるが実測図では粘土は平瓦部凹面にはまわっていない。
21. 郡山遺跡・郡山庵寺 軒丸瓦は陸奥国山田寺系軒丸瓦である。桶巻き作り（竹状模肝痕）とされ、貼り付け段額の三重弧紋軒平瓦がある。

以上、大和以東の国々で白鳳期を中心とした寺院（この場合は山田寺系軒丸瓦を出土する寺院跡）に見られる重弧紋軒平瓦を一覧とした。一覧とは言え伊賀・伊勢・志摩・山城・近江・飛騨・越前・越中・越後・信濃などなどの諸国の寺院跡で出土している重弧紋については一瞥もしていない。従って、時間の経過や物理的な遠近から山王庵寺三重弧紋IIKB-1について影響を製作工程での変化などについて言及することは許されない。確實にいえるだろうことは、大和で倒壊された重弧紋軒平瓦は、7世紀後半の大和以東の諸國でも桶巻き作りされて瓦当用の粘土帯を貼り付け、段額を作っている方法が、ずっと採用され続けていることである。

この点で時間の経過によるものは問題があるとしても山王庵寺三重弧紋軒平瓦（IIKB-1）は、これらと違った作り方をされている点をなによりの特徴としている。三重弧紋軒平瓦としては退化現象の姿としてとらえられかねない製作方法ながら、Fig.36-4に見るとおり重々しさのある立派な重弧紋軒平瓦である。

なお、山王庵寺出土の重弧紋軒平瓦には、吉備池庵寺例のように木口の一端に重弧紋を押し引くもの、山田寺・川原寺例のように平瓦の凸面端に粘土帯を貼り付けているものなどもある。IIKB-1を7世紀末ないし8世紀前半に考えることで、山王庵寺の重弧紋軒平瓦の先後の関係を考える一助となると思う。

以下、A・B・CはTab.7・8の内容説明である。

A 山王庵寺既出土例欄には、発掘調査により出土した文字瓦の記入を考えた。欄内には限られた文字数しか記入できないことから、以下一連の報告に記号を与えることとした。出土頻度については2次～平成11年度までに出土し、事務局でカード化出来た数である。

略号

福島	福島武雄「日枝神社境内の大礎石」「上毛及上毛人」53号 1921(大10)
2次	前橋市教育委員会「山王庵寺跡第2次発掘調査概報」1976(昭51)
3次	前橋市教育委員会「山王庵寺跡第3次発掘調査概報」1977(昭52)
4次	前橋市教育委員会「山王庵寺跡第4次発掘調査概報」1978(昭53)
5次	前橋市教育委員会「山王庵寺跡第5次発掘調査報告書」1979(昭54)
6次	前橋市教育委員会「山王庵寺跡第6次発掘調査報告書」1980(昭55)

## VI 出土瓦

- 7次 前橋市教育委員会『山王庵寺跡第7次発掘調査報告書』1982(昭57)  
9H 平成9年度前橋市教育委員会発掘調査出土資料  
11H 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『一山王庵寺等V遺跡発掘調査報告書一』2000(平12)  
18H 前橋市教育委員会『山王庵寺—平成18年度発掘調査報告書一』2007(平19)  
19H 前橋市教育委員会『山王庵寺—平成19年度発掘調査報告書一』2009(平21)  
他 上記以外で山王庵寺の寺域内で発掘され出土した資料

なお、山王庵寺の第1次発掘調査は、前橋市教育委員会『文化財調査報告書』第五集 1975(昭50)に収録されているが文字瓦資料の出土はない。

B 関連遺跡出土例欄には、前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施した発掘調査、群馬県教育委員会・側群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団が実施した発掘調査をはじめ県下の歴史時代関連道路の調査事例の成果を踏まえて関連遺跡とすべきである。この問題の解決は、ある程度の時間さえあれば実現可能であると思う(平成21年から現在まで実施していない)。現時点ではとりあえず、文字瓦資料のうえで直接に同じ文字・同じ筆と考えて良い資料が出土している上野国分寺他の発掘調査報告書との照合を行うことに留めた。照合の結果は、略号を記入欄に記入した。

### 略号

- 僧寺 群馬県教育委員会『史跡上野国分寺跡発掘調査報告書』1989(平元)  
尼寺 群馬県教育委員会・側群馬県埋蔵文化財発掘調査事業団『上野国分尼寺跡 上野国分寺中間地域』1993(平5)なお、『上野国分尼寺跡発掘調査報告書』1970(昭45)、『前同』1971(昭46)が上野国分尼寺跡の報告書としてあるが、文字瓦資料を図版・挿図等で照合が出来ることから、1993年版を利用した。

- 明神Ⅷ 前橋市埋蔵文化財発掘調査団『元總社明神遺跡Ⅷ』1990(平2)

C 『山王庵寺跡第6次発掘調査報告書』は、「放光寺」銘文字瓦の発見によって記銘瓦の質的な分類を行った。報告では文字銘瓦を胎土・凸面調整・布目(1cm方眼中の縱横の线条数)・横骨筋の有無などから丸・平瓦を問わず3分類している。報告では「I類は山王庵寺創建期に遡ると考えられ、創建期の瓦には文字の書かれた瓦の量が非常に少なかったと推定される。山王庵寺に文字瓦の入ってきたのは、単弁六葉蓮華文瓦、ないし単弁四葉蓮華文瓦が用いられると同じ頃だと考えられる。III類もそれ以降であろう」と記す。I類とされたものは桶巻き作り平瓦と凸面を横ナギ2分割した丸瓦である。II類は一枚作り平瓦と2分割する丸瓦で、ともに凸面の叩き具痕はナデ消しされている。III類は綱巻叩打痕をそのまま残す一枚作り平瓦と綱巻叩打痕をナデ消した丸瓦である。概略、I類は創建期~8世紀前半頃までの瓦で安中市下秋間窯が主たる生産窯らしい。II類は『上野国分寺』報告書がその修造期とする8世紀後半以降になる吉井・藤岡方面で生産された瓦である。III類は「放光寺」銘文字瓦の年代のきめ手となった「天長八」の紀年銘から、9世紀第2四半世紀以降と考えている。この瓦は安中市秋間窯窯である。なお、I~III分類以外に19年度報告から笠懸窯で作成されたとされる文字瓦については「笠懸」と分類項目をもうけた。I類とII類の間に置かれる可能性は高いがII類と部分的に平行関係である可能性もある。

### (註)

- 1 前橋市教育委員会『山王庵寺—平成18年度調査報告一』2007  
前橋市教育委員会『山王庵寺—平成19年度調査報告一』2009
- 2 「平成19年度調査報告」62頁。註6に稻垣晋也氏・岡本東三氏の見解を記した。
- 3 木村捷三郎氏による瓦籠の分類である。「平成19年度調査報告」62頁註2に概要を記した。
- 4 複弁蓮華紋軒丸瓦(III・IV)の違いについては「平成19年度調査報告」42頁を参考されたい。なお、軒丸瓦IVCを想定したが現段階では否定できないまでもIVAの瓦籠の傷が進行したものである可能性が出てきた。

## 8 桶巻き作り三重弧紋（IIKB-1）軒平瓦の特徴

- 5 稲垣晋也氏は「飛鳥・白鳳の古瓦」展図録（1970〔昭45〕）のなかで軒丸瓦の瓦当と丸瓦の接合法を4分類している。接着式はその1つで瓦筋に粘土をつめて出来上がった瓦筋の裏面に別作りした丸瓦を接着する方法で山王庵寺の軒丸瓦ではII・III・IV式がこの方法で丸瓦を接着している。
- 6 側群馬県埋蔵文化財調査事業団「熊野中西遺跡1」1982（昭57）
- 7 重弧紋軒平瓦の製作工程のおおよそについては「平成19年度調査報告」63頁註14に示したが今回は改めて後項「重弧紋軒平瓦の分類と特徴」で検討する。
- 8 「平成19年度調査報告」44頁、軒平瓦3として報告。
- 9 今年度調査報告 Fig.36-4 がこれにあたる。
- 10 「平成19年度調査報告」46~48頁 Fig.28-8・9 Tab.5
- 11 前橋市教育委員会「山王庵寺跡第3次調査概報」1977（昭52）27~28頁
- 12 栃木県教育委員会側板木県文化財事業団「下野國分寺跡Ⅲ」（1996〔平7〕）本文編17頁。報告では平面が台形でカマボコ型の軒平瓦製作台の広端木口部に瓦当面を作る壁をついている。恐らく今年度調査で報告した5や13は、こんな方法で軒平瓦の形が作られたものだろう。
- 13 佐原 真「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌』58-2 1972（昭47）粘土円筒の状態で広端面を下にして「粘土板の合せ目」を考えた場合、「粘土板の合せ目」は右側の粘土板が外にくる場合（Z形）と内側に入る場合（S形）との2通りがある。
- 14 川原嘉久治氏「西上野における古瓦散布地の検査」[研究紀要]101 1999（平4） 側群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 15 側群馬県埋蔵文化財調査事業団「上野国分寺跡・尼寺中間地城（6）」1992（平4）本文編303頁、図表編81頁、写真図版編第168にZ区59号住居跡遺物の7・8の2点が、これにあたると思われる。なお、本文編に示された図をFig.27に転載した。
- 16 「平成19年度調査報告」44・45頁 Fig.27-1
- 17 A 開口功一「上野国分寺跡金堂基壇中出土瓦について」「東国史論」第1号 1986（昭61）  
B 群馬県教育委員会「史跡・上野国分寺跡発掘調査報告書」1998（平63）220頁・335頁
- 18 藤島亥次郎「朝鮮瓦の製法について」「総合古瓦研究」第二分冊『夢殿』19番 1939（昭14）
- 19 A 栗原和彦「大宰府出土の九・十世紀の平瓦」「瓦衣千年」1999（平11）  
B 栗原和彦「大宰府跡出土の軒平瓦」「九州歴史資料館研究論集」25 2000（平12）
- 20 A 註17-B  
B 高井佳弘「上野国分寺出土の群馬郡名押印文字瓦について」「古代」1999（平11）
- 21 型押し「方光」については、相川龍雄・往谷鶴與氏の論考がある〔「平成19年度調査報告」62頁註33・34〕。なお、高井佳弘氏から住谷コレクションの中に型押し「方光」が2点あるとの教示を得ている。
- 22 前橋市文化財研究会「山王庵寺跡第6次発掘調査報告書」1977（昭55）38頁
- 23 側群馬県埋蔵文化財調査事業団「上野国分寺跡・尼寺中間地城2」1987（昭52）。G区4号戸門から出土。桶巻き作り平瓦で凸面には、この文字のほかに不規格字叩き痕がある。本文編43頁、図表編141頁595-7、写真図版編第167
- 24 高井佳弘 註20-B
- 25 註17-B 227頁
- 26 山崎信二 註7 1993（平5）649頁
- 27 平成18年、筆者は安中市立学習の森資料館および秋間資料館が所蔵する田島伊作氏関係資料および秋間古跡出土資料を調査した。
- 28 松田 猛「佐野三家と山部郷」「高崎市史研究」11 1999（平11）

## VII その他の遺構と出土遺物

### 1 壁穴住居跡と出土遺物

H-30号住居跡 (Fig.37・38 PL.14)

位置 21トレンチ X145、S37・38グリッド 主軸方向 N-90°-E 形状等 西側は調査区外の為形状は不明。現状で、方形形状をなす。東西(2.34)m、南北3.78m、壁高現31.5cm。上半部分の大半は削平されている。面積 (7.16)m<sup>2</sup> 床面 中央部分がやや陥るがほぼ平坦。東側で東西0.45m、南北1.5m、床面との比高差6 cmを測る高さがあり検出された。床面との比高差は竈に近づくにつれ少なくなっていく。竈 東壁やや南寄りに位置し、全長1.24m、最大幅0.74m、焚口部幅0.3m、主軸方向はN-88°-Eを測る。袖石として川原石が設置され、支脚

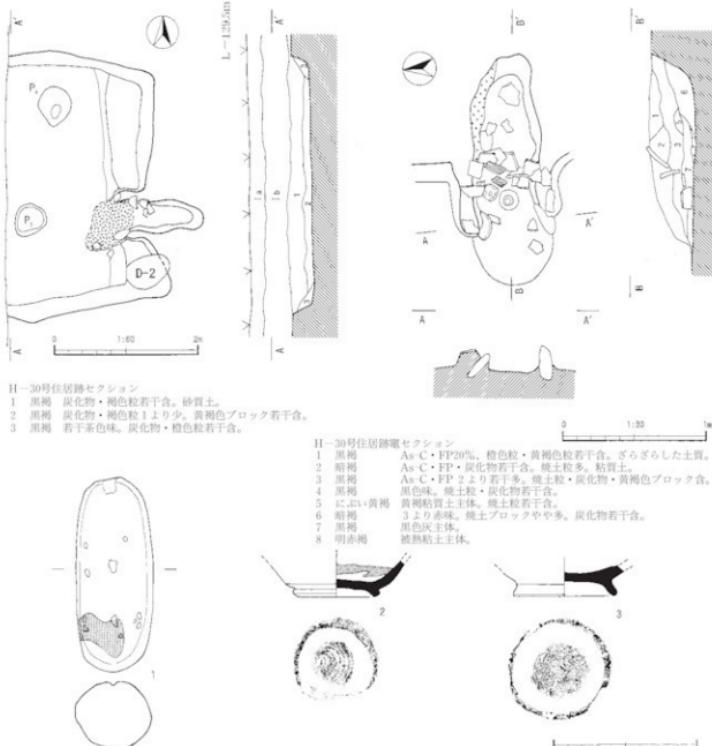


Fig.37 H-30号住居跡・出土遺物(1)

## I 穴空住居跡と出土遺物

として須恵器高台腕(4)を逆位として用いられる。煙道部付近から瓦が重なって出土した。**出土遺物** 窓前面を中心に土師器・須恵器が出土した。**時期** 出土した遺物から11世紀代に帰属すると思われる。**備考** 南東側で本住居跡より新しい2号土坑と重複する。

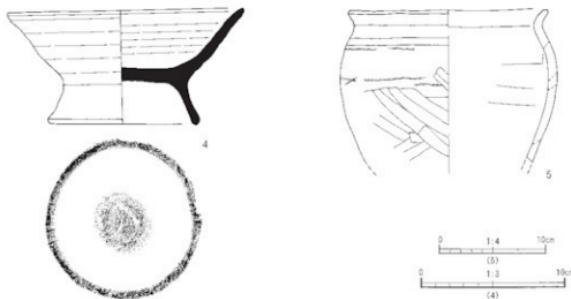


Fig.38 H-30号住居跡出土遺物2)

Tab.10 H-30号住居跡出土遺物観察表

No.	遺種名	出土 層位	①口径 ②底径 ③深さ ④重量	①土質 ②焼成 ③色調 ④道合度	遺種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	石製品 擦砥石	標状 面	長13.3 幅3.3 厚1.6 重量500g	①— ②— ③— ④—	安山岩。断面極円形。側面やや凹凸。側面一部に被熱による黒ずみ。	32	
2	須恵器 高台腕	覆土	①— ②(2.3) ③6.0	①中粒 ②良好 ③黒 ④底部	瓦窯だれた丸い形状の状台。腹部や手當りをもつ。輪組整形。底部回転式切り。内面摩耗付着物。	2	
3	須恵器 高台腕	覆土	①— ②(2.0) ③7.1	①中粒 ②焼成不良 ③にい・黄緑 ④底凹	断面U字型の高台。貼付け後の修理や手綱。輪組整形。底部回転式切り。	1	
4	須恵器 高台腕	窓内	①6.3 ②27.8 ③10.5	①中粒 ②焼成不良 ③灰青色 ④完全形	人振りの跡、全体・窓・高台部周に少字状外縁、腰部若干膨らむ。輪組整形。口縁部回転式。底面回転式切り。	26・窓	
5	窓	窓内	①(18.4) ②(14.0)	①中粒 ②焼成不良 ③にい・窓 ④上平1/6	窓内や窓い、口縁部窓外反、削部窓・両曲、口縁部下で膨らむ。口縁部回転式。脚部斜位挽突り。一部組合板残存。	12・13地	

H-31号住居跡 (Fig.39・40 PL.14)

位置 21トレーナー X145、S34グリッド 主軸方向 N-92°-E 形状等 調査区の関係で南西部分のみ調査した。調査範囲内東西(1.83)m、南北(2.52)m、現壁高38.5cmを測る。面積 (4.20)m<sup>2</sup> 床面 ほぼ平坦。

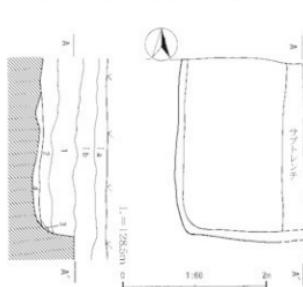


Fig.39 H-31号住居跡

- H-31号住居跡セクション  
 1 黒褐 As-C・FP10%、炭化物・焼土ブロック若干合。  
 2 黒褐 粘質土。黄褐色・ブロッキ・炭化物・褐色粒若干合。  
 3 黑褐 明赤色味。橙色粒若干合。崩落土。  
 4 黑褐 黄褐色・ブロッキ・炭化物若干合。掘り方充填土。

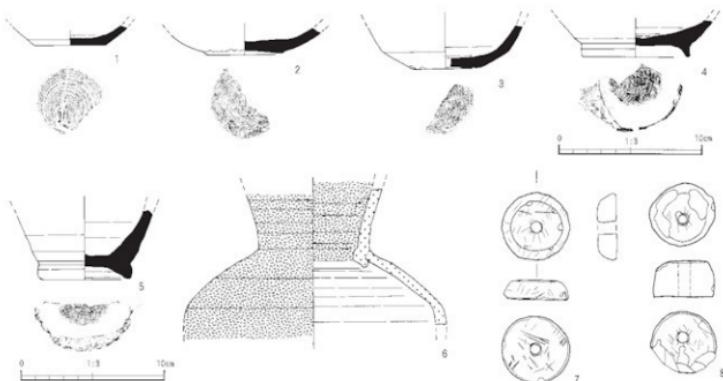


Fig.40 H-31号住居跡出土遺物

Tab.11 H-31号住居跡出土遺物観察表

No.	器種名	出土 位置	①底径 ②高さ ③底径	④底面 ⑤焼成 ⑥底面	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	須恵器 壺	覆土 ①— ③(4.8)	②(1.4) ④底面	①細口 ②焼成火候 ③色土 ④底面2/3	小形器形。底部平底。体部外縁気味に開く。器内や薄い。輪轂整型。底部回転未切り。		
2	須恵器 杯	覆土 ①— ③(1.6)	②(1.6) ④底面	①細口 ②焼成火候 ③にひき、黒褐色 ④1/3	底部小さく、若干上げ底。体部腰窓有。輪轂整型。底部回転未切り。未調整。		
3	須恵器 杯	覆土 ①— ③(4.8)	②(2.0) ④底面	①細口 ②焼成火候 ③にひき、黒褐色 ④1/3	底面わずかに上げ底。底部下部多く残高。輪轂整型。底部回転未切り。		
4	須恵器 高台碗	覆土 ①— ③(7.4)	②(2.5) ④底面	①細口 ②焼成火候 ③灰 ④1/2	直立する短い高台。体部外傾して立上る。つくり丁寧。輪轂整型。底部回転未切り。		
5	須恵器 盤	床面 ①— ③(6.3)	②(4.8) ④底面	①細口 ②焼成火候 ③灰 ④1/2	高台部短く直立。断面台形状。斜腹直線的に外傾。輪轂整型。底面高台剥け後。回転無で調整。	2	
6	灰陶陶 瓶	覆土 ①— ③—	②(9.2) ④底面	①細口 ②良好 ③灰 ④別部	陶瓶立窓床に外傾。肩部や丸く残高。斜部変換点で直線的に折れる。底部下端複合帆顧者。斜部下端削毛毛り施釉か。	0-1出土 片と接合	
7	石製品 研磨具	床面 L×4.6×4.6 厚1.3 孔φ8.5mm 重量45.4g	L×4.6×4.6 厚1.3 孔φ8.5mm 重量45.4g	石削型。鏡面円滑形を呈し、厚さが薄い。表面面とともに整形に因る擦痕顕著。周辺付近はやや丸み。		4	
8	石製品 研磨具	床面 L×4.5×4.3 厚2.4 孔φ8.0mm 重量58g	L×4.5×4.3 厚2.4 孔φ8.0mm 重量58g	砂岩質。鏡面円滑形を呈し、厚みがある。平坦面は同一方向に向かい研磨状の痕跡。		10	

H-32号住居跡 (Fig.41・42 PL.14)

位置 21トレンチ X145、S34・35グリッド 主軸方向

N-91°-E 形状等 東辺側の一部が調査された。現状

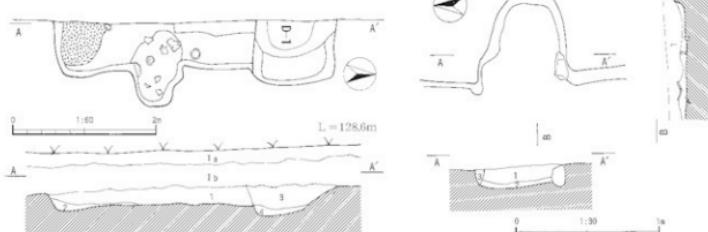


Fig.41 H-32号住居跡

## I 穴空住居跡と出土遺物

### H-32号住居跡・D-1セクション

- 1 黒褐 As-C・FP10%、黄褐色粒やや多。炭化物若干含。
- 2 黒褐 灰土主体。棕色粒若干含。
- 3 前褐 As-C・FP10%、前褐色粒・炭化物若干含。
- 4 前褐 As-C・FP・黄褐色粒・棕色粒若干含。

### H-32号住居跡セクション

- 1 前褐 As-C・FP 2%、灰土粒・黄褐色粒・ブロック若干含。
- 2 黒褐 灰土粒・炭化物含。
- 3 前褐 As-C・FP若干含。被熱土主体。

で、東西(0.79)m、南北(2.80)m、現壁20.0cmを測る。面積 (2.06)m<sup>2</sup> 床面 南東隅で灰の分布が確認された。竈 東壁の中央やや南よりに位置し、全長63cm、最大幅74cm、焚口部幅50cm、主軸方向N-88°-Eを測る。右袖からは袖石として川原石が確認された。出土遺物 覆付近を中心に須恵器や羽蓋が出土した。固化した灰釉陶器の底部(3)は竈左前から出土した。時期 (9世紀末~10世紀前半頃) 備考 北東隅で本住居跡より新しい1号土坑と重複する。

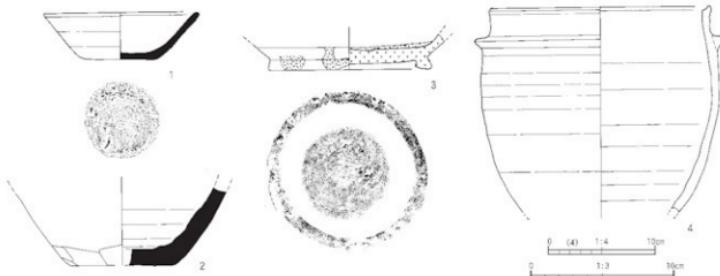


Fig.42 H-32号住居跡出土遺物

Tab.12 H-32号住居跡出土遺物観察表

No.	部種名	出土 領域	(1)口径 (2)深さ	(3)断土 (4)焼成度	部種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	須恵器 杯	竈内	(1)10.7 (2)0.2 (3)0.0	(1)中軟 (2)焼成焰 (3)灰青色 (4)ほぼ完形	小形の器形。底部わずかに上げ既。体部直線的に外傾。繊細整形。 白線部(4)無地。底部(3)無地。底部(4)無地。	12	
2	須恵器 壺	竈内	(1)-(2)(5.3) (3)(7.0)	(1)細軟 (2)良好 (3)灰白 (4)底部1/3	底部平既。脚部下半直線的に外傾。器内深い。脚部回転既で、下 部手持ち置振り。底底部で調整。	8+9	
3	灰釉陶 瓶	床面	(1)-(2)(2.4) (3)11.1	(1)細軟 (2)良好 (3)素・灰青 (4)底部	断面台形状の扁平高脚。底部回転既で調整。高台部外表面流れ 既。内面オーバー黄色の釉薬。	4	
4	羽 蓋	竈内	(1)(20.2) (2)(18.0) (3)-	(1)中軟 (2)焼成焰 (3)灰青色	口線部既く立ち直し。唇部わずかに内傾。脚部断面三角形。若干上 向き。脚部上半回転既で、下半部斜位置振り。内面回転既で。	1+6+7	

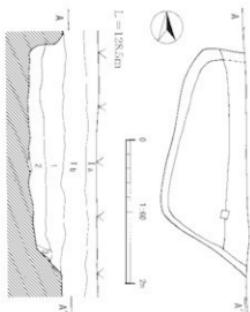


Fig.43 H-33号住居跡

### H-33号住居跡 (Fig.43 PL.15)

位置 21トレレンチ X145、S35グリッド 主軸方向 N-102°

形状等 西邊部分を調査した。形状は不整形な方形を呈するか。規模は東西(1.34)m、南北2.76m、現壁高34cmを測る。面積 (2.65)m<sup>2</sup> 床面 多少の凹凸があるがほぼ平坦。出土遺物 北東の床面から瓦が確認された以外は顯著な遺物は見られなかった。時期 遺物が少ないが、覆土から平安時代の所産と思われる。

### H-33号住居跡セクション

- 1 黒褐 As-C・FP10%、棕色粒・炭化物ブロック若干含。
- 2 黒褐 As-C・FP・棕色粒若干含。粘質土。
- 3 前褐 棕色粒若干含。堅朝落土。

## VII その他の構造と出土遺物

### H-34号住居跡 (Fig.44 PL.15)

**位置** 21トレンチ X145、S 36・37グリッド 主軸方向 N-80°-E 形状等 西辺部分を調査した。東西(1.85)m、南北4.52m、現壁高43.0cmを測る。周溝 北西隅から南西隅の壁際に断続的に設けられる。周溝幅は広いところで15cm、深さは5cmを測る。床面 中央から南方に貼床の堅密面が残る。出土遺物 床面から土師器小型甕が検出された。  
**時期** 出土した遺物から8世紀代と思われる。

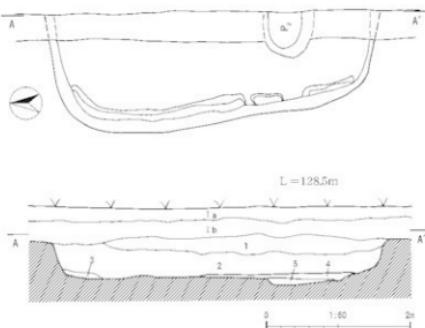
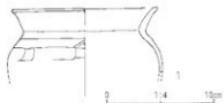


Fig.44 H-34号住居跡・出土遺物

Tab.13 H-34号住居跡出土遺物観察表

No.	器種名	出土 部位	①底径 ②底厚 ③底径 ④底厚	①底土 ②焼成 ③色調 ④道密度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	土師器 甕	床面 ③—	①(13.4) ②(6.0)	①中軟 ②良好 ③橙 ④C線部1/2	口縁部外反。肩部丸く凸出。器内や薄い。口縁部横無で。肩部 外縁横位置削り。	6・7	

### H-35号住居跡 (Fig.45)

**位置** 32トレンチ X140、S 102グリッド 主軸方向 N-88°-E 形状等 南東隅を調査した。東西(1.45)m、南北(1.60)m、現壁高38.5cmを測る。面積 (0.85)m<sup>2</sup> 空 東壁の南よりに付設される。範囲のみ確認した。



Fig.45 H-35号住居跡・出土遺物

Tab.14 H-35号住居跡出土遺物観察表

N	器種名	出土 場所	①口径 ③口径 ②高さ	④底面 ⑤底面 ⑥底面	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	須恵器 環	覆土 ③(6.0)	①(13.5) ②3.8 ①中粒 ②縦元縫 ③オーリー黒 ④1/4	底部若干上げ底。底部ハの字状に外傾。口縁部外反する。縦縫整形。口縁部回転無。底部回転無切り。	1		
2	羽 蓋	覆土 ③—	①— ②— ③中粒 ②陶化粧 ③にい 黄褐色口縁部片	口縁部内傾し、口沿部でわざずに外唇する。口沿部内傾。脚部断面三角形。ほぼ水平に突出する。口縁部～脚部下回転無。脚部内窓。つくりやや緩。脚部や下向き、断面窓内薄い。口縁部～脚部直下回転無。	7		
3	羽 蓋	覆土 ③—	①— ②— ③中粒 黄褐色口縁部片	つくりやや緩。脚部や下向き、断面窓内薄い。口縁部～脚部直下回転無。	6		

重複 H-36と重複するが、本住居跡のほうが新しい。 出土遺物 須恵器と羽蓋を検出した。 時期 出土遺物から、10世紀後半代とみられる。



Fig.46 H-36号住居跡・出土遺物(1)

H-36号住居跡 (Fig.46・47 PL.15)

位置 32トレンチ X140、S102・103グリッド 主軸方向 N-92°-E 形状等 南側を調査した。東西(3.31)m、南北(6.50)m、現壁高89.5cm。面積 (23.20)m<sup>2</sup> 床面 安定した平坦面。遺未検出 重複 H-35と重複するが、本住居のほうが古い 出土遺物 土師器環・甕、須恵器環・高杯・小型甕・甕、大甕などが出土し、部分的な調査面積から比較的多くの出土遺物があつた。 時期 6世紀代後半と思われる。

H-36号住居跡セクション

- 1 唐褐 As-C-FP 7%、灰化物・焼土・黄褐色粒・ブロック若干合。
- 2 唐褐 烧土塊・黄褐色ブロック合。
- 3 唐褐 黄褐色ブロック多、灰化物・焼土若干合。
- 4 唐褐 As-C-FP10%、黄褐色粒・ブロック、灰化物多。人為土。
- 5 黒褐 As-C・FP 若干。黄褐色粒・ブロック、灰化物合。
- 6 黒褐 As-C・FP 若干。土質4に似。
- 7 唐褐 6より褐色味。土質に似。
- 8 唐褐 As-C・FP・焼土粒・黄褐色粒・ブロック若干合。
- 9 黒褐 灰化物や多。黄褐色粒・ブロック、焼土粒・灰化物若干合。
- 10 唐褐 As-C・FP 若干。黄褐色粒・ブロック、焼土粒・灰化物若干合。
- 11 黒褐 As-C・FP 少。黄褐色粒・ブロック若干合。

VII その他の遺構と出土遺物

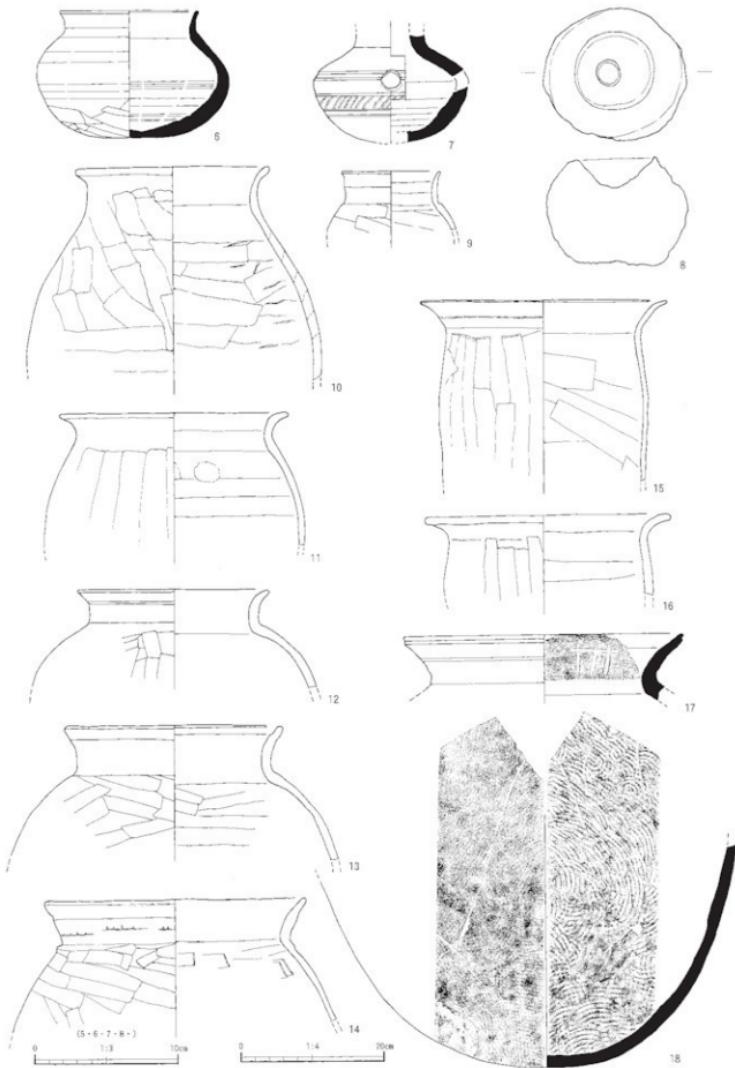


Fig.47 H-36号住居跡出土遺物(2)

Tab.15 H-36号住居跡出土遺物觀察表

筋膜名	部位名	原形	口徑	幅	厚さ	内腔構造	筋膜成形範囲	筋膜の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1 皮膚筋膜	床面	(31.17)	④(2.4)	①(1.6)	②(0.6)	③(0.6)	④(0.6)	底部一部屈曲。口縫部外側へ開く。口縫部変換点に若干稜形。口縫部→内腔側削り。底部一帯削除。	31	
2 皮膚筋膜	腹上	(32.21)	④(2.4)	①(1.6)	②(0.6)	③(0.6)	④(0.6)	底部一部屈曲。口縫部直立立体。口縫部変換点に若干稜形。口縫部→内腔側削り。底部一部削除。	24	
3 頭頸筋膜	腹上	(32.2)	④(2.4)	①(相)	②(0.6)	③(0.6)	④(0.6)	底部一部屈曲。口縫部変換点に棱。口縫部内側斜す。口縫部→内腔側削り。底部一帯削除。	42	
4 頭頸筋膜	腹上	(31.10) (31.18)	②(11.6) ③(11.6)	①(相)	②(0.6)	③(0.6)	④(0.6)	底部一部屈曲。口縫部直立立体。口縫部変換点に若干稜形。口縫部→内腔側削り。底部一帯削除。	43	
5 頭頸筋膜	腹上	①(—)	②(—)	①(相)	②(0.6)	③(0.6)	④(半分以上)	平底気味の底部→部材綱。口縫部は頭部から直立気味。底部削除。内腔側削り。	39	
6 頭頸筋膜	腹上	(30.95)	④(2.8)	①(半)	②(0.6)	③(0.6)	④(0.6)	やや平底気味の底部から口縫部は直立立体。底部一部下半に削り。綫維整形。	26	
7 頭頸筋膜	腹上	(31.7)	④(2.8)	①(相)	②(0.6)	③(0.6)	④(半分以上)	底部削除。内腔側削り。	41	
8 石質品筋膜	腹上	⑦(5.3×9.6×5.1)	重量420g	④(2.6)	④(2.6)	④(2.6)	④(2.6)	面部に深さ2cmの横筋状凹みを穿つ。角閃石安山岩。	34	
9 皮膚筋膜	腹上	(9.0)	④(2.5)	①(相)	②(0.6)	③(0.6)	④(0.6)	直立する頭部から口縫部をやや丸氣味として外反する。体部上位削除。	7	
10 皮膚筋膜	腹上	(17.8)	④(19.5)	①(相)	②(0.6)	③(0.6)	④(0.6)	体部下位2箇所。頭部は直立気味とし、口縫部を玉緑状として外反する。体部中位は斜位。上方は斜位。体部内側は横位の混在。	5	
11 皮膚筋膜	腹上	(26.6)	④(12.12)	①(相)	②(0.6)	③(0.6)	④(0.6)	直立気味に内側す。体部から頭部に直立氣味。口縫部を水平気味に傾く。	25	
12 皮膚筋膜	床面	(17.6)	④(8.8)	①(相)	②(0.6)	③(0.6)	④(0.6)	肩背の体部から頭部は直立。直立し、口縫部を外反させる。体部上位削除。斜位の混在。	23	
13 皮膚筋膜	床面	(20.20)	④(12.13)	①(相)	②(0.6)	③(0.6)	④(1.5)	蝶形の体部上位から頭部は直立気味とし、口縫部を内両させせる。体部斜位部、内側削り・斜位の混在。	21	
14 皮膚筋膜	床面	(24.40)	④(11.0)	①(相)	②(0.6)	③(0.6)	④(1.6)	体部から下の体部に横筋部から屈曲せず、口縫部をやや丸氣味とする。体部頭部は横位と斜位の混在。	37+44	
15 皮膚筋膜	床面	(22.24)	④(16.5)	①(相)	②(0.6)	③(0.6)	④(1.6)	直立気味の体部から口縫部は大きめ外反して開く。体部外側は縫合。内側は横位の混在。	21	
16 皮膚筋膜	腹上	(22.7)	④(7.7)	①(相)	②(0.6)	③(0.6)	④(1.4)	直立気味の体部→口縫部は水平気味に開く。体部上位は横位の混在。	38	
17 皮膚筋膜	腹上	(25.7)	④(6.2)	①(相)	②(0.6)	③(0.6)	④(1.4)	多くの体位に屈曲する口縫部。口縫部頭部に辺縫を繋ぐ。口縫部内側に十箇所から二ヶ記載。	40	
18 皮膚筋膜	床面	(—)	④(29.0)	①(相)	②(0.6)	③(0.6)	④(0.6)	丸の形の底部→体部半位が残存。外側平行4き。内側は青海波文の当り。下垂。	32	

H-37号住居跡 (Fig.48・49 PL. 7)

位置 28トレント X137・138、S 91・92グリッド 主軸方向 N-67°E 形状等 南西部分を調査した。方形状を呈すると思われる。東西(1.84)m、南北(4.32)m、現壁高55.5cmを測る。面積 (4.53)m<sup>2</sup> 床面 平坦。

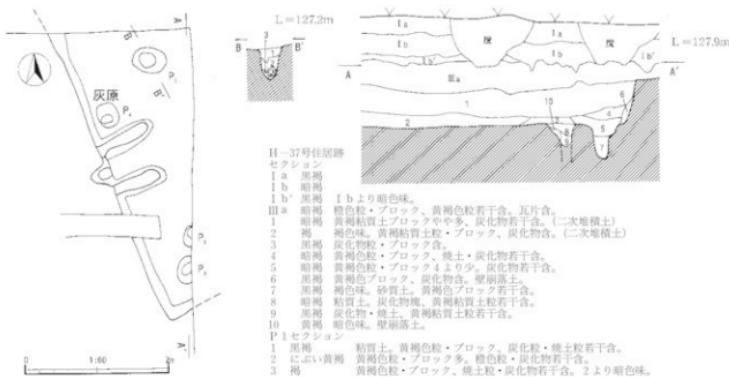


Fig.48 H-37号住居跡

#### VII その他の構造と出土遺物

竈前面部は著しく堅い。 竈 西壁に付設される。焚口、燃焼部は住居内に張り出し、煙道部は僅かに壁外にでる。焚口部と思われる箇所では方形状に加工された凝灰岩が検出された。被熱を受けているため、天井石として使用されたものか。両袖は黄褐色粘土により構築されている。全長110cm、最大幅92cm、焚口部幅32cm、主軸方向はN-115°-Wを測る。 貯蔵穴 竈右袖脇に設けられ、上面に灰が堆積する。 出土遺物 P 1 から土師器壺が出土した。この壺は角蹠の上に乗った状態で検出された。また覆土中より土師器、瓦が出土した。 時期 6世紀後半と思われる。

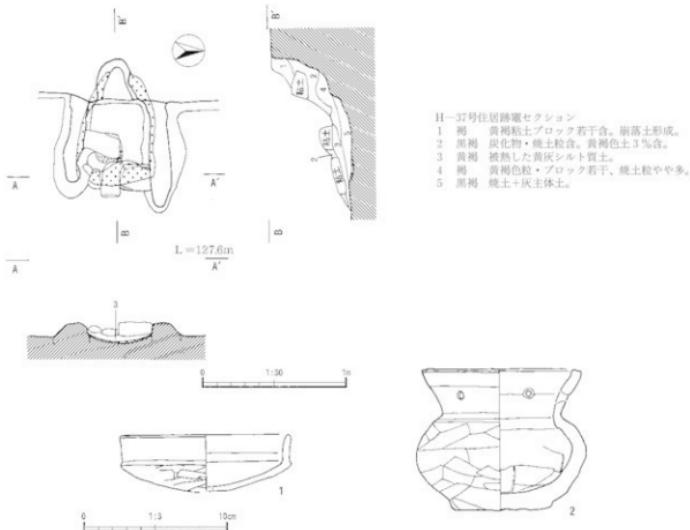


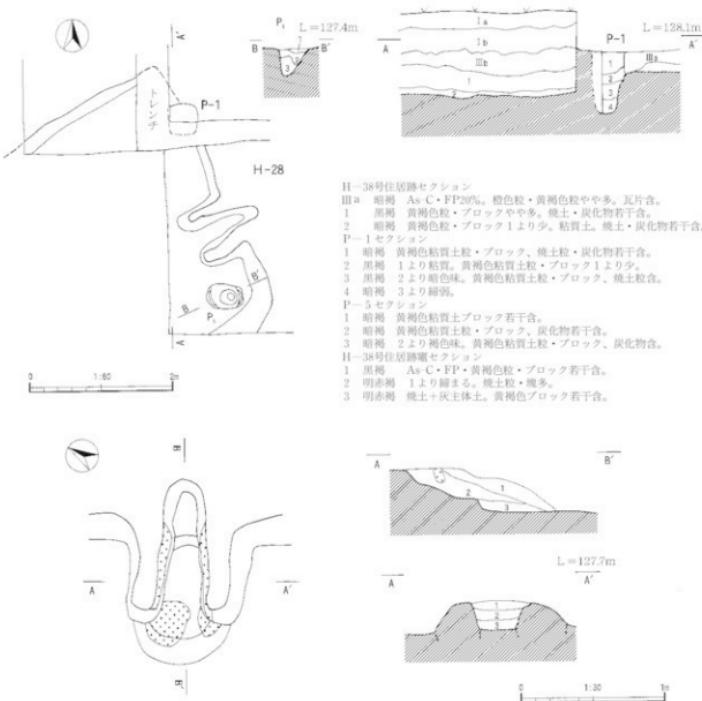
Fig.49 H-37号住居跡・出土遺物

Tab.16 H-37号住居跡出土遺物観察表

No.	器種名	出土 場所	①口径 ②深さ ③底径	④土質 ⑤焼成 ⑥色調 ⑦底面	器種の特徴・形態・調整技術	登録番号	備考
1	土師器 壺	竈内	①(11.7) ②(3.9) ③—	①中粒 ②酸化焰 ③褐 ④(5段)	底部～体部頸く青曲。口縁部直立気味。口縁部変換点に棱形成。 肌部～体部鋸削り。口縁部～内面横撫で。	5	
2	土師器 小型壺	P 1	①(11.0) ②(9.7) ③(6.5)	①中粒 ②酸化焰 ③に赤褐色 ④完形	体部は中位に最大径を有する扁平な球形。口縁部は外反して開き、 口端部に浅い沈殿が頼る。口縁部に穿孔が二箇所対に設けられる。	P 4-1	

H-38号住居跡 (Fig.50 PL. 7)

位置 28トレンチ X137・138、S 91・92グリッド 主軸方向 N-66°-E 形状等 東側と北側部分を調査した。隅丸方形形状を呈すると思われる。東西(2.27)m、南北(3.41)m、現壁高36cmを測る。 面積 (4.25)m<sup>2</sup> 床面 平坦。 竈 東壁やや南寄りに付設され、褐色粘土質を構築材としている。焚口部から燃焼部にかけて窪み、焚口部に焼土の分布が顕著にみられた。全長108cm、最大幅94cm、焚口部幅22cm、主軸方向N-65°-Eを測る。 貯蔵穴 南東隅で貯蔵穴 (P 5) が確認された。 重複 北側で本住居跡よりも新しいP 1と重複する。 出土遺物 貯蔵穴付近の床面で土師器が出土した。 時期 7世紀頃と思われる。



H-39号住居跡 (Fig.51 PL.12)

位置 22トレンチ X140、S75~77グリッド 主軸方向 N-64°E 形状等 東西(5.67)m、南北(8.24)m、現壁高62.5cmを測る。平成19年度14トレンチで確認された遺構(D 8)と関係する可能性がある。面積(17.53)m<sup>2</sup> 床面 ほぼ平坦。柱穴 重複するP 1とP 2を検出。P 1からP 2に建替えられていると考えられる。竈・貯蔵穴 未検出 重複 本住居跡より新しい土坑が3基重複する。北辺で長方形土坑(D-2203)、中央部分に瓦片を多量に含む平安期に形成された土坑(D-2206)、南方の壁で平安期の鍛冶炉(D-2205)がある。

出土遺物 土師器の壊が出上した。時期 7世紀頃と思われる。

Tab.17 H-39号住居跡出土遺物観察表

No.	遺種名	出土 部位	①径 寸	②深 度	③色調	④地層	遺種の特徴・整形・調製技術		登録番号	備考
							⑤胎土	⑥焼成		
1	土師器 壊	床面	①(11.7) ②(3.9) ③—	①中粒 ②陶化焰 ③—	底部～体部内窓。口縁部立気孔。口縁部変換点に梭形成。底部～体部窪凹。口縁部外反して開く。口縁部変換点に鋭い梭形成。底部～体部窪凹。口縁部～内側横撫。				234	
2	土師器 壊	不明	①(12.0) ②(3.3) ③—	①中粒 ②陶化焰 ③—	底部～体部窪凹。口縁部外反して開く。口縁部変換点に鋭い梭形成。底部～体部窪凹。口縁部～内側横撫。					

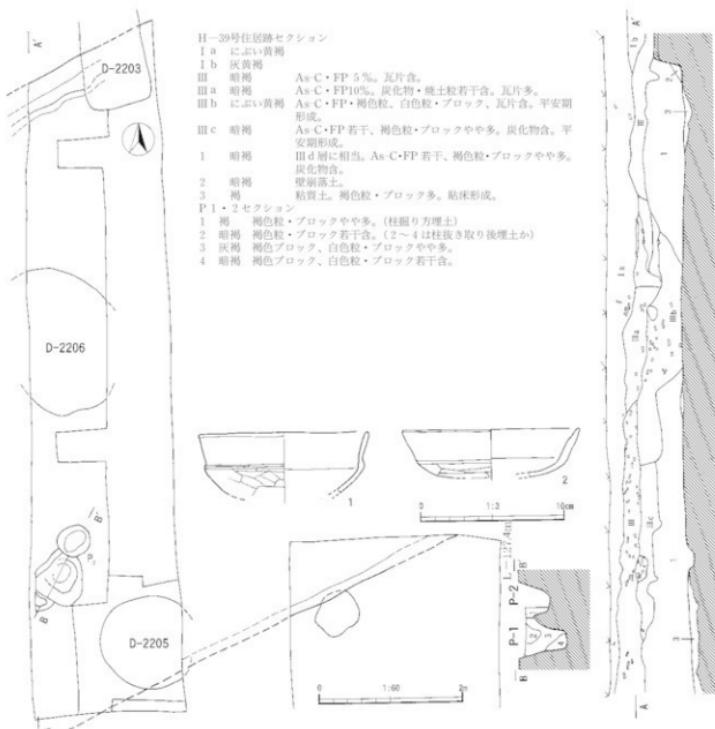


Fig.51 H-39号住居跡・出土遺物

## H-40号住居跡 (Fig.52 PL. 3)

**位置** 25トレンチ X150, S77-78グリッド **主軸方向** N-80°E **形状等** 住居の中央付近を南北に渡って調査した。現状で東西(1.50)m、南北3.80m、現壁高31.0cmを測る。 **面積** (6.43)m<sup>2</sup> **床面** ほぼ平坦。 **覆土** 住居跡の南辺のセクションで、塔創建時期の整地層 (Fig.52の15~19層) と、塔修復時の整地層 (Fig.52の9~14層) が確認される。 **出土遺物** 第7次発掘調査では、器形を推定できる5個体を掲載。25トレンチで掲載した土師器壺 (Fig.56-1) も本住居跡に伴うものと考えられる。 **時期** 塔よりも古く、6世紀後半~7世紀前半と考えられる。 **備考** 昭和56年の第7次発掘調査 H-29号住居跡の再調査。参考文献「山王庵寺跡第7次発掘調査報告書」1982.3 前橋市教育委員会

## 2 掘立柱建物跡

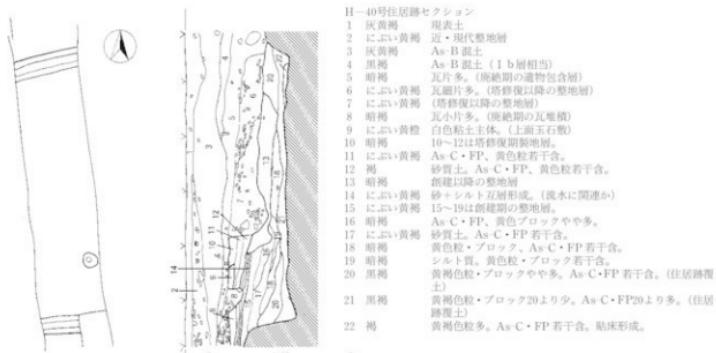


Fig.52 H-40号住居跡

## 2 掘立柱建物跡

B-4号掘立柱建物跡 (30トレンチ) (Fig.53 PL.8)

位置 30トレンチ 主軸方向 N-27°W 形状等 3個の

- B-4号掘立柱建物跡セクション  
 P 1  
 1 黒褐色 黄褐色粒・ブロック、炭化物・焼土、灰白色シルト粒含。  
 2 黒褐色 粉色粒若干含。  
 3 細粒 壁面崩落土。粘質土主体。  
 4 黑褐色 粘質土。橙色粒・灰白色シルト粒若干含。  
 5 黑褐色 烧土粒・灰白色シルト粒若干含。  
 P 3  
 1 黑褐色 黄褐色粘質土・ブロック若干含。  
 2 黑褐色 1より細。黄褐色粘質土粒・ブロック1より少。  
 3 剥離 2より粗。黄褐色粘質土・ブロックやや多。(人為的理土か)  
 P 4  
 1 剥離 剥離色粘質土粒・ブロック若干含。  
 2 剥離 粘質土。黄褐色粘質土・ブロック・焼土粒若干含。  
 3 剥離 黒色味。褐色粘質土・ブロック若干含。

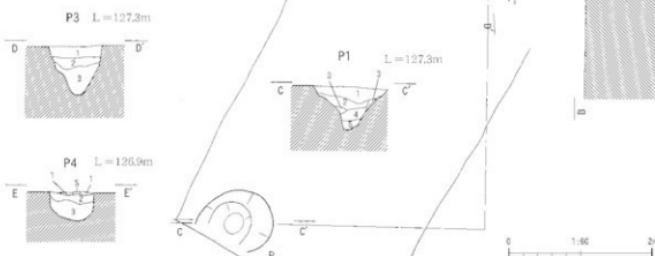


Fig.53 B-4号掘立柱建物跡

## VII その他の遺構と出土遺物

柱穴を確認し、P 3 と P 4 が東側の桁行柱列に相当するもので、柱間は3.6m前後を測る。 時期 O—1号土坑より古く、創建時から奈良時代と考えられる。

### 3 その他の出土遺物

21トレンチ (Fig.54)

調査区の中央から北方に平安時代10世紀以降の竪穴住居跡5軒を検出し、その南方から出土した須恵器耳皿(1)、須恵器高台椀(2～4・6)、高台付瓶の底部に尖孔を施したもの(5)を図示した。

Fig.54 21トレンチ出土遺物

Tab.18 21トレンチ出土遺物観察表

No.	器種名	出土 位置 緯絃	①口径 ②縦径	③胎土 ④焼成度	器種の特徴・型式・調整技術	登録番号	備考
1	須恵器 耳皿	①— ③(4,6)	②(2,7)	①細緻 ②厚火焰 ③灰白 ④4段	須高の浅い环を整形後、口縁部の両端を内側させて耳皿とする。 底部回転未切り未調整。		
2	須恵器 高台椀	①(11,6) ③—	②(3,7)	①中等 ②厚火焰 ③灰白 ④	体部下平に高台との接合部。高台剥がれる。底部回転未切り未調整。		
3	須恵器 高台椀	①— ③(5,2)	②(3,4)	①中等 ②厚火焰 ③灰白 ④	短い台形状の高台を付し、体部は開き気味に内凹する。底部回転未切り未調整。		
4	須恵器 高台椀	①— ③(6,0)	②(2,6)	①中等 ②厚火焰 ③灰白 ④	台形状の高台を付す。底部回転未切り未調整。		
5	土師質 高台壺	①— ③—	②—	①細緻 ②酸化焰 ③灰白 ④未調	高台が剥がれ、欠損。底面に5mm程の突起が施される。瓶に転用か。		
6	須恵器 高台椀	①32.5 ③6.2	②4.9	①粗緻 ②厚火焰 ③灰白 ④4段未完形	短い台形状の高台を縁に付し、体部は開き気味に内凹し、口縁部はやや外反して開く。底部回転未切り未調整。	D-2102 4	
7	須恵器 高台椀	①— ③(7,4)	②(3,4)	①粗緻 ②厚火焰 ③灰白 ④底部2.3段	断面三角形の高台を縁に付し、体部は直線的に開く。底部回転未切り未調整。	グリット	

80

### 3 その他の出土遺物

#### 22トレンチ (Fig.55)

主なものは、D-1号土坑出土の土師器壺（1）、D-2号土坑出土の土師器壺（2）、D-5号土坑出土の土師器壺（3）、土師器の脚部（4）、角閃石安山岩の切石（5・6）、D-7号土坑出土の砥石（7）、整地面出土の土師器・須恵器壺（8～12）・土師器小型壺（13）、瓦を転用した円盤（14）を図示した。

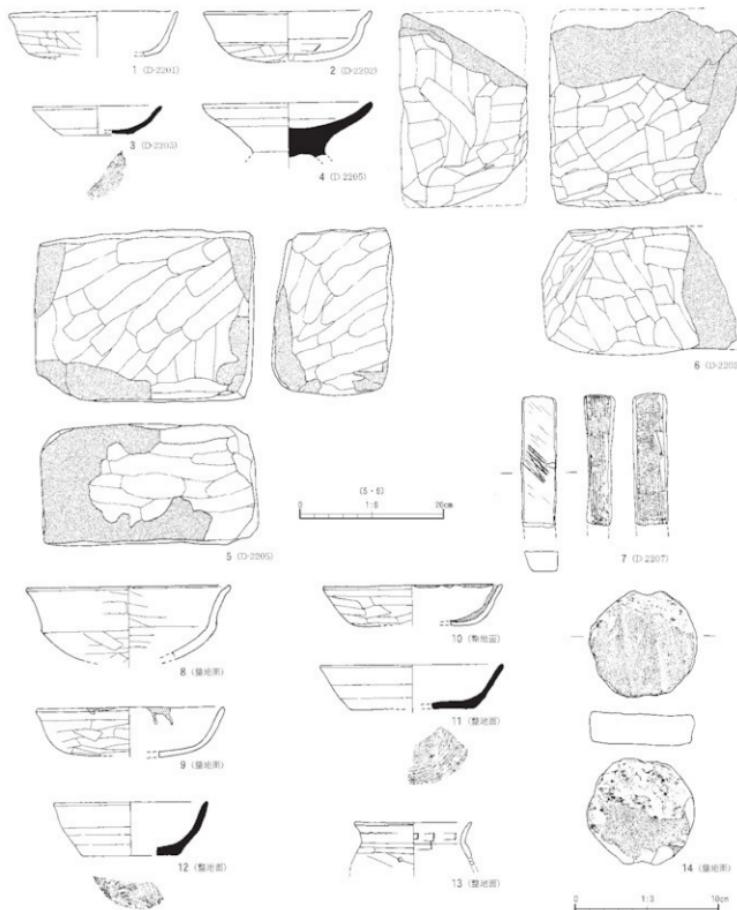


Fig.55 22トレンチ出土遺物

## VI その他の構造と出土遺物

Tab.19 22トレンチ出土遺物観察表

No.	遺種名	出土 層位	①口径 ②底径	②高さ	①軸土 ②焼成 ③色調 ④過存度	遺種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	土師器 環	覆土 ③—	①(9.2) ②(3.1)	①中粒 ②酸化焰 ③にい・黄褐色 ④1/4残	平底～体部は直立気味に内凹し、口縁部でやや外反する。底部から口縁部下まで削り取り、口縁～内底横削で。	D-2201		
2	土師器 環	覆土 ③—	①(11.4) ②(3.4)	①中粒 ②酸化焰 ③橙 ④1/4残	縦やかに内凹する底部から体部は内凹し、口縁部が外反して開く。口縁部変点に削り跡形成。	D-2202 12		
3	土師器 環	覆土 ③—	①(9.0) ②(1.9)	①中粒 ②酸化焰 ③橙 ④1/4残	体部は直線的に開く。底部回転系切り未調整。	D-2205 16		
4	土師器 高台杯	覆土 ③—	①(11.6) ②(3.5)	①中粒 ②酸化焰 ③に よい・黄褐色 ④坏部1/2残	縦やかに内凹する体部で、高台を欠く。	D-2205 84		
5	石製品 切 石	覆土 最大長30.5 最大幅24 最大厚16.9			角閃石安山岩。最大幅4.8cm前後で断続工具により平坦面を作り出 す。	D-2205		
6	石製品 切 石	覆土 ③—			角閃石安山岩。	D-2205		
7	石製品 鏡 台	覆土 ③—	最大長8.9 最大幅2.3 最大厚1.8 重さ37g		細長い棒状の四角形を呈し、三面に断続工具による整形痕が残り、二面を使用。近世の所産と考えられる。	D-2207 7		
8	土師器 环	覆土 ③—	①(14.0) ②(5.1)	①中粒 ②酸化焰 ③橙 ④C縫合1/2残	丸底～口縁部は直立し、口唇部を短く外反させる。口縁部変換点に削り跡形成。底部削り取り。口縁部内底横削で。	D-2207 172		
9	土師器 环	覆土 ③—	①(14.0) ②(5.1)	①中粒 ②酸化焰 ③橙 ④1/7残	平底気味の底部から丸みを呈して体部が直立気味に立ち上がる。底面～口縁部下まで削り調整。	豊地圖 76		
10	土師器 环	覆土 ③—			9と同一個体の可能性あり、口唇部に油滴状の付着物。	豊地圖 62		
11	須恵器 环	覆土 ③(8.5)	①(12.6) ②(3.0)	①中粒 ②慶元焰 ③灰白 ④1/5残	体部は直線的に外反する。底部回転系切り未調整。	豊地圖 119		
12	土師器 环	覆土 ③(6.6)	①(10.4) ②(3.7)	①中粒 ②酸化焰 ③にい・橙 ④1/3残	体部は直立から縦線的に開き、中位から直立気味に内凹する。底面削り取り未調整。	豊地圖 8		
13	土師器 小型壺	覆土 ③—	①(11.0) ②(4.0)	①中粒 ②酸化焰 ③に よい・赤褐色 ④C縫合1/4残	体部上位に4mm前後の穿孔あり。	豊地圖 236		
14	土製品 円 盤	覆土 ③—	直径7.4×7.3 最大厚2.1 重さ110g		平瓦を転用。側面は研磨される。	豊地圖		

25トレンチ (Fig.56)

H-40号住居跡に伴ったと考えられる土師器環 (1)、塔の整地白色粘土層から出土した富壽神寶 2点 (2・3) を図示した。

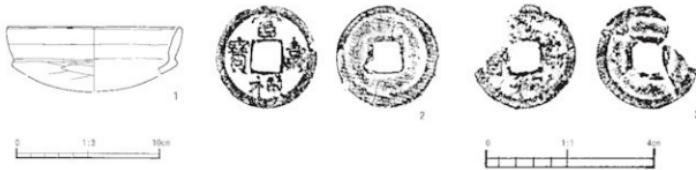


Fig.56 25トレンチ出土遺物

Tab.20 25トレンチ出土遺物観察表

No.	遺種名	出土 層位	①口径 ②底径	②高さ	①軸土 ②焼成 ③色調 ④過存度	遺種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	土 師 器 環	板塗 面 ③—	①(12.6) ②(3.2)	①細粒 ②酸化焰 ③—	浅い丸底の底部から口縁部は直立気味に内凹する。口縁部変換点には明瞭な縫を施す。体部外側削り取り。			
2	金属製品 古 銭					富壽神寶 (初唐 弘仁九年)	30-①	
3	金属製品 古 銭					富壽神寶 (初唐 弘仁九年)	30-②	

27トレンチ (Fig.57)

主なものは、D-4号土坑出土の須恵器蓋 (1)、グリット出土の土師器環 (2～4)、羽口 (5) を図示した。

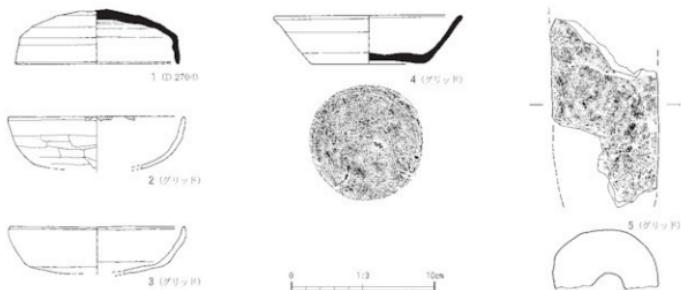


Fig.57 27トレンチ出土遺物

Tab.21 27トレンチ出土遺物観察表

No.	器種名	出土 層位	①寸 幅	②高 さ	③底 部形	④胎土 ⑤色調 ⑥道存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	須恵器 蓋	覆土	①11.2	②3.6	③—	①中粒 ②深元板 ③灰白 ④整形	天井部は回転旋削り。	D-2704 1	
2	土師器 壺	覆土	①(12.0)	②(3.5)	③—	①中粒 ②深元板 ③橙 ④5残	平底成形の底部～体部は内面で開く。口唇部に油カス付着。行 明面として使用か。底部～体部上位に旋削り。口縁～内面横削で。	グリット 248	
3	土師器 杯	覆土	①(12.0)	②(3.2)	③—	①中粒 ②陶化焰 ③にらむ ④1.6%		グリット 87	
4	須恵器 壺	覆土	①(12.8)	②(3.3)	③ 7.9	①中粒 ②慶元板 ③灰白 ④体部2.3次	やや上げ直しの底部～体部は直線的に開く。底部回転糸切り未調整。 体部～内面横削で。	グリット 329	
5	土製品 羽	覆土	往後、孔径2.2	残存長さ12.9	—	①細粒 ②陶化焰 ③灰白 ④—	透風口先端は断続的に融解し、先端部は灰色を呈する。部分的に溶 が付着。	グリット 42	

30トレンチ (Fig.58・59)

調査区中央やや北で検出された廐棄坑から出土した須恵器壺(1)、須恵器高台皿(2)、須恵器高台碗(3)、鉄滓の付着した須恵器壺(4)、須恵器大甕(5)、近世戸戸から出土した紡錘車(6)とグリット出土の紡錘車(7)を図示した。



Fig.58 30トレンチ出土遺物(1)

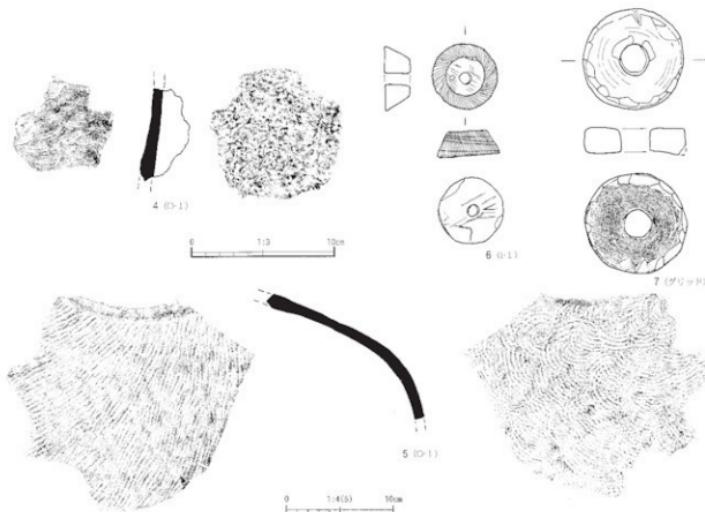


Fig.59 30トレンチ出土遺物(2)

Tab.22 30トレンチ出土遺物観察表

No.	器種名	出土 層位	①口径 ②断面	③脚窓 ④色調 ⑤保存度	器種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
1	須恵器 壊	擾乱土 (3)(9.4)	①(11.6) ②(3.6)	③脚窓 ④黄 ⑤1/3弱	底部中央がやや突出気味～体部は直立気味とする。体部に窓が付着。底部回転式削り。体部～内面楕円で。		
2	須恵器 高台型	擾乱土 (3)(6.6)	①(12.9) ②2.5	③脚窓 ④黄 ⑤1/3弱	断面三角形の高台を確認に付す。体部は大きく外反して開口肩部は水平気味。体部～内面楕円無。底部回転式切り。		
3	須恵器 高台型	擾乱土 (3)	①— ②(2.4)	③脚窓 ④黄 ⑤1/3弱	断面全体が磨耗し、高台が崩落する。底部回転式切り。		
4	須恵器 壊	擾乱土 (3)	①— ②—	③脚窓 ④黄 ⑤—	体部外側に鉄鋸がこみもりと付着する。内面には青海波の当て目痕跡。		
5	須恵器 壊	擾乱土 (3)	①— ②—	③脚窓 ④黄 ⑤—	脚部結合部～肩部、体部外側は平行叩き。内面には同心円状の当て目痕跡。		
6	石製品 砧鉢兼	覆土 最大径4.4 孔径7mm 厚さ2.7 重さ52g	—	—	軽面に圓形を呈する。側面は削位の加工痕跡が明瞭に残る。研磨片剥離。	I-1	
7	石製品 砧鉢兼	覆土 径6.9×6.9 孔径2.1 厚さ1.8 重さ95g	—	—	円板状を呈する。片面の平坦部は使用による摩滅感が頗著である。	グリット	

31トレンチ (Fig.60)

土師器壊 (1～3)、須恵器壊 (4・5)、石製品として角閃石安山岩の加工品 (6・11・12)、緑泥片岩の加工品 (7)、瓦片を使用した円盤 (8)、グリット出土の砥石 (9・10) を図示した。

32トレンチ (Fig.61)

包含層出土の土師器壊 (1)、グリット出土の須恵器壊 (2)、表土から出土した砥石 (3) を図示した。

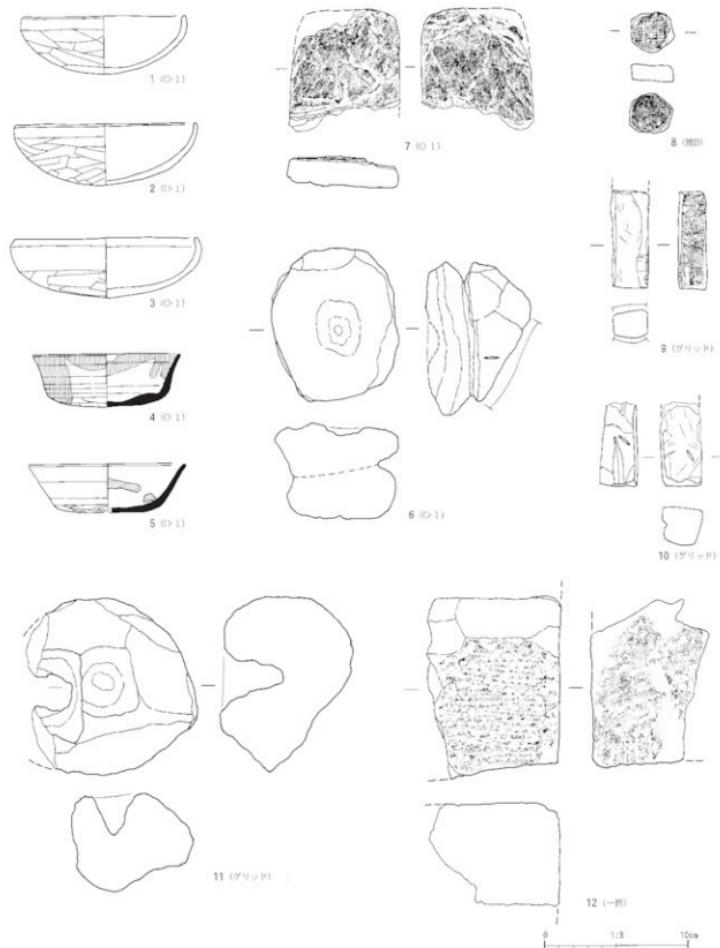


Fig.60 31トレンチ出土遺物

Tab.23 31トレンチ出土遺物観察表

No.	遺種名	出土 層位	①CT接 ③織目		②調真 ④焼成度		遺種の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考
			①CT接	③織目	②調真	④焼成度			
1	土加筋 杯	包合層	①(11.1) ③-	②(4.0) -	①筋土 ③織目	②焼成 ④1/4弱	丸底を呈し、口縁部は直立気味。	7	

VII その他の構造と出土遺物

No.	器種名	出土 場所	①口径 ②底径	③高さ	④断土 ⑤赤色調 ⑥保存度	断面の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考	
2	土師器 杯	包含層	①12.4 ②—	③4.2	④中粒 ⑤氧化焰 ⑥—	やや深い丸底を呈し、口縁部は直立気味。	224		
3	土師器 杯	包含層	①(12.3) ②—	③4.0	④中粒 ⑤氧化焰 ⑥—	やや平底状を呈し、口縁部は内凹する。	588		
4	須恵器 杯	包含層	①10.1 ②—	③3.6	④中粒 ⑤深元焰 ⑥—	内外面にV字状の付着物、底部へ内凹横撫で。底部手持ち足 附り。	86		
5	須恵器 杯	包含層	①(10.8) ②—	③3.3	④中粒 ⑤深元焰 ⑥—	内面にスス状の付着物。体部へ内面；横撫で。底部手持ち足附 り。	202		
6	石製品 不 明	包含層	長さ16.4 幅8.6	高さ7.2	重さ320g	角閃石安山岩。系帯状の括れを施し、平坦面には浅いV字を設け る。一部を研磨してスレーブ状とする。			
7	石製品 不 明	包含層	長さ8.3(0)	幅7.5	厚さ2.0	重さ160g	緑泥片岩。熱熱を受け、部分的に赤色に変色。細長い板状を 呈すると考えられ、残存する鋼鉄は丸く加工される。温石の一 部か？	237	
8	石製品 円 盤	複乱土	径2.9×2.7	厚さ1.1	重さ12.0g	布目瓦を転用し、円盤状に加工。側面は打撃による調整。			
9	石製品 砥 石	包含層	長さ6.7(0)	幅2.2	厚さ1.8	重さ56g	細長いV字形の構造を呈し、輪廓面を砥石面として使用する。 他の側面は削除跡。角の一部に刀紙痕。近世土器の所産。	グリット	
10	石製品 砥 石	覆土	長さ5.7(0)	幅2.8	厚さ2.6	重さ66g	砂岩。片側小口端を残し、4面に使用形が残り、3面が被熱に より変色する。	グリット	
11	石製品 四 石	覆土	径12.0×11.8	高さ8.7	重さ560g	角閃石安山岩。中央部に深くV字状に凹を穿ち、その一部に接 して貫通した孔がある。	グリット		
12	石製品 不 明	不明				角閃石安山岩。長方体状の加工製品の角部と考えら。被熱に焦 色に変化。側面に斜状・盤状工具等の調整痕が残る。鐵等の機 械材に転用したものか。	一括		



Fig.61 32トレンチ出土遺物

Tab.24 32トレンチ出土遺物観察表

No.	器種名	出土 場所	①口径 ②底径	③高さ	④断土 ⑤赤色調 ⑥保存度	断面の特徴・整形・調整技術	登録番号	備考	
1	土師器 杯	包含層	①(11.4) ②—	③(3.7)	④中粒 ⑤氧化焰 ⑥—	浅い丸底の底部から口縁部は直立気味とし、口唇部を外反させ る。口縁部変形には削りV字を設ける。			
2	須恵器 杯	土	①— ②(7.0)	③(2.0)	④中粒 ⑤深元焰 ⑥—	底部から体部の立ち上がり部分に回転削り調節、その後に縁削 りにより井干のマーク記号を施す。			
3	石製品 砥	土	長さ6.6(0)	幅3.9	厚さ2.1	重さ77.5g	粘板岩。やや錐状を呈する。小口。4側面を使用している。		

## VIII まとめ

20年度の調査目的是、①塔跡の範囲確認、②南面回廊の確認、③金堂北側建物跡（B—2号建物跡）の範囲確認、④寺城北・南辺の確認であった。まとめとして、これらの調査結果を整理し、若干の検討を加え今後の課題を明らかにしたい。

### 1 成果と課題

#### (1) 遺構

##### ①塔

**成果** 基壇外装の瓦積を確認した。これは塔基礎の芯より北側6.8mに位置することから、塔基壇の規模が一辺13.6mであることが判明した。塔基壇は掘り込み地業を伴い、基壇高は0.6m以上と推測される。また、心礎据え付け穴とみられる掘り込みや、環板旗の可能性が考えられる掘り込みなどが確認され、基壇の構造について多くの知見を得られた。基壇周囲は白色粘土と玉石敷により整地されている。7次調査では、この整地層下より富壽神寶・羅平水寶が9枚出土した。今回の調査でも富壽神寶が2枚出土していることから、塔基壇周囲の整地は9世紀以降のものと考えられる。瓦積基壇はこの整地と一連のものであることから、修造期の基壇と推測される。

**課題** 今回の調査により基壇規模や構造についてはある程度明らかとなつたが、四天柱などの柱位置を示す礎石や礎石据え付け跡などの遺構は検出するに至らず、塔建物の規模・構造については今後の課題となつた。塔跡が存在する日枝神社境内には、比較的遺構の残存状況が良好とみられ、今後平面的な発掘調査を行うことにより、これを明らかにできる可能性は高いと思われる。また、瓦積基壇以前の創建期の基壇についても今後の課題となつた。

##### ②南面回廊

**成果** 昨年度、金堂跡の南側で検出されたB—3号建物跡の地業版築土の範囲確認を行った結果、この建物が南面回廊であることが確定的となった。このライン上に南面回廊を復元した場合、回廊の南北規模（北面回廊北側柱～南面回廊南側柱）は平成19年度調査による93.6mより11.2m短く、82.4mとなつた。これにより、ほぼ正方形となる。

**課題** 建物については、今回の調査で礎石据え付け跡と思われる遺構が27トレンチから1ヶ所検出されたのみで、これが確実に南面回廊に伴うものかどうか判断するのは難しい。今後、延長線上でさらなる調査を行い、これを確認する必要がある。

##### ③金堂北側建物（B—2号）

**成果** 昨年度、金堂北側で検出されたB—2号建物跡の調査を行い、南北の地業範囲を把握することができた。建物の地業規模は昨年度調査と併せて南北7.7m、東西10.2m以上となり、東西棟の建物とみられる。また、地業の断ち割りを行ったところ、版築土中から柱受けのためと思われる円形の瓦敷きが2ヶ所で検出された。2ヶ所の瓦範囲の芯々を計ると約4.5m(15尺)となることから、梁行2間(柱間寸法7.5尺)の建物が想定される。

**課題** 今までの調査により、地業の南北および西側の範囲が明らかになったものの、東側範囲が課題として残つた。建物の性格としては、回廊内の建物であることから鐘楼もしくは経蔵の可能性が考えられる。ただ、鐘楼・経蔵は通常、南北棟であるが、B—2は東西棟の建物であるため鐘楼・経蔵としては変則的である。この建物の性格の解明のためには建物の東側範囲の確定と、対称となる回廊内東側の調査が必要である。

## ④寺域

今回、寺域の北側と南側でそれぞれ調査を行ったが、区画に関連する遺構を検出することはできなかった。今後は区画施設だけではなく、回廊外の諸施設（僧房・食堂・各種運営施設）の確認も視野に入れ、より広い範囲の調査を行う必要がある。

## (2) 出土瓦

**成果** 全体でコンテナバット150箱程度の瓦が出土した。南面回廊を調査したトレシチ（30・31トレシチ）からの出土が多かった。軒瓦では軒丸瓦114点、軒平瓦70点が出土し、軒丸瓦に1点新たな資料（XV式）が確認された。文字瓦では、「方光」押印瓦1点などを含め計45点確認された。



Fig.62 軒丸瓦XV式

## 2 鉄と関連する炉跡の検討

**遺構** 南北方向トレシチの最南端で検出。径124cm、深さ53cmほどの半地下式円形炉とみられるが未完掘。遺構掘込み面は第III層とみられるが、上面が削平されているとみられる。残存する壁高は35cmほどである。

炉内は大きく上下層に分かれる。上半部20cmほどの壁面は砂まじりの粘土で塗り固められ、強く焼けている。壁面は上方に開き気味に立つ傾向がみられる。下半部は壁面中央がやや膨らみをもつ形状に掘り込まれ、鍋底状を呈する。壁面には粘土の塗布は認められず、焼けてもない。

遺構内の覆土は短期間に埋まったものとみられ、水平状に堆積する。上半部埋土は暗黄褐色土で僅かにAs C、Hr FPの粒子を含む。遺物は瓦の小破片や僅かな鉄滓を出土する。下半部の埋土は暗褐色土であり締りがない。特に7層は20%の炭化物を含み、焼土も含む。特に埋土中に比較的大型の瓦片や角閃石安山岩の切り石がはさみ込まれている。とりわけ角閃石安山岩の切り石はすぐ南1.2mほどに北縁が想定される金堂の基壇化粧に使用されたとみられるもので、位置と併せて金堂の廐棄と本遺構の構築時期との関連を考える根拠を与えていている。

以上の状態からみて上半部が炉としての機能部分であったことは明らかで、図中6層上面に炉床が設けられたとみられる。下半部は炭化物や埋め込まれた瓦片や石の状況からみて除湿機能を意図したつくりとみられる。炉床も粘土で覆われていたとみられるが、廐棄の際、完全に壊されていた。

**遺物** 本遺構からの出土遺物は瓦片、梗石、鐵滓、土器である。瓦片は上層ほど小片で、周辺から流れ込んだものとみられる。最下層部分には丸瓦の2/3ほどの大きいものもあり、意図的なものを感じさせる。石は同様に下層のものほど大型で基壇化粧石は炉床面に据える形で発見された。

鐵滓の大きさは径5cm以下の小片で、2cm以下のものがほとんどである。この中にまじって鉄分の多い球状の滓や薄板、糸状の燃れの形状のものが注目される。

土器は図示した脚付甕の脚部、須恵器椀片のほかは注目すべきものもなく、時期は9世紀後半のものである。埋土と共に流入したものであろう。

**遺構の性格** 異常の所見から本遺構は鉄と関連する炉である。しかし、鉄づくりのいかなる段階に関連するものかは検討を要する。

遺構の構造・規模・出土遺物の状況からして製鍊か鋳造の炉の可能性が高い。製鍊炉としては規模は類するものの、炉床のつくり、出土遺物が異なる。排滓口への傾斜が炉床にみられないこと、鐵滓に大型のものが多く、流動層等は一切みられないことなど製鍊炉と認定するには無理がある。

鋳造炉については調査例が少なく、積極的な判断材料に欠ける。構造・規模・操業技術にて検討する。「天工開物」では炉は「中に釜のようで……炉の背後に管を通して送風し、炉の外側に口をつけて鉄を出す」とある。鋳

### 3 伽藍の検討

鉄を炉に投じ、高温で溶かし、湯口から取り出し、取瓶にとり鋳型に流し込む。

江戸時代のものであるが東北地方に「こしき炉」がある。上懶、銅懶、坩鉢の三部分が重なり、中央の銅懶で送風・過熱・生鉄を溶かし、下段の坩鉢に溜め、湯口を開き鋳型に流し込む手法である。この中の銅懶は送風・過熱・生鉄の溶解という機能をもち、前述の炉と同様な機能を持つ。規模も1mほどで、本遺構のものと共通している。

このようにみてくると、鉄滓量が少なく、小片のものが多いこと、修理の構造と内湾汽味に立つ形状など、古相をみせる。なお、送風孔の位置は削平された上部にあったものとみられる。鋳型に合わせて取瓶の数を調整すれば多少大型のものも作れたと思われる。

**時期と背景** 鋳造炉と想定したこの遺構は掘り込み面が第III層である。この層はHr-FP、As-C軽石の混土の黒褐色粘質土で奈良・平安時代の遺構が構築される土層である。この土層でも上層部分に造りつけられた本炉は平安時代のものとするのが妥当であろう。また、遺物の土器も9世紀末のものが埋土中に含まれることも矛盾しない。さらに金堂の化粧基壇に使用されていたとみられる切り石が布床部に取り込まれており、寺の衰微後の遺構であることを示している。

また、この時期は佐野鋳物師が河内の技術者の指導で成立したといふ伝承も残っている。事実、この時期は天明鋳物師が周辺地域に急速に勢力を拡大していった時期とみられ、遺物も残っている。

山王城地盤では放光寺の衰微後もこの地に昌楽寺がつくられたといふ伝承が伝えられている。そうした中で鋳造炉が築かれ、仏具や生活用品がつくられたとしても不自然ではない。

### 3 伽藍の検討

山王庵寺の主要伽藍について、これまでの調査で蓄積した情報を整理し、諸施設の配置・規模・造営時期等についてまとめておきたい。

#### (1) 建物の配置・規模について

これまでの調査をもとに、主要伽藍を復元したのがFig.64である。

**造営方位** 主要伽藍のなかで唯一柱位置が確認されている回廊建物の向きは、真北から1°30'西に傾くことから、この方位が山王庵寺伽藍の造営方位と推測される。

**塔** 今回の調査で、基壇の一辺が13.6mであることが判明した。建物の柱位置を示す遺構は塔心礎のみで、そのほかの礎石や礎石据え付け跡などは検出されていない。

**金堂** これまでの調査により東西22.0m、南北16.4m以上の基壇規模であることが判明し、南側を除く東・西・北の三辺については範囲がほぼつかめたといって良い。建物については、柱位置を示す遺構は検出されておらず、

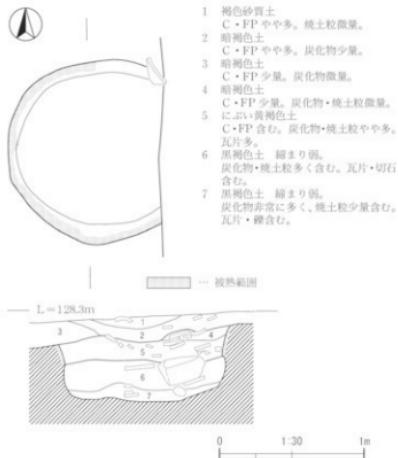


Fig.63 炉跡 (D-2205)

不明である。

**講堂** 18年度の調査で版築土の範囲が東西31.0m、南北24.5mであることが判明した。建物については、柱位置を示す遺構は検出されておらず、不明である。

**回廊** 昨年度の調査で東西規模が9.7mであることが判明した。南北規模については、今回の調査でB-3号建物跡が回廊であることが、確定的となった。この位置に南面回廊を復元すると、82.4mとなる。これにより、ほぼ正方形の回廊が復元可能である。なお、建物幅（梁行の柱間寸法）については、東面および西面で3.5～3.6m（12尺程度）という数値が得られていることから、北面・南面も同様の規模と推測される。これをもとにすると、桁行の柱間寸法は10～14尺にばらつくため、やや不自然さは否めない。今後の検討課題となろう。

**金堂北側建物（B-2号）** 西面回廊の内側2.6m、金堂の北側10.5mに位置する。地業の規模は、南北7.7m、東西10.2m以上となり、東西棟の建物とみられる。建物規模については、版築土中の瓦敷きが柱位置を示すものと考えられることから、これをもとに梁行2間（7.5尺等間）が復元可能である。

### （2）伽藍の設計

**設計基準** 回廊と金堂・塔の位置関係に着目すると、伽藍にはその造営にあたり詳細な設計があったことが窺える。回廊・金堂・塔それぞれの建物の芯を基準に、東西方向の配置間隔を計測すると、①西回廊～金堂22.7m（約76尺）、②金堂～中軸線15.3m（51尺）、③中軸線～塔15.0m（50尺）、④塔～東回廊23.0m（約77尺）となり、①・④と②・③はほぼ同じ数値となる。これにより、建物の芯および伽藍中軸線が、伽藍設計の基準となっている可能性が高いことが考えられる。この設計基準を踏まえると、金堂および講堂の規模について以下のように推測される。

**金堂規模の復元** 塔の芯を基準に金堂基壇の南北規模を復元すると（調査で確認された北辺を塔の芯で折り返して南辺を復元）、南北21.7mとなる。これにより、東西22.0m、南北21.7mの正方形に近い形の基壇に復元可能であり、建物は5×4間と推測される。ただし、この基壇規模はあまりに正方形に近く、やや不自然であるため、今後平面的な調査を行い確認することが課題となる。

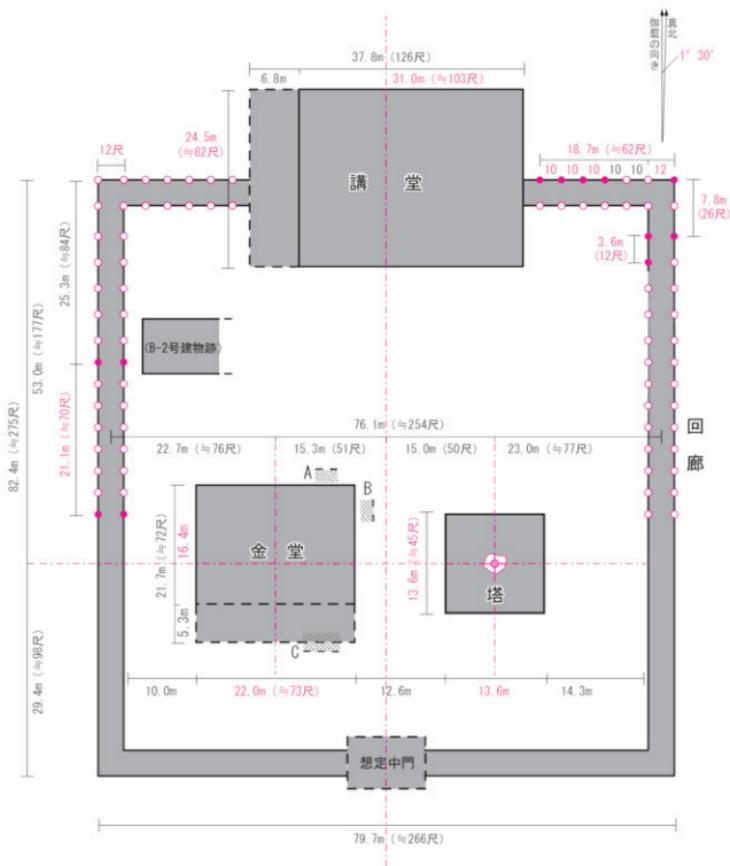
**講堂基壇の復元** 伽藍中軸線を基準に講堂基壇を復元し直すと、18年度調査より6.8m西へ延び、東西37.8mという規模になる。これにより東西37.8m、南北24.5mの基壇に復元可能であり、建物は7×4間と推測される。

### （3）建物の造営時期について

主要伽藍の造営順序については、これまでの調査成果により塔・金堂が先行して造営され、その後、講堂・回廊が造営されたと推測される（前橋市教委2007-2009）。また、今回行った塔基壇の断面調査では瓦は一片も出土していないが、金堂基壇断面調査の際には版築土中から瓦片が数片出土していることから、塔が金堂に先行する可能性も考えられる。なお、塔基壇は9世紀以降に改修されているとみられ、遺存する瓦積基壇はこの改修時の基壇である。それぞれの建物の造営年代は直接的な資料に乏しく決定しがたいが、塔と金堂は、今回確認された下層遺構との関係（7世紀前半の堅穴式住居跡を埋めて整地している）などから7世紀後半に造営されたと考えられる。講堂・回廊については、18年度調査で確認された回廊北東側の堅穴住居跡群との関係や、19年度調査で確認された回廊の礎石据え付け跡から出土した須恵器の器形を根拠に、8世紀前半段階で整備された可能性が高いと考えられる。

## 4 結語：今後の課題

今回の調査で南面回廊についてもほぼ確定できる遺構が検出されたため、回廊内の主要伽藍については中門を除き概ねその配置や規模を把握することができた。今後の課題としては、①金堂北側のB-2号建物跡の範囲と性格の解明、②中門の確認がある。①については、回廊内で対称となる東側に同様の建物が確認されれば、これ



## 凡例

- 長さの単位 … m と 尺 (1 尺=30.0cmで算出)。  
単位の表示が無いものは尺。
- 市子は調査で判明した数値。黒字は推定。
- …推定の柱位置。  
● …調査で確認された柱位置。
- A～C …金堂黒色土版張の範囲。

0 1:600 20m

Fig.64 山王廟寺伽藍復元図

が鐘楼・経藏になる可能性が高い。②については調査可能な場所は限られるが、中門が検出されれば、回廊内の主要伽藍はすべて確認されたことになり、今後の大きな課題となろう。

一方寺域については、これまで3ヵ年の調査で思うような成果は挙げられていない。寺域（寺院地）の広がりを確認するためには区画施設だけでなく、北方建物の性格を含めた中心伽藍外の建物・関連施設等の解明が必要と考えられる。このためには、トレンチ調査では限界があり、より広い範囲を面的に調査していく必要があろう。

## 【主要参考文献一覧】

- 石川克博  
伊勢崎市教育委員会  
井上唯雄  
上田市立信濃國分寺資料館  
浦林亮次  
岡本東三  
大脇潔  
川原嘉久治  
九州歴史資料館  
工藤圭章  
栗原和彦  
群馬県教育委員会  
群馬県歴史編さん委員会  
群馬県埋蔵文化財調査事業団  
群馬県歴史考古学同人会  
群馬町教育委員会  
上毛新聞社  
住谷修  
千葉県文化財センター  
津金澤吉茂  
角田文衛編、瀬川政次郎  
奈良国立文化財研究所  
奈良国立文化財研究所 飛鳥資料館  
福島武雄  
前沢和之  
前橋市教育委員会  
前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 1987 「山王庵寺の創建期について—秦弁八葉蓮華紋軒丸瓦をめぐって」『群馬史研究』26  
2002 「上植木庵寺・上植木庵寺古跡」  
2000 「山王庵寺の創建と衰微」『山王庵寺』前橋市埋蔵文化財発掘調査団  
1982 「信濃國分寺跡」  
1960 「瓦の歴史—法隆寺道瓦群における技術史の一試論—」『建築史研究』28  
1996 「東国の大分寺寺院と瓦」吉川弘文館  
1991 「研究ノート・丸瓦の製作技術」『奈良国立文化財研究所学報』49  
1999 「鶴尾」日本の美術392、至文堂  
1992 「西上野における古瓦敷設地の様相」群馬県埋蔵文化財調査事業団『研究紀要』10  
2002 「大宰府古行跡」  
2005 「觀世音寺—伽藍編」  
1979 「飛鳥寺・法隆寺の建立」『日本古寺美術全集』第一巻 集英社  
2004 「山王庵寺の石造物と塔頭」『信濃』56・9  
2006 「山王庵寺出土「放光寺」銘文字瓦をめぐって」『群馬文化』288  
1970 「上野岡分寺跡発掘調査報告書(昭和44年度調査概報)」  
1971 「上野岡分寺跡発掘調査報告書(昭和45年度調査概報)」  
1988 「史跡・野野分寺跡」  
1992 「史跡十三宝塚遺跡」  
1993 「上野岡分尼寺跡・上野岡分寺二寺中間地域」  
1999 「上西原遺跡」  
1986 「群馬県史 資料編2 原始古代2」  
1984 「中尾西」  
1987 「下東尾遺跡」  
1988 「新保遺跡Ⅲ、經沢遺跡」  
1990 「国分媛殿遺跡」  
1990 「鳥羽遺跡 L・M・N・O区」  
1992 「鳥羽遺跡 A・B・C・D・E・F区」  
1986~ 「上野岡分僧寺・尼寺中間地域」(1)~(8)  
1982 「第3回東古瓦研究会資料」  
2002 「上野岡分尼寺跡北辺遺跡」  
1997 「貴重な祈り 群馬の埋蔵文化財」  
1982 「上野瓦塗」西毛編  
1986 「千葉県立食土庵寺跡認証調査報告書」  
1983 「古代上野における石造技術についての一試論」[群馬県立歴史博物館研究紀要]4  
1991 「上総岡分尼寺」[新修国分寺の研究]第2巻 総内と東海道  
2002 「山田寺跡調査報告」  
2003 「古代の円筒道跡」I・遺構編  
1989 「日本古代の龜尾」  
1921 「日枝神社境内の大礎石」「上毛及上毛人」53号  
2001 「地域喪葬としての古石碑—山上碑と放光寺をめぐって—」『歴史評論』609  
1975 「文化財調査報告書 第3集」  
1976 「山王庵寺跡第2次発掘調査概報」  
1977 「山王庵寺跡第3次発掘調査概報」  
1978 「山王庵寺跡第4次発掘調査概報」  
1979 「山王庵寺跡第5次発掘調査概報」  
1980 「山王庵寺跡第6次発掘調査概報」  
1982 「山王庵寺跡第7次発掘調査概報」  
2007 「山王庵寺 平成18年度調査報告」  
2009 「山王庵寺 平成19年度調査報告」  
1995 「大屋敷遺跡II」  
2000 「山王庵寺・山王庵寺等V遺跡発掘調査報告書」  
2000 「上野岡分尼寺寺域確認調査」  
2000 「元總社七地遺跡・上野岡分寺尼寺寺域確認調査II」  
1983~97 「元總社光明神遺跡」I~XIII  
2000~05 「元總社貢海道遺跡群」元總社小見遺跡ほか  
2006~ 「元總社貢海道遺跡群」(1)~(20)  
1998 「よみがえる白鳳の寺、山王庵寺」『群馬文化』254  
1984 「山王庵寺の性格をめぐって」[群馬県史研究]20  
1994 「總社古墳群の形成過程」[東國古墳時代の研究]学生社  
1986 「上植木庵寺」[群馬県史 資料編2.]

写 真 図 版





1 塔跡基壇全景(25T・北から)



2 塔跡基壇の版築と外装の瓦積み(25T西壁・北東から)



1 25トレンチ調査区全景(南から)



2 塔跡基壇外装瓦積みの状況(25T・北から)



3 塔跡地業掘り込み部断面(25T西壁・東から)



4 版築剥離面で確認された掲き棒痕(25T・南から)



5 塔心礎据え付け穴断面(25T西壁・東から)



6 基壇周辺玉石敷の状況(25T西壁・北から)



7 玉石敷の接写(25T西壁・北から)



1 塔跡基壇周辺の整地の状況(25T西壁・北から)



2 25トレンチ調査区全景(北から)



3 住居跡(H-40)全景(25T・北から)



4 住居跡(H-40)断面(南東から)



1 24トレンチ調査区全景(西から)



2 塔跡西側の白色粘土層(24T・南西から)



3 塔跡西側の白色粘土層断面(24T・南西から)



4 塔・金堂間のIb層下遺物出土状況(24T・北東から)



5 金堂整地層とピット(P-2409)断面(24T北壁・南から)



1 27トレンチ調査区全景(北から)



2 B-3号建物跡版築土断面(27T・南西から)



3 B-3号建物跡の礎石据付跡P(27T・南から)



4 B-3号建物跡版築土面状況(27T・北から)



1 B-3号建物跡版築層断面(27T・西から)



2 B-3号建物跡版築層断ち割り状況(27T・南東から)



3 D-2702号土坑全景(27T・南から)



4 27トレンチ南側擾乱状況(西から)



5 27トレンチ南側東壁断面(西から)



1 28トレンチ調査区全景(北から)



2 H-37号住居跡(28T・東から)



3 H-37号住居跡P柱穴遺物出土状況(28T・南から)



4 H-38号住居跡全景(28T・北西から)



5 H-38号住居跡竪・貯蔵穴(28T・南西から)



1 29トレンチ調査区全景(南から)



2 30トレンチ調査区全景(南から)



3 0-1全景(30T・東から)



4 I-1全景(30T・東から)

5 B-4号掘立柱建物跡全景(30T・東から)



1 31トレンチ調査区全景(南から)



2 I - 1号井戸跡断面図(31T東壁・西から)



3 I - 1号井戸跡遺物出土状況(西から)



4 I - 1号井戸跡礎石出土状況(北から)



5 南回廊版築全景(31aT・北から)



6 南回廊版築層(31aT・東から)



1 22トレンチ調査区全景(北から)



2 B-2号建物跡X-2213瓦敷(22T・南から)



3 B-2号建物跡X-2214瓦敷(22T・南から)



4 B-2号建物跡全景(22T・北から)



1 B-2号建物跡版築層断ち割り状況(22T・南東から)



2 地業南側掘り込み部断面(22T西壁・東から)



3 版築層接写(22T西壁・東から)



4 版築層北側断ち割り状況(22T東壁・南西から)



5 地業北側掘り込み部断面(22T東壁・西から)



1 22トレンチ調査区全景(南から)



2 H-39号住居跡断面(22T西壁・北東から)



3 H-39号住居跡P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>柱穴(22T・南東から)



4 P-2204号ビット全景(22T・南東から)



5 P-2204号ビット断面(22T・南西から)



6 O-2202全景(22T・西から)



7 O-2202断面(22T西壁・北東から)



1 22トレンチ南側遺物出土状況(北から)



2 炉跡(D-2205)全景(22T・南から)



3 炉跡(D-2205)遺物出土状況(22T・西から)



4 炉跡(D-2205)断面(22T・西から)



5 23トレンチ調査区全景(東から)



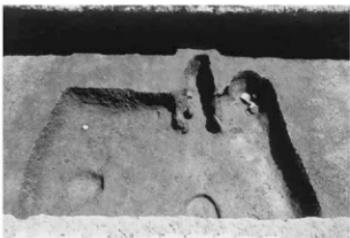
6 23トレンチ西側北壁断面(南東から)



7 JD-2301号縄文土坑全景(23T・北から)



1 21トレンチ調査区全景(北から)



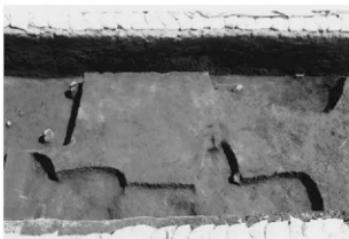
2 H-30号住居跡全景(21T・西から)



3 H-30号住居跡(21T・西から)



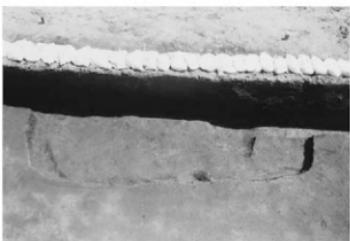
4 H-31号住居跡全景(21T・西から)



5 H-32号住居跡全景(21T・西から)



1 H-33号住居跡全景(21T・西から)



2 H-34号住居跡全景(21T・西から)



3 21トレンチ調査区南側全景(南から)



4 0-1遺物出土状況(21T・南から)



5 32トレンチ調査区全景(32T・南から)



6 H-36号住居跡遺物出土状況(32T・南から)



7 日枝神社前で記念撮影



Fig.21-1 表



Fig.21-1 上面



21-2 表



21-2 裏



21-3 表



21-3 裏

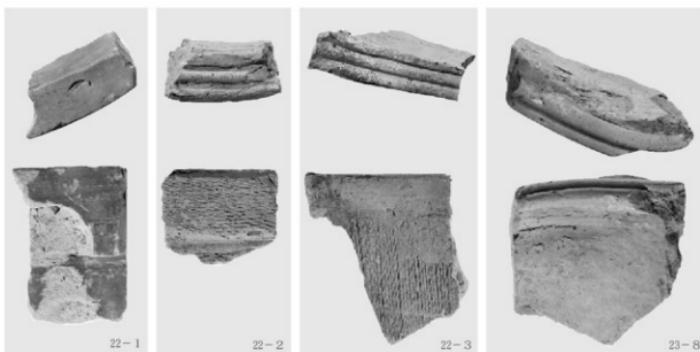


21-4 表



21-4 裏

平成20年度調査出土軒丸瓦



22- 1

22- 2

22- 3

23- 8



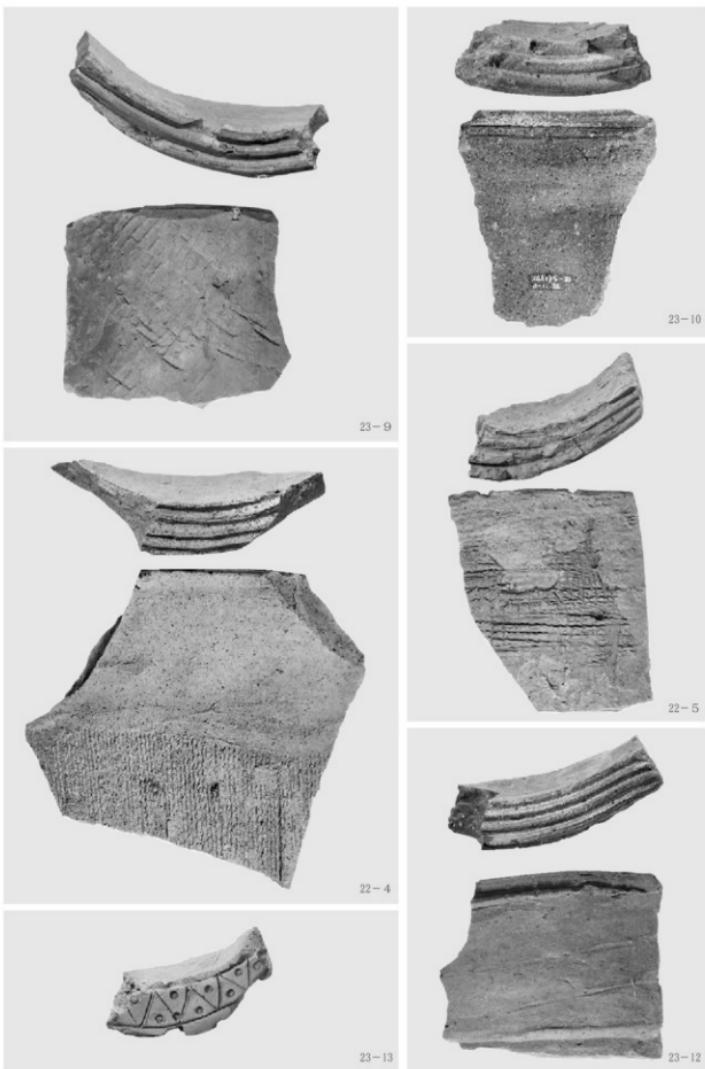
23- 7 凹

23- 7 凸

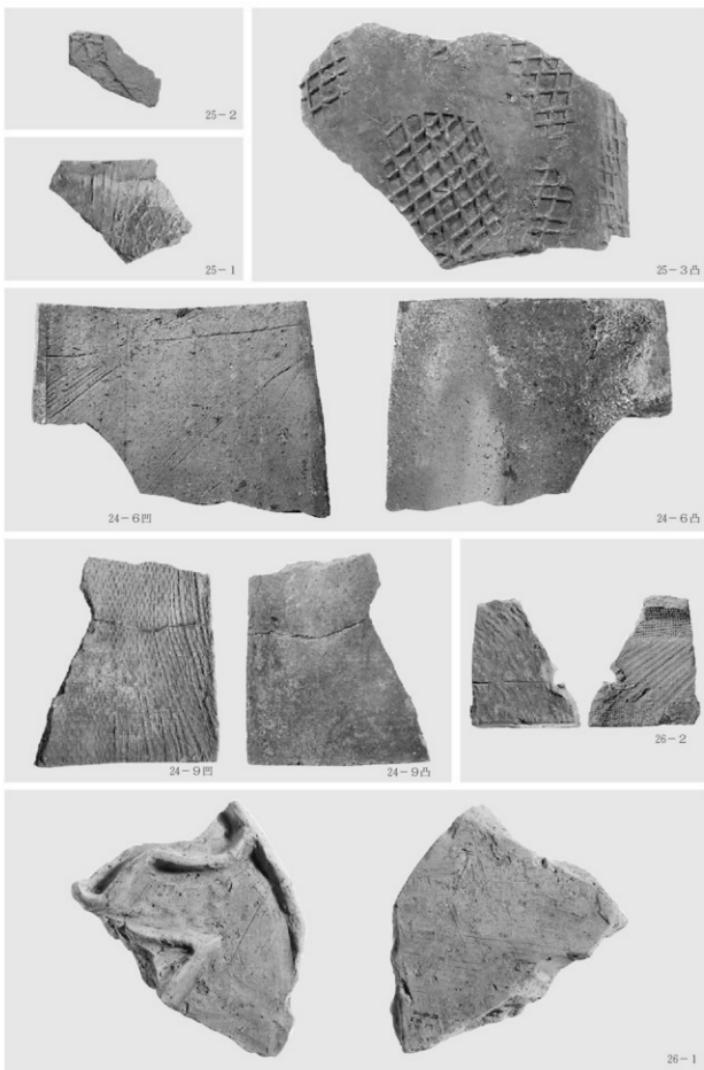


23- 7 瓦当面

22- 6



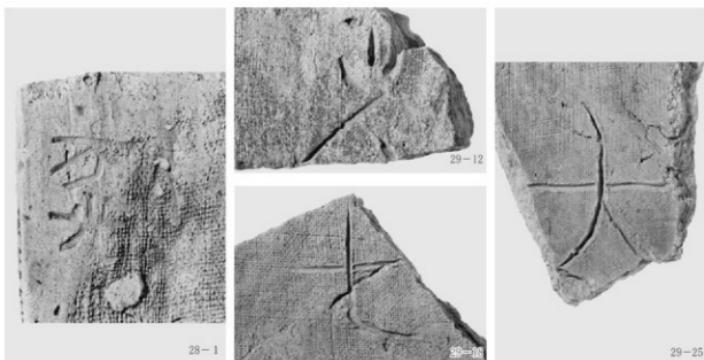
平成20年度調査出土軒平瓦2



印板痕跡、丸・平瓦、道具瓦



文字瓦 1、波状紋など

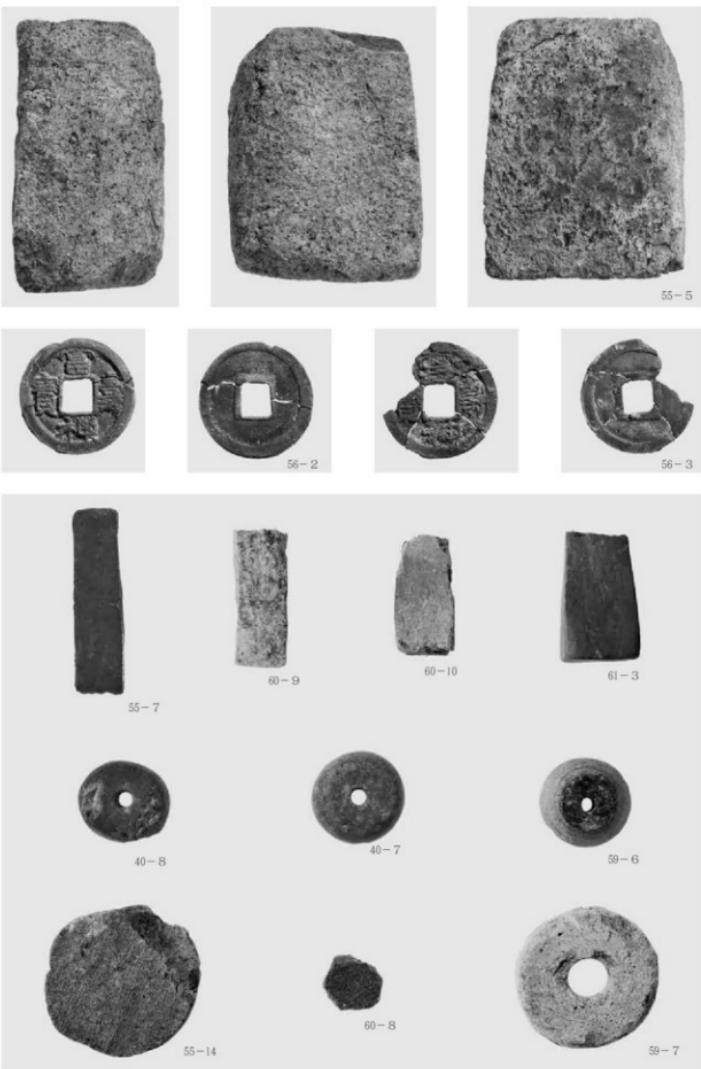


30-34  
(H 19山王報告  
Fig.34-32)

文字瓦2



トレンチ出土遺物 1



トレンチ出土遺物2



## 抄 錄

フリガナ	サンノウハイジ
書名	山王庵寺
副書名	平成20年度調査報告
卷次	
シリーズ名	山王庵寺範囲内容確認調査報告書
シリーズ番号	III
編著者名	池田史人・綿貫綾子・栗原和彦・山下成信・福田貫之
編集機関	前橋市教育委員会文化財保護課
編集機関所在地	〒371-0018 群馬県前橋市三保町二丁目10-2
発行年月日	西暦2010年2月18日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		位置 (旧日本測地系)		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
山王庵寺跡	前橋市總社町 總社2408番地 ほか	10201	20A135	36°23'53"	139°02'06"	20080901 ～ 20081217	350.5m <sup>2</sup>	範囲確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な検出遺構	主な出土遺物	特記事項
山王庵寺跡	寺院跡	古墳～奈良・平安	塔跡・回廊跡・建物跡（版築土）2棟、瓦溜り、堅穴住居跡11軒、溝跡4条、土坑32基、ビット18基	瓦（軒丸・軒平・丸・平・道具瓦）、土師器・須恵器・灰釉陶器・石製紡錘車・鉄滓・金属製品・基壇化粧用切石	塔跡：基壇外装は瓦積み。掘り込み地業後、白色粘土で整地。基壇規模は一辺13.6m、周囲に玉石を敷設。回廊跡：南面回廊と思われる版築を確認。伽藍規模は東西79.7m、南北82.4m。金堂北側の2号建物跡：建物の掘り込み地業規模は南北7.5m、東西10.2m以上。

山王廃寺範囲内容確認調査報告書III

## 山 王 廃 寺

平成20年度調査報告

平成22年 2月10日印刷

平成22年 2月18日発行

編集・発行／前橋市教育委員会文化財保護課

印刷／朝 日 印 刷 工 業 株 式 会 社